精神分析

昭和八年七月七日第三種郵便物認可
昭和八年九月廿五日印刷納本
昭和八年十月一日發行
毎月一回一日發行

昭和八年十月

第六號

社會思想 犯罪心理 研究號

——（裏面へ續く）——

東京精神分析學研究所出版部

時評

資料

講座

探訪

內外彙報

本研究所關係者名簿（いろは順）

●印　客員　　＊印　特別誌友　　△印　雜誌委員

岩倉具榮　△田内長太郎　●内田勇三郎　●山村道雄　荒川龍彦
△伊東豐夫　田内貞喜　●上野陽一　＊山田一郎　＊佐藤政宏
井原錄郎　＊高橋退藏　海野十三　●丸井清泰　佐藤基
＊池田多助　高崎能樹　則近保良　＊丸山季夫　齋藤長利
△長谷川誠也　＊高村光太郎　小野田幸雄　△松居桃多郎　●木村廉吉
長谷川浩三　高水力太郎　小柳津邦太　松田俊武　●宮田修
●早坂長一郎　武田忠哉　小倉清三郎　●慶大神經科教室　＊水野章
＊本田了惠　＊竹之下學山　奥村博史　藤木義輔　＊島崎勝次郎
＊堀濱吉雄　瀧川華子　＊奥本島田　近藤石象　下山善高
時平佐喜雄　●塚原政次　＊太田繁子　小山良修　霜田靜志
＊遠山盛治　＊那須章彌　△大槻憲二　＊小林忠藏　●諸岡存
千葉廣洋　中山太郎　＊大橋正二　△小林五郎　＊菅村氏
川上水夫　中島末治　＊大岡正己　小松德　●杉田直樹
●金子準二　＊中西定雄　＊尾形孝治郎　●古澤平作
●高島平三郎　△長崎文治　●久保良英　江戸川亂步
＊吉田正　永田道彥　矢部八重吉　●雨宮保衞

犯罪者の心理

長谷川誠也

文化運動の一面は、一人の犯罪者もない社會を作ることにあるのだが、その理想の實現は、果して可能であるかどうかは分からない。と言つて、その實現のための努力は、一日一刻も怠つてはならぬ。だから、社會學、經濟學、教育學、生理學、衛生學、あるひは優生學などの各方面から、實際の事情に適應する研究をなすのは、非常に結構なことであり、世人は、それらの研究に從事する學徒に、感謝の意を表さなければならぬ。ところで、人の生理的と環境との方面だけの調査や、研究をもつて、犯罪を防止しようとするのは、あだかも毒水の源を忘れて、徒らに河岸の改修に苦心するやうなものだ。犯罪には、種々な近因のあることは明らかだが、その近因を眞因と考へてはならぬ。犯罪者には、複雜な心理があるのだから、それを解剖して見なければ、惡の源泉は容易に分かるものではない。またその心理を研究する場合にも、明白な意識的過程だけを見てゐるのでは、眞因を探ぐりあてることはできまい。犯罪者の意識には、修飾もあり、欺罔もあり、道理立てもあり、抵抗もあり、抑壓もあり、隱匿もあるのだから、彼の告白の額面價格には、無條件の信用をおかれない。犯罪研究者は、この告白の表皮を剝いで、暗黑のうちに動いてゐる心理を摑み出して見なければならぬ。

暗黑のうちに動いてゐる心理、言ひ換へれば無意識的心理は、犯罪者自身も氣付いてゐないものであらうから、これを摑み出すことは、簡單な仕事ではない。しかし、これを取上げて見なけば、犯罪防止の研究も、牢獄改良案も、

免囚保護の事業も、あるひは教誨師の苦心も、十分の效果を擧げることはできないから、それ〴〵の研究者は、この心理に着眼するところが無ければならぬ。ここで、無意識的心理の研究者達が、極めて當然な容喙をなすのである。ところで、筆者は犯罪研究については何等の知識をも持たぬ者であるから、ここに自説を述べることはできないが、「個人心理學」を主唱するアドラーの説は、この研究に從事する人々ばかりではなく、一般世人にとつての良い參考であると思ふから。その要點を紹介しよう。これはアドラーが、一九三〇年、ニューヨークの刑務所事業委員總會の席上において講演したものゝ要旨である。たゞし、アドラーの他の著述によつて補足した點もあり、また、彼の學説を毀損しない限りにおいて、多少の私見を加へた點もある。

犯罪者は人生の失敗者であるが、生存上の失敗は、ひとり彼等に限るものでないことは明らかだ。扱ひにくい兒童、神經患者、精神病者、變態性慾の者、アルコール中毒に惱む者、いづれもみな人生の失敗者である。彼等は、現實界における當面の問題を適宜に解決しつゝ生存し得ない人々であつて、犯罪者とその他の失敗者との區別は、種々の失敗者が、問題の解決に惱んで挫折してしまふのに反して、犯罪者は、同場合に挫折することなく、却つて活動する點にある。そこで、これらの失敗者に共通する心理は、社會的關心の缺乏であつて、そのために彼等は、全社會の一員として生活し得ないのだ。この場合に、活動力を喪失してしまふ者が精神病者、神經患者、變質者などであり、なほ旺盛な活動力を保有してゐるものが犯罪人となるのだ。この社會的關心の缺乏、もしくは微弱といふことは、あらゆる不健全な人間を研究する場合に考慮しなければならぬ要點である。

アドラーの言ふ社會的關心とは、社會の一員としての自己といふ觀念に基づくものである。別方面から言へば、人々は互に協力して働くことなしに、各自と社會全體との幸福を增進することはできないといふ意思である。若し心理に、この關心が缺けてゐるならば、その心は、あだかも調和を缺いてゐる團體と同樣で、健全な活動は望まれない。この事は、多言するまでもなく明らかであるが、お互に考へなければならぬことは、何故に社會的關心の缺けてゐる

やうな人間が出て來るのか、といふ問題である。これを解くことが、犯罪の件數を減ずる、卽ち社會改良の方法を立案する基礎となるのであるが、それを硏究するに先立つて、われ〳〵が心得ておかなければならぬことは、その關心の缺乏は、短時日間の事情に由るのではないと言ふ事實である。支那上古の人が「積善の家には、必ず餘慶あり。積不善の家には、必ず餘殃あり。臣、その君を弑し、子、その父を弑するは一朝一夕の故に非ず。その由來する所の者漸なり、これを辯ずるに早く辯ぜざるに由るなり。易に曰はく、霜を履んで堅氷至ると。蓋し順を言ふなり」（周易、文言傳）と言つてゐるやうに、犯罪の本源は、遠い處にある、社會的關心の缺乏は、一朝一夕の故ではないのだ。若しこの關心の缺乏が、近い處の事情に由るものならば、その事情を改善し、あるひは芟除することは困難でもなく、從つて犯罪數を激減させることも、さほど難事ではなからうと考へられる。しかし、事實上、犯罪件數の減少しないところを見ると、近處の事情の調査は、その勞力に報ゆるだけの效果ないものではなからうか、と考へざるを得ない。かやうな調査の必要なことは言ふまでもないが、それと同時に、深遠な處にある原因の探究を怠るならば、この種事件の減少を見ることは、戰爭絕滅を期待するよりも、さらに不可能であらう。

犯罪の原因は、深遠な處にあるものだと聞かされると共に、誰しも先づ考へつくことは遺傳である。犯罪の原因には、遺傳を數へなければならぬと言ふ學說は、一般に知られてゐるばかりではなく、昔から世人は、犯罪人の血筋を嫌つてゐる。ところで、心理學を基礎とする犯罪硏究者から、この學說を評價するならば、どうであるか。それに眞理の含有されてゐることは明らかだが、さりとて、これを唯一の論據として犯罪を硏究し、その絕滅を期することは非常な見當違ひであらう。なぜなれば、若し生理上の遺傳に犯罪の原因があるとすれば、犯罪を防止する方法の立てやうがなく、また、若しこれを立てるとすれば、かやうな惡遺傳を有する者を根絕させるより外に、良い方法はなからう。しかし、そんな事は、到底實行されるものでもなく、また、遺傳が百パーセントまで犯罪の原因であるといふ證據もなく、さらに、遺傳說に據つて說明し難い犯罪の例も無數にあるのだ。だから、硏究者は、遺傳說を參考にすることは差支へないが、これを金科玉條とすることは避けなければならぬ。

次ぎに、内分泌腺その他の器官の缺陷に、犯罪の原因を索める說もあるさうだ。しかし、今日の彼は、この說に重きを置いてゐない。アドラー自身も、曾てこの事について說述したこともあるさうだ。勿論、かやうな器官の缺陷が變質または犯罪の原因となつてゐる例はあるが、同時に、同樣な缺陷ある人で、しかも誠實健全な性格の者もあるのだから、この學說も、一つの參考に外ならぬものだ。ただし、器官上の缺陷は、醫術と教育とによつて救治し得るといふ事と、健全な體質の兒童でも、養育法に過失があれば、器官上に缺陷を生ずる憂ひがあるといふ事とは、常に注意されなければならぬ。

あるひは說く人もあらう。犯罪は心理上の遺傳、または生理上の缺點から生ずる心理上の不健全に由るものであると。ここに至つて、問題は心理學の範圍に移るのであるが、心理學上の遺傳といふことは、すこぶる曖昧な語であり、生理上の缺點云々の說は、心と身との關係を詳細に研究した後でなければ、確信をもつて言ひ得ないものであらう。心理のどれだけの部分が、遺傳であるか、あるひは生理上の作用の產物であるかは、容易に計量されるものではない。だから、研究者としては、遺傳說や、心身關係の問題などから離れ、心理學の領域內において考察を重ねる方が穩當であらう。

アドラーの考察を一言にすれば、犯罪の原因は、不健全な生活計畫にあるのだ。この生活計畫の意味を知る前に、われわれの知つて置かなければならぬことがある。(一)心理の創造的活動は、幼少の頃から始まる。いかに幼少な子供の心理でも、ただ受動的に働いてゐるのではなく、一面においては、太いに創造的に活躍する。(二)幼少の者が、痛切に感ずることは、自己が生理上および心理上、成人に比して劣小であるといふ點である。幼者は、すこぶる快活に、のんきに遊び廻るものだと觀察するのは、淺見者のすることだ。幼少年は、常に偉大、剛强、賢明たること、即ち生理的にも、心理的にも、優越者たることを切望して止まないものである。しかし、現實界は、この欲望を短時日內に滿たさないから、彼等は恒に不愉快な劣等感を懷いてゐる。と言つて、彼等は、不快な感想を懷いたままで、忍

從してゐるのではない。彼等は、何等かの補償作用によつて、その欲望を遂行しようとする。そこで、生理的方面における缺陷が、他の器官によつて補償されるやうに、心理上では、創造的活動によつて、この願望が成就される。別方面から言へば、これによつて、劣等感が除かれるのだ。それは、どんな方法であるか。創造的空想によつて、生活計畫を構造することである。即ち、自己の優越を誇り得る生活狀態を、空想的に假作し、そこに自己の滿足を追求するのである。童話の或種類、または幼少年の遊戲の或形式に、この空想的虛構世界の反影が、明白に顯れてゐることは、例證するにも及ぶまい。念のために一言して置く。空想と想像とは、別々に見ておいてもらひたい。

生活計畫は、もと〳〵現實に卽して構成されるものでなく、むしろ現實の眞相を少しも考慮するところなく、全く製作者自身の好みを唯一の方針として工夫されるものである。さうして、これは製作者の無意識に祕藏される。なぜなれば、製作者は、その生活計畫が現實と一致しないことを熟知してゐるからだ。ここに、この計畫の危險性があるのだ。危險性とは、それがその製作者をして、變質者、もしくは犯罪者たらしめることである。無意識の內容は、孤立してゐるものではなく、絕えず意識的活動に影響を及ぼすから、不健全な生活計畫が、現實世界における活動の一部を支配することは、くだ〳〵しく說述するまでもなく明白であらう。

人は生れると同時に母との關係を生じ、次いで父、兄弟姉妹、親戚、友人、先輩、異性等との關係を結ぶのだから生後四五年の間に、早くも或形の生活計畫が構成されると見なければならぬ。言ふまでもなく、これは年月を重ねると共に、擴張もされ、修正もされるが、その成立と修正とが、全く自己本位で、現實の眞相と一致しないならば、不健全たるを免れない。では、現實の眞相とは何にか。個々の人間は、協力を守つて活動しなければ、安全また幸福な生活を營むことができない、と言ふ事實である。この嚴然たる事實を無視する生活計畫、卽ち社會的關心の缺乏してゐるものが不健全であるのだ。だから、父母または敎育家としては、幼少年の生活計畫を見取ることを怠つてはならぬ。さうして、それを爲すには、未成年者の行動、遊戲、空想、夢想などを分析するより外に、適當な方法はあるまい。こゝに精神分析の效用があるのだ。さて、一たび彼等の生活計畫を覗ひ知つてしまへば、それを善導すること

は、さほどの難事ではない。善導とは、その計畫を補ふに、社會的關心をもつてすること、言ひ換へれば、現實感と責任感とを養成すると共に、他に對する憎惡の感情に代へるに、善意をもつてすることである。さらにそれを一言にすれば、不健全な權力意志を破壞して、和衷協同の精神を堅實にすることである。

不健全な生活計畫の持主の心理の特徴は何んであるか。それは犯罪者の心理に、鮮明に現れる。アドラーが研究したところに據ると、犯罪者の心理には、下記のやうな特異な點がある。もちろん、これらは重要なものだけであつて詳細に研究するならば、この他、なほ幾多を數へ得るだらう。

セント・ヘレナのナポレオンは「若しおれが最初スペインへ行き、それからロシアへ向つたならば、全世界を征服してゐたらう」と言つたさうだ。この「若し」と言ふ假定を立てることは、刑務所に收容されてゐる者の大多數に共通な心理である。「若し」を立てることは、心が虛構、假作の世界に引きずられる證據である。「若し云々」とか、「宛然」觀とか、「假定」とかは、それ自身において何等の深義ないにしても、實の人生には、深刻な影響を及ぼすものだ。さうして、その影響の善惡は、「若し」の立つ所の世界の性質如何に由る。その世界が、現實と合致する所があれば、影響は善となり、その反對ならば、社會的關心の缺けた不健全な心理が起こり、終には惡行の果實が生ずるのである。犯罪者は、徒らに「若し」を考へて、現實を顧みることがないのだ。

犯罪者は、惡い意味の英雄崇拜の思想を持つてゐる。現實を無視し、協同一致の活動を除外した生活計畫において自己の優越感を滿足させようと言ふ心理は、ここに顯出する。彼等は、盜跖や、石川や、ルパン、その他、殘忍暴虐な不逞の徒を英傑と見るばかりではなく、自己が奸邪惡行のレコード破りをやつて、優越の名聞を得ようとする。しかし、現實の世界における彼等の態度は、英雄的どころか、その正反對に甚しく卑怯である。彼等は公明正大な行動に出づることがなく、常に人の罅隙を狙ひ、弱者に向ひ、無防備の處に活躍する臆病者である。なほ、迷信深く、暗黑に恐れ、孤獨に堪へぬのも、彼等に共通する性質である。こゝに、世の父母または幼童保護者たる人が愼密に注意

しなければならぬ點がある。それは、幼少年が、やゝもすれば不逞の人間を、英雄のやうに見上げる心理である。保護者の位置にある人々は、無法な人物の異常な行爲は、豪傑模倣の貧弱愚劣な心理から發生するものに外ならぬことを、深切に説明してやらなければならぬ。

一體に犯罪者は、着實な努力、あるひは漸を追うて進む行動を缺いてゐる。このことは、彼等の考方を見れば、明らかに知られるだらう。彼等の思考方法といふものは、推理の順序をたどるのではなく、或事物から、その正反對な他の事物へ、一足飛びに移るのである。例へば、貧困から直ちに富貴へ、生から直ちに死へ、禁慾から直ちに放逸へ建設から直ちに破壞へと言ふやうに飛び移るのがそれだ。適切な例は、わが講談にある「鑄掛けの松」の考方である。彼は、樂しさうに舟遊びをしてゐる者を眺め、急に氣が變り、商賣道具を川に投げ棄てゝ盗賊になつた男である。また、悪人の言ひ草である「太く短かく」といふ語は、「細くとも長く」といふ語の對偶となるもので、一足飛びの考方から作られたものゝ一例である。一方からその對偶へ直接に考慮を進めることは、未開人や、幼少年に、しば〳〵見られるものであるが、民族としても、一個人としても、教養の進むと共に、その考方は無くなるのが普通である。ところが、犯罪者には、推理の努力を惜しむこの考方が旺盛であるのだ。既に考方がさやうであるから、感情も、情緒もまた同樣である。

以上の心理の特徴を通じて眺めると、犯罪者は現實の世界に生活してゐないことが分かる。彼等は架空の、無用な世界において、最も少い努力をもつて、自己の優越慾を滿足させようとする者である。

虛構の生活計畫は、生後四五年の間に既に作られ、不幸にして、それが不健全な性質のものであれば、犯罪の因となる。だから、犯罪の原因は遠い處にあると言ふのだ。しかし、見方によつては、甚だ近い處にあると言へる。なぜなれば、犯罪者の心理に、現在それが動いてゐるからだ。

ところで、どんな幼少年が、不健全な生活計畫を假作するか、と言ふことを重大な研究問題としなければならぬ。これは、詳細に研究すれば、大冊の書となるほどの問題であり、また、今後ます〳〵研究を進めなければならぬので

ある。そこで、アドラーが述べてゐる所によると、第一に、甘やかされて育つ兒は、健全な生活計畫を立てない。彼は、自分一人の世界を見て育ち、自己の努力と協力との意義を會得する機會が少いから、社會的關心を持たぬやうになつてしまふ。第二に庶子——ここに繼子を數へ入れても宜しからう——これもまた純空想の世界において自己の慾求を滿足させようとする傾向が强い。實の父母の愛を受けない者が、現實の世界についての興味を失ふことは、多辯するまでもなく明白である。第三に、容貌の醜い兒、あるひは不具の兒も、社會的關心を失つて、架空の世界に彷徨する傾きがある。これまた當然の成行であらう。醜い兒や、不具の子供は、とかく世間から歡迎されないばかりか、初めから相手にされないのだ。彼等が祕藏の空想社會に遊ぶのに、なんの不思議があらう。たゞし、容貌醜悪な犯罪者を研究して、犯罪型の容貌を說くことは早計である。犯罪者には、容貌の美しい者もあるのだから、ロムブロゾー說などは、餘程用心して聞かなければならぬ。

かやうに、アドラー說を聞いて見ると、犯罪防止については、父母および幼稚園並びに小學敎師の責任の一そう重いことを、痛切に感ぜざるを得ない。殊に、母親の責任はさうであると思ふ。(をはり)

マルクスとフロイドとを比較して所謂轉向心理に論及す

大槻憲二

マルクスとフロイドとは現代世界の思潮を動かす二大惑星である。一は社會經濟の匿された事實を揚抉し、他は人間の深い無意識心理の眞相を暴露して、人間を動かす根本動力の機制を闡明した。このことは單に筆者の一家言でなく、既にバートランド・ラッセルを始め、幾多の人々の認めてゐるところである。

そこでこれ等二巨人の思想の關係、相似、矛盾、相互批判などを研究して見ることは、我々にとつて非常に興味があるばかりでなく、また緊急なことでもなければならない。

一、ユダヤ人の特徴

まづ第一に我々の注意を牽かずにおかぬ事實は、彼等が共にユダヤ人であると云ふことである。西洋歴史の傳統の中に育たない我々としては、ユダヤ人であるが故にとて何等の偏見を抱く氣持にはならないで、寧ろ學界に幾多の偉材を輩出したこの民族の功績の內に更に重大なる寄與を加へた二人を讃仰したい心持ちにさへなるのである。現代のフランスに於いて演劇が益々殺伐になり喧騒なものとなる傾向がある、さうしてそれはユダヤ系作家の隆昌になつて來たゝめであるとキリスト教系作家は難じてゐるさうである。これに對しユダヤ系批評家たちは、かう云つて應酬してゐるさうである。現今フランスでの流行作家たるユダヤ系作家は、實はイスラエルの傳統や生活や思想からは全然卒業してしまつた人々で、單にユダヤ人の本質たる『必要に應じて善處する』本能だけ持合せてゐる、さう

してこの本能のために彼等作家が名聲を博したのであつて、彼等の作はユダヤ思想を代表するものではなく、寧ろ現代フランス大衆の要求を如實に代表し充足したに過ぎないと。

議論の當不當はともかくもとして、ユダヤ人の本質が、惡く云へば『殺伐にして喧騷』であることゝ、『必要に應じて善處する』ことゝにあることは事實のやうである。もしこれを換言するならば、『殺伐にして喧騷』とは闘爭的の義であり、『必要に應じて善處する』とは現實的と云ふことになる。闘爭的と現實的とは、なるほどマルクス思想の特徴でもあるが、フロイドの特質でもある。さうして同時にキリスト教の平和思想と、『弱者道德』(ニイチエの所謂)と、死後への信仰と相反するものである。私自身も、もし平和の退屈と闘爭の緊張と、弱者の道德と强者のそれと、死後への信仰のために現世を醉生夢死に送ることゝ、死後を信ぜず寧ろ現實生活を充實せんとすることゝ何れを擇ぶかと問はれるならば、私は勿論後者に團扇を上げるほどユダヤ的に出來上つてゐる。

これは寧ろ、フランスのユダヤ系批評家の云ひ草ではないが、現代世界大衆の要求であつて、必ずしも一二ユダヤ系作家や思想家の手柄又は責任とは云へないであらう。卽ち、現代は、世界何れの國民と雖も、その思想は闘爭的となり、現實的となつてゐると云つて、差支へないのである。その闘爭と現實との意味の廣狹深淺の別は、ともかくもとして——。

二、現實正視としての二つの暴露主義

次に氣付かれることは、兩者ともに大膽にして深刻なる暴露者(暴露の分野こそ違へ)であると云ふことである。我々の精神が到底抑壓し得ざることを無意識內に抑壓せんとしてそこに神經症の根源のあることをフロイドが道破したやうに、マルクスはまた、到底彈壓され終せ得ざる直接生産者が、窮極的に支配者を顚覆するであらうことを辯證法を以て論斷した。

下剋上と云ふことは、日本の歷史に於いても最も重大なる罪惡の一つとして、卽ち最も畏るべきタブウとして、人

民の間に教へられてゐたが、而も實際の歴史は常に下剋上の連續を以て編まれてゐる。源、北條、織田、明智、豊臣、徳川等の群雄纖起の事情を見るものは何人もこれを否定することは出來ない。然るに、これは最も禁斷されたる思想で、この事實が社會を支配すると道破する程の勇氣ある學者は殆どわが國にはなかつた。

家庭に於いても父母は神聖不可侵の存在として子女の上に君臨すると云ふのが、東洋の家族主義の美點とされてゐたが、而も實際の子女を見ると、父母はその最も崇拜する對象であると同時に、而もその反面に於いては最も反逆の對象となつてゐるのである。崇拜と反逆、愛と憎——これ等相矛盾する二つの要素が平然一つとなつて無意識內に存在することを精神分析はアムビヴレンツと云ふ。斯學の最も重大なる發見の一つである。

このアムビヴレンツはその完全なる形に於いて意識に表れ出づることが禁壓されてゐるが故に、傳說民話に於いて歪められた形となつて現れてゐる。桃太郎に征伐された鬼、牛若に飜弄された辨慶、一寸法師に退治られた怪物などはみな、歪められた父の觀念である。アムビヴレンツの憎の面から見た父親の姿である。

精神分析者がロシアの革命を以て民族的な父殺しであると解釋したとしても、それはその事自身が善いとか惡いとか云ふのではなく、冷靜なる科學的判斷であるに外ならないのだ。實際、觀念上の父殺し、代償上、象徵上の父殺しは、さきにも述べた通り、歴史に於いて不斷に無數に實演せられ、反覆せられてゐることなのだ。而も現代に於いてこの父または父代償への反逆が一層露骨であり、顯著であり、時には必要以上にまでも及んでゐるとすれば、それは慥に多くの人々の云ふやうに、マルクスが人類の長養し來つた反下剋上的思想を粉碎し、この實體虛しくなつて居たタブウの敢へて恐るゝに足りないことを知らしめたゝめでもあらうが、また他面には人類の現實意識が生長して、未來よりも現世の充實を重要視するやうになつて來たゝめでなければならない。

このやうに社會的禁斷は一方に放棄せられるやうになると共に、他方また街上の令孃は裾を輕くし袖を短くして連りにその肉體を誇示し、舞臺上の優人は脚線の美を享樂せしめんとして愈々その肉色の長脚を觀客の頭上に亂舞せしめる。エロ・グロ・ナンセンスは深刻なる生活苦、悲壯なる無產者解放運動と分離し難き一體となつて行進しつゝあ

る。甚だ奇怪なことに思はれるかも知れないが、これ等はなみ現代のマルクシズムとフロイディズムとが代表するところの闘争主義、現實主義、暴露主義、（實相正視主義）の現れに外ならないのである。

三、兩者提挈の必要

このやうにマルクシズムとフロイディズムとは共通の特質を有するものであるが、固より兩者はその關心の對象を、分野を異にしてゐるのであるから、それ〴〵の方途に於いて互に他を批判し、相克し、補足し、幇助する點があるに相違ない。相互の批判と撞着とに就いては後に述べるとして、こゝにはフロイディズムとマルクシズムとの相互補足に就いて一言して見ようと思ふ。

嘗て左翼陣營から僧侶の方面へ轉落して行くものゝ續出した時代があつた。宗教は阿片なりと呼號して最もその魔力を封ぜんとする宗教に對してマルクシズムはたゞ反宗教同盟のやうな外面的『運動』を起し得るに止まつて、深くその根源へ突入することが出來ず、却つて自分の輕蔑する宗教のためにその大切の闘士を生取りにされると云ふは、誠に意氣地のない話と申さねばならぬ。左翼文士某々はこの『坊主化の傾向』を難じ、左翼陣營のために大いに自警の鐘を叩いてゐたが、たゞ鐘を叩くのみで少しもその傾向を防遏すべき方策は立たないのである。觀念形態は物質生活に依つて決定されると云ふマルクシズムの根本的命題はこの場合どうなるのであるか。マルクシストの答辯を承りたい。

ところで精神分析もまた宗教を否定する者である。精神分析に依れば、宗教は幻想である。人類の神經症、强迫症の造り上げた錯覺である。

戀愛、事業、美の享受、物質慾など、人間が幸福になれる道はいろ〴〵あるのに、宗教は幸福獲得と不快逃避とへの自分流の道を萬人に同樣に押付けることに依つて各人にそれぞれ適應した生き方を封じてしまふ。宗教の敎へる生き方と云ふのは現實人生の價値を低いものとし、それへの正視を狂はしめることに存するのだ。つまり知力を鈍らせる

ことを豫想するものだ。このやうな犧牲を拂ひ、精神的嬰兒病を强ひ、大衆を一種の狂氣に導くことに依つて、宗教は多くの人間を個々の神經症から救ふことが出來たのである。併しそれ以上の事は出來ない。前にも云つたやうに、戀愛、事實、美の享受、美の創造、物質慾などは人間を幸福にするものではあるが、併しこの道を辿れば必ず幸福になれることが確だと云へるものは一つもない。併しこれ等の道に於いてはとにかく精力は現世の事に用ゐられるのでよしんばそれが途中で失敗に終つてもそれ自身に於いて無駄にはならない。併し死後の幸福と云ふやうな幻想のために用ゐられた精力はそれ自身に於いて全然浪費である。よしんば、その幻想に浸つてゐる內は無上に幸福ではあらうとも――。

フロイドは宗教が從來の文明史上に於いて果して來た役割を認めるに吝ではないが、今や時代は一九三三年となり宗教的幸福に逃避することは人類のために決して有益でないことを說くものであつて、これは西洋のやうな外形的宗教觀念の重視されてゐるところに於いては實に大膽な放言であつたらしいが、日本の現實を見れば、寧ろ今更云ふまでもないほど宗教の幸福は色あせて人々の興味を失つてゐるが、なほ他面我々の無意識に殘存する傳統の力は今日と雖も、多くの人々を左翼陣から佛法界に轉落せしめ得たのである。これに對してマルクシズムはたゞ嘆かはしいことだ、遺憾なことだと云つてゐるのみで、何等施すべき術を知らない。只なし得るところは反宗教同盟の『運動』を起してこれを追立てるやうな荒療治の法を講ずるのみで、これでは宗教感情のやうな、寧ろ我々の無意識に根を巢喰ふてゐる神經症的、强迫症現象はいよ〱心の洞窟の奧深く尻込みするばかりである。これを捕へるには洞窟の前で金太鼓を叩いてデモンストレーションをするやうな、そんなデリカシイのない方法では駄目である。私はマルクシストが精神分析の方法を以てしめやかにこれを誘ひ出して因果を含めて自滅せしめるのが一層適切な方法である。分析の方法を以て威力を知らざることを甚だ憐むのみである。

では、その分析の方法とは如何なる方法であるか。それは只今細論すべき場合でない。

四、フロイドの社會意識

フロイドは社會の階級的不正に就いてかう云つてゐる。

『無視されてゐる階級が惠まれてゐる階級』（特に明白にするためにプロレタリアとブルヂョアと云ひかへても差支へはなからう）に對してその特權を嫉視し、また出來るだけの力を盡して彼等自身の缺乏狀態を除去しようとすることは、期待さるべきである。ところで若しこの除去がなし得られぬ場合には、永續的な或る程度の不滿がこの文明の内にわだかまるであらうし、またこれが危險な爆發を惹起さないとも限らない。さてもし文明の狀態が、その成員等のうちの一集團に關する滿足が、他の集團（恐らくは多數の集團）に對して必然的に禁壓を意味することになる――しかもこのことが總て近代文化の實情である――と云ふ段階を越えてゐない場合には、これ等の禁壓或は壓迫を受けてゐる階級が、その文化に對して烈しい敵意を抱く事になるのは明かである。かような文化狀態の存在は、被壓階級の人々の勞働に因つて可能であるにも拘らず、その資源の分配に於いては、彼等の受くる所はあまりに少いのである。かゝる狀態に於いては、被壓階級の間に、文化的禁止の内面化を求められないのである。』

端的に云へばブルヂョアの道德が直ちにプロレタリアの道德とはなり得ないと云ふことなんである。

『彼等はこれ等の禁止を承認する氣がないばかりでなく、實際に於いて當該文化の破壞、恐らくはまた當該文化が基礎とするところの假定の破壞の方に傾いてゐるのである。これ等の階級が文化に對する敵意はあまりに明白であつて、そのために一層よく分配されてゐる階級の深く陰伏する敵意は見落されるのである。』（筆者曰、つまりブルヂョアにも憎惡があるのである。）『云ふまでもないことではあるが、非常に多數の成員に滿足を與へず、また反逆の方へ彼等を驅り立てるやうな文化には、存在を持續する望みもなければ、その値打ちもないのである。』

と、このやうにブルヂョア文明に對する不滿と云ふ點に就いてはフロイドは恐く社會主義的不滿に讃同してゐるのであるが、將來の社會理想としての共産主義には、その心理學的見地からして幾多の疑問を抱いてゐるのである。

私はまづ社會の心理的構成に關する分析的考察から述べて、漸次にフロイドの共産的社會理想への批判の紹介と研究とに進んで行きたいと思ふ。

五、社會的集團の心理的機制

凡そ社會的集團（その一種の形態としての國家は勿論）と云ふものは下に多數の個人が集り上に一つの指導者（又はその代償）を頂く三角形（ピラミッド）的存在であつて、そのことは最右翼の帝國主義國家から最左翼のボルシェビキ國家に至るまで變りのないものであるが、またそのやうな有政府的社會集團に就いてそれが云へるのみならず、無政府的社會集團に就いてもそれが云へるのである。無政府的社會集團に於いて指導者又はその代償が存在すると云ふ事は、それ自身一つの矛盾の概念である如くに見えるが、實は必ずしもさうでなく、無政府的社會集團に於ける指導者又はその代償は一つの社會理想又はその理想の唱導者への記憶（メモリー）と追慕である。歷史現在のソヴエート・ロシアに於けるレーニンの位置はこれに當る。ロシアがレーニンをとかく偶像化したがる理由もまたこの方法に依つてロシアと云ふ國家的社會集團を一つの緊密なる存在に統一せんとするに外ならないのだ。

大衆はこのやうに必ず指導者を要望するもので、强大なる個人又は崇高なる觀念に依つて指導せられることを求めるものである事は、既にイソップの寓話にさへ出てゐるほどであるが、この要求の心理的起源を求めるならば、それは萬人が嬰兒時代（この時代を經過せざる個人はないから）に經驗した父への感情である。またそのやうな個人的經驗のみならず、人類の年久しい同樣な經驗の民族的遺產としての感情である。

ところで、この父への感情は、精神分析の研究し發見したところに依ると、さきにも述べた通りアムビヴレンツ（相反並存感情）の典型的なもので、一方非常な尊崇を抱くと共に他方非常な憎惡を向けてゐる。非常に尊崇するものを非常に憎惡しなければならないと云ふ人類の心理的運命は我々に原罪感（エルブジュンデ）を與へたもので、このアムビヴレンツの感情を自分自身に都合よく（自己矛盾なく且つ罪障感なく）するためには尊崇と憎惡とを別々の對象にふりわけて差向ける事である。このやうな無意識的トリックが如何に巧妙になされてゐるかは樣々な活事實を仔細に觀察して見れば自ら分ることである。殊に一つの社會的集團の結合を非常に緊密ならしめようとの要求の强い場合に一層この傾向が露

骨に表れる。フロイドはキリスト教團に就いてこれを論證してゐる。曰く――

『キリストの統治の間でさへ、信者の社會に屬しもせず、彼を愛しもせず、又彼に愛されもしない人々は、この結合外の存在であつた。それ故に宗教は、たとひ愛の宗教と自稱しても、それに屬しない人々に對しては苛酷であり無慈悲であるに相違ないのだ。元來、慥にあらゆる宗教は、これと同樣に、それに歸依するあらゆる人々にとつて愛の宗教である。」これに反してそれに歸依しない人々に對して無慈悲であり狹量であることは、あらゆる宗教にとつて當然のことである。我々はこのために信者たちをあまり苛酷に非難すべきでない、よしんば個人としてそれをなすことが困難であるにしても――。もしも今日その狹量さが、最早過去幾世紀に於けるほど狂暴苛酷なものとして現れないにしても、人間の習性が軟化したとは推斷出來ない。苛酷でなくなつた原因はいづれかと云へば、宗教的感情とそれに頼るリビドー的結合とが何としても薄弱になつたことに存するのである。もしも他の集團的結合が、宗教的結合と代るならば――そして社會主義風の結合がさうなることに成功しつゝあるやうだ――そのために宗教戰爭時代と同樣な、仲間外の人々に對する狹量さが生ずるであらう。』云々と。

つまり宗教的團體は團體外のものにアムビヴレンツの消極面（卽ち憎惡の面）をさし向けることに依つて仲間の內に（指導者並びに團員相互に對して）積極面（卽ち尊崇と愛）を差向けるやうにし、從つて結合を鞏固ならしめたのであるが、多分に宗教團體的色彩を帶びてゐる社會主義團體（その證據はいくらでも擧げることが出來る）が、アムビヴレンツのトリック的な振分けに於いて宗教團體の踏んで來たのと同じ道を踏んで行くことは新しい文化團體としての進步性に矛盾するものであると云ふのがフロイドの眞意であるやうだ。詳言すれば、何でも惡い事はブルヂョアのせいにし、何でもいゝ事はプロレタリアのせいにしてゐるやうな自得的な一面を新興文明の擔任者に警告してゐるものと思はれる。

六、私有財産論批判

マルクスとフロイドとを比較して所謂轉向心理に論及す

なほ私有財産撤廢に係る社會改良の心理的錯覺に就いてフロイドはかう云つてゐる。『共産主義者等は惡から救ふべき方法を發見したと信じてゐる。人間は隣人に對して衷心善良であり親切であるのだが、私有財産が人間を墮落させたのであると彼等は云ふ。財産を私有することに依つて個人は力を得、隣人を虐待したくなつたのである。財産を所有せざるものは壓制者に敵對しなければならない。もし私有財産を撤廢するならば、總て價値あるものは共通に所有せられ、總ては互に亨受することが出來るやうになり、惡意と敵對とは彼等の間から一掃される。總ての必要は滿たされるが故に、何人も他を敵視すべき理由を持たなくなる。萬人は唯々諾々として必要なる仕事に就くやうになるであらう。私は共産主義組織の經濟的批判に就いては、何の關心をも持たない。私有財産の撤廢が適切であり好都合であるかどうかを檢覈することは出來ない。併しその心理的豫想は賴りない幻想に基くものであることを認識することは出來る。私有財産を撤廢すると、人間の攻擊慾は強い道具の一つを失ふことは慥である。攻擊慾のために惡用せられる權力や權勢が人に依つて相違することは依然變りはない。またその本質に於いても變りはない。この本能は私有財産の結果として生じたものではない。所有がなほ甚だ貧弱であつた原始時代に於いて、この本能は殆ど至上の勢威を肆にしてゐた。所有慾がその本源たる肛門的形態からまだ殆ど發達してゐない幼兒等に於いて既にこの本能は發現してゐる。この本能は人類の一切の愛情關係の根柢に存してゐる。この特權がなければ個人的權利が撤廢せられたと想像しても、なほそこには性的關係に於ける特權が殘存してゐる。物的財貨に對する平等であるべき人々も、これあるがために强き反意と激しい敵對心とを抱き合はねばならない。……』云々と。

註 この『所有慾の本源たる肛門的形態』と云ふ語に就いては斯學にあまり通じてゐない方々のために一寸說明を加へておく。人間の性感は口唇から始まり肛門、尿道を經て性器に集約せられるもので、その過程中に於いて肛門の性感に定着せるものが所有慾の盛んである事は幾多の分析治療の實例に就いてフロイドその他の學者の研究し發見したところである。

フロイドはこのやうにマルクシズムの幻想的な甘さに於いてブルヂョア文明の殘滓を見ると云ふかも知れない。こ

れに對してマルクシズムはそれ自身の獨特の立場から、フロイドに於いて先行文明の無用の殘骸を或は發見し得るかも知れない。實際、マルクシストにしてフロイドを批評してゐる人があることを私は知つてゐるが、私はまだ繙讀の機會を持たない。併しながら相互の批判は必ず嚴正なる科學的公正に立脚するものでなければならない。感情的な金切聲を恥ぢなければならない。フロイドは共産主義の幻想を論じて後に、自らの過去を顧みつゝしみ〲とした聲でかく云つてゐる。

『若い時分に貧困の悲慘を沁々と味ひ、金持の冷淡と傲慢とを忍んで來た者は誰しも、人間の經濟的不平等並びにその結果生じ來るいろ〲の事柄を打破せんとの努力に對して懷疑し又は好意を持たない者だなどゝ思はれる筈はないのである。勿論併し、この爭鬪が人間の抽象的正義感から出發してゐるのであつたならば、固より誰しもこれに反對するであらう。現に自然は個人に對して肉體上にも精神上にも非常に不公平な惠み方をしてゐて、これに對して何とも手のつけようがない。』と。

實際、フロイドはあれだけ獨創的な新學説を提唱し、人間の『抑壓』してゐる無意識領域に就いて新眞理を發見したので、容易に人々の受容するところとならず、永い間貧困と孤獨の内に惱んでゐた。その間、『金持の冷淡と傲慢』とに如何に腹立たしい思ひをしたかは察するに餘りがある。併し眞理を求める活動は感情から生れて幻想に終つてはならない。終らしめてはならない。かくの如きは科學ではない。科學者はまづ勇者であることを要する。

フロイドはマルクシズムに於ける私有財産制撤廢論に於いて一つの幻想を認めたが、マルクシズムの今一つの幻想はその無政府狀態への確信である。その狀態に至るまでの過程として半國家を認めると云ふが、現今のロシアの如きが半國家であらうが、いつまで經つてもこの半國家は解消されない。何等かの支配者（從つて何等かの程度の强權）のない國家社會は考へられない。國家社會に何等かの程度の强權が必然だとすれば、絶對の自由と云ふこともまたあり得ない。我々は總て國家と社會と强權と自由とに就いて相對的見解を持たねばならない。それ等のものに就いて絶對的なものを幻想する結果が、必要以上の混亂となつたり、不體裁な悲慘な轉向となつたりする。そこで我々は次に轉向の心理に就いて考究して見たい。

七、所謂轉向の心理に就いて

このやうに現實直視の勇氣を缺き、願望に支配されて現實を幻想することの如何に左右翼の所謂鬪士等に多いかは、警視廳に於いてさう云ふ人々を多く取扱つてゐる某々氏が、われ等の研究會の某月例會に於いて述べられたところに徵しても分る。左右翼の轉向者たちには、不健全な性格者が多いさうである。例へば有名な女鬪士であつたところのKM子の如きは、さきに金子氏の診問の際に華族樣と結婚する事になつたなど〻發作的に云ひ出すかと思ふと、正氣にかへつた時はブルジョア階級を批難すると云つたやうな事があつた。そのどちらをも當人は大眞目面で云つてゐるのである。

このやうな性格上の矛盾は、慥に不健全であつて、その不健全さは躁鬱病的と呼ぶべきであると云ふ向もあるやうである。躁鬱病とは週期的に來る鬱憂狀態と躁狀態の交互現象であつて、その心理的機制は精神分析の說明では、自我と超自我との合致の場合には怡樂的の躁狀態となり、自我と超自我との分離の際には沈鬱狀態になるらしいと云ふのである。であるから、社會思想の轉向と宗教上の轉機 conversion とは共に躁鬱病的症候として解すべきだと云ふ向きがあるのだ。

併しながら社會思想上の轉向を（宗教思想上の轉機ならばともかく）躁鬱病的現象として斷ずることは、一見明白なるが如くで、なか〳〵困難な問題をそこに必然的に伴ふやうである。

さきに擧げたKM子の如き場合をとつて考へて見る。KM子に就いては、私は細かい具體的事實を知らない。併し彼女が、先に述べたやうな前後矛盾の言を弄して遂に左翼から右翼に轉向したと假定しよう。その場合、彼女に於て父コムプレクスは、否み難いやうである。彼女の華族樣との結婚の空想願望は父コムプレクスの陽性的顯現と見、その階級鬪爭は陰性的顯現と見る。この場合、問題になるのは、父コムプレクスの陽性的顯現が果して躁狀態と合致し、陰性的顯現が鬱憂狀態と合致するかと云ふ事である。父コムプレクスの陽性的顯現が自我と超自我との合致（動的見

地に從つて）に符合すると承認してもよい。（これが丁度符合せぬ場合も考へられないではない。）即ちこの場合は躁狀態を現出してゐるのであるが、事實に於いては右傾化してゐてどちらかと云ふとおとなしい。少くとも權威に對してはマゾヒスティッシュな狀態を示してゐる。却つて陰性的な半面を示してゐる場合（即ち鬪爭的顯現の場合）に勇ましくサディスティッシュである。即ち躁狀態を示してゐる。この矛盾を如何に解決するか。ＫＭ子の如き比較的病理的な場合（自我の現實的試驗力が弱く、無意識の空想願望の盛な場合）に於いてさへ、なほかつ躁鬱病としての解釋にはこのやうな矛盾がある。ましてや、自我が比較的健全で現實試驗力が相當强く、從つて空想願望の少い場合（左翼の理論家ＧＳその他諸氏の場合の如き）には、なほ一層この解釋の妥當性が少くなる。換言すれば、純然たる無意識心理學からの解釋の妥當率が少くなるのである。意識心理と無意識心理との交渉と限界は非常に困難な問題となる。

躁鬱病としての解釋を以て全部の轉向者を一律的に解釋する事の困難は、まづ彼等が流行的に、又同時的に轉向すると云ふ事實の說明に於いて最も大である。彼等が一律的に同時的に轉向するのは、彼等の躁鬱病（であると姑く容認して）が社會的である事を豫想してゐる。社會的躁鬱病と云ふべきものがもしありとすれば、その病氣が左翼社會にのみ限定的に流行すると云ふ事實の說明が困難になる。躁鬱病はやはり人格分裂を豫想する。個人的の病氣と解するのが正しいのであらう。

私は左翼の轉向者等の心理を（躁鬱病としてでなく）單純なエディポス・コムプレクスを以て解釋するのが却つて適當であらうと思ふ。即ち、彼等が國家社會を權威者（父）として認識し、それへ陰性轉嫁を寄せた場合にこれに反抗し、保護者（母）として認識した場合に、これに順應するのであると。併しかく考へる事は、そこに重大な困難と混亂とが生じて來る。即ち國家に對して權威者（父）コムプレクスを轉嫁して反抗するとすると、それの陰性轉嫁を意味するが、それの陽性轉嫁としての變化の場合はないのであるか。保護者（母）として見る時、その感情は本人の轉向以前はどうなつてゐたのか。更にその上に本人の男性として、女性として、同性愛的傾向はどうかと云ふやうな事を考へると、問題が非常に複雜になつて來て、從つて抽象的となり、空理化して來る。

註　五・一五事件の被告や尾崎左傾判事等の父兄の告白（新聞に掲げられたる）に依ると、彼等の多くはやはり幼時からとかく反抗的な性格者であつたさうである。かゝる非社會的行動への個人心理的契機をもあまりに輕視することは、やはり重大な誤りとなるであらう。

八、社會思想の心理的基礎

これはそも〳〵問題を個人的見地から見るのが間違ひである。丁度、純無意識の問題として考へる事が間違ひであるのと同じ程度に……。この問題は、一方、集合的に（集合人格 Gesamtpersönlichkeit として）考へると共に、意識無意識の相互交渉の問題として考へねばならない。併しから考へると意識無意識の交渉が複雑であり、これを區別する事が困難である如く、個人心理と集合心理との交渉も複雑であり、その區別も困難である。

集合的に見ると、權威者は天と共に父であり、國家は地と共に母であり、民衆は草（民草、草莽の臣、臣子、と云ふ言葉がある）と共に子であつたし、また現に草である事は動かせない。そこで一般民衆が權威者に對して愛憎二元のアムビヴレンツを持ち、國土に對しては幼兒的偏愛（ツエルトリヒカイト）を、民衆相互には同一化（イデンチフイチーレン）を持つて來た事は何れの時代に於いても同じであるが、一度封建と鎖國の制破れて諸外國との交通自由となるに及んで、右の公式的國家社會觀は非常に動揺と變革を見る事になつたのは自然である。國土に對する幼兒的偏愛も稀薄となつたが、同族民衆間の同一化も弱くなつたが、就中權威者に對する陽性轉嫁は最も大きな動揺を來たした。近世の社會思想は多々あるが、權威者に對する轉嫁の陰性的であり、否定的である點に於ては共通してゐると云つて過言でない。共産主義は兩親に對する子供權の主張であり、無政府主義は端的な父權の否定であり、ボルシェギズムとしてのマルクシズムは父に代つてその權利を掌握することへの要求である。無意識面から見れば、無政府主義は父なくして幼兒と母（大地）とのみの相愛狀態を社會的に實現せんとする願望を骨子として居り（故に彼等は經濟理論上では必然的に重農主義者となる）、ボルシェギズムは子供が父の位置をとつて代らうとの願望を骨子としてゐる。國家社家主義は一國家を一家族として（父の

名目のみを許して臣子が父の實權丈けを繼承し母はこれを父から奪取し）他の國家（家族）と競爭して行かうと云ふ思想である。無政府主義者は子供と母との感傷關係だけに滿足せんとし（故にこの派の思想家には、最も純粹な、詩人肌の人が多いし、又かう云ふ傾向の人がこの思想に共鳴する）、マルクシアン・ボルシェビキは自力で父親に抵抗出來ぬため、他家の子供との同一化を骨子とし（だからこの派の思想家には性質に比較的ひがみと劣等感の弱い者が多い）、國家社會主義者は母を主權者として他家の者の近接からこれを守らうとする（だから彼等は團體行動に於いて緊密であり、對外上では排他的である。）何れも幼兒的心理特質を露骨に呈示してゐるが、第一は感傷的を特徴とし、第二は神經症的であり、第三は獨尊自愛的（ナルチスティッシュ）である。

であるから、左翼から右翼への轉向と云ふことは、無意識心理現象として考へられ得る限りでは、同一化を國內的にするか、國際的にするかの相違に過ぎない。そのエディポス・コムプレクス的要素（父への陰性轉嫁）に於いて兩者同じである。この意味では左翼（マルクシズム）と右翼（ファッショ）とは確かに同じものである。社會學的に云へば、左翼は社會の結合單位を階級に置くものであり、右翼は民族に置くものであることは勿論であるから、この點に於いて社會學的見解と無意識心理學的自地とは一致する。併し左翼と右翼とは、父への陰性轉嫁に於いては（從つて父の位置にとつて代らうとする點に於いては）共通的であるとは云へ、その同一化の方法が、一は國際階級であり、他は民族階級的である點に於いて相違するのであるから、前者から後者へ轉向するについては、そこに相當の契機がなくてはならない。單に躁鬱病的轉變として公式的に律し去るのはあまりに事實の複雜を單純視するものであるとの誇りを免れないばかりか、また旣に事實の說明に於いてさへも十分でない。現にフロイドは『この循環的沈鬱の典型的病例にあつては、外的な刺戟的原因は何等決定的の役割を演ずるやうには思はれない』と、その『集團心理と自我の分析』（フロイド全集第三卷一一一頁）の中で云つてゐるほどである。約言すれば私は、彼等左翼者たちの右翼轉向に於いて意識面からの動機を認めるべきであると主張するのである。

×

彼等の轉向動機としては（一）コミンターンへの疑惑、不滿。（二）國際階級同一化主義の窮極理想としての完全さはともかく、現前の實際問題として空理に近いことの認識、（三）時代風潮への迎合。（四）國家權力への屈服又は妥協……などが敢て上げられるのではないかと察せられる。

これ等の諸項がもし假りに轉向の現實的動機として存したとすれば、それだけでも轉向是認の理由となり得る。何となれば左翼にとつても右翼にとつてもその運動の意識的目的が自己と民衆を何等かの方法に依つて社會的經濟的に救はうとするにある事に變りはないからである。その上にその方法を變更する事に依つて窮極の目的をより完全に、より容易に、貫徹する事が出來るならば、何も好んで舊來の方法をのみ株守するには當らぬ事だからである。但し、變更するについての道德的責任（從來誤つた方法を取つて來、また人にも勸めて來たことの不明についての責任）は當然免れないであらうが……。

旣に意識方面に於いてこれだけの是認理由があつても、無意識方面にこれと符合する動機が存在せぬか、或はこれと矛盾する動機が存在すれば、又別問題であるが、從來は父への陰性轉嫁が自國の主權者に寄せられ、陽性轉嫁が他國（××國）に寄せられてゐたのが、その他國主權者への陽性愛が拒否せられたとすれば、それ丈けのリビドーは當然に自國主權者にアムビヴレンツとして二元的に轉嫁せられるやうにならねばならぬ。このやうにこの方面でも矛盾せぬとすれば轉向は一層容易となるが、無意識面の動機丈けで躁欝病的に轉向すると解せんとするのは慥にさま〴〵の點で無理だと私は考へるものである。（完）

附記 以上は精神分析學と社會科學との相關問題の研究に於ける序說に過ぎない。精神分析學が多面的樣相を具へてゐる如く、マルクシズムも、半ば科學であつたり半ば哲學であつたりして、その問題は多岐に亘つてゐる。それ等多面と多岐との交涉は漸次に多くの人々の考覈に待たねばならないが、それ等への方途は、本誌所載高水氏の文獻紹介が幾多の示唆を與へてゐるであらうと確信する。

理想我と犯罪心と宗教心

矢部八重吉

一、分娩の外傷

九ケ月の間、母胎内で無爲安逸、完全な加護の下に樂園の享樂に耽つてをつた胎兒は、漸く其の期滿ちて現實世界に放たれる。現實世界は冷酷無情の娑婆であり、生兒の擧ぐる産聲は娑婆の苦痛に對する最初の抗議である。生きる悩みの第一先鋒は生れる悩みであつたのだ。此れ分娩の外傷が存する所以である。嬰兒は分娩により初めて獨り立ちとなる。此れは生理的意味に於いてであつて、經濟的意味に於いてではない。經濟的獨立は尙前途遼遠である。生理的獨り立ちは自からの肺腑で呼吸し、自からの胃腑で消化し、自からの排泄器で排泄すれば足る。此れ以外の必需は四圍の人々の手で滿される。四圍の人々の内で重なるものは、親である。殊に哺乳兒の直接の必需に應ずるものは母親でなければならない。卽ち母親は飢渴を癒す爲め乳房を與へ、寒暑を防ぐ爲に衣服を整へ、其の他排便等一切の世話をするのである。

二、父母に對する全知全能の信念と、その抑壓

嬰兒は慈父母の前記の努力、撫育に對するに、如何なる心持を以つてするかと云うに、此れは謝恩の念では決してない。斯かる念は餘程の年配に達しないと出て來ない。我々は成熟して一本立（經濟的）になつた時と雖も、謝恩の

念は往々薄い。「子を持つて知る親の恩」とか、「孝たらんとすれば親既に亡し」とか云ふ事は、此の間の消息を漏してをるのであらう。さうであるとすれば、嬰兒が初めて父母に對し起す念慮は父母の能力に關する觀念であらう。母は朝夕晝夜の別なく、其の愛兒の撫護に盡瘁し、其の隱忍振、根氣强さは勢力の甚大なるを證するの外はない。物の大小觀は比較に據つて始めて成る。嬰兒の無力に比し母の力は幾んど無限である。此の力は經驗淺き嬰兒の腦裏には驚くべきものとして深い印象を留める。殊に父は時々母を援け、母の及ばざる智力及體力を供する樣にも見え、母も其の威風に靡くが如き有樣である。嬰兒は月日を經るに從ひ、漸次父母の全知全能を信ずるに至る。併し嬰兒は更に發育するにつれ、其の經驗の範圍を廣めて來る。そして其の接觸する人々の內には、父母以外に其の近親及び他人を含む事になり、此れらの人々の間には、父母の力の及ばざる、父母が其の權威に服せざるを得ない人等を發見するに至るであらう。その結果、父母に對する全知全能の信念は崩れかかるが、此の時晚く彼の時早く、四五歲頃に開始する抑壓期の到來に會す。卽ち全知全能の信念は全く崩壞される運命を免かれ、無意識に陷され、そこに抑壓前期の經驗記憶として遺留するのである。

三、神佛の存在と父母に對する全知全能の信念

抑壓前期の經驗記憶は、時と場所との方位の觀念を失ふた記憶として意識層に現はれ、所謂、空想、空中樓閣の種となる。此の種の記憶は如何なる時代、如何なる對象に基いてをるかが解らないから勝手に其の時と物とを選び、此れにそれを轉嫁する事が出來る。卽ち過去の經驗としても可ければ、現在のものとしても可ければ、また、未來に屬するもの（例へば神佛、豫言）としても可いのである。尙、抑壓されてある經驗記憶は外界に投出され易いから、自己を離れた獨立の存在として瞑想的に認められる事がある。抑壓前期、卽ち四、五歲前に父母に對して抱いた全知全能の信念が、時と場所との觀念を失して外界に投出せられると、此の信念は其の母體（卽ち父母）を游離して何物かに轉位せられる。全知全能なる何物かの存在を誤信するに至る。卽ち神佛の信念は此れに基く。換言すれば、神佛の

本體は嬰兒時代の父母であり、其の崇拜は卽ち父母の崇拜に外ならない。

斯くして精神分析の施法に據ると、神佛の信念の根據は內界、卽ち精神作用に辿る事が出來る。外界に於ける全知全能なる何物かの存在に就ては、最早議論の價値なきものとなつた。神佛は各人が心に宿す處であつて、決して外界にはないのである。それ故に我々は神佛の信念、卽ち信心、及び此れが土臺となつてをる道德を究めようとするには其の材料を內界の精神作用に求めなければならない。精神作用の內で神佛の宿る箇所は無意識である。そして本體は主に抑壓期の經驗記憶である。

四、德性の基礎と抑壓前期の經驗記憶

我々の道德の基礎、卽ち德性は如何にして展開するかと云うに、此れは抑壓前期の經驗記憶であつて、父母に對する全知全能の信念が其の核となり、此れを繞つて、卽ち此れを中心となして、夫れに附着し堆積した其の後の經驗記憶に基くと云はれるであらう。抑壓前期の經驗記憶は抑壓後期に於て、如何なる種類又は如何なる程度の經驗記憶が核となつて、其の周圍に呼び寄せられるかと云ふ事を限定するのである。換言すれば抑壓せられ、忘れられてをる四、五歲前の印象は、其の後受くべき一切の印象（卽ち意識的又は無意識的の）を左右し、取捨し、咀嚼し、此れを同化するのである。そして如何なる質の印象が、斯樣な取扱を受くるかと云ふ事は、最初の（卽ち抑壓せられてある）印象で定めるのである。更に換言すれば、三つ子の魂は百歲を定命するのである。

五、父母との同一化と理想我及現實我の基因

父母に對する全知全能の信念が、德性を構成するに至る其の順程を辿るには、再び嬰兒の出生時に遡らなければならない。生れたての嬰兒には自分と自分以外のものとの識別がない。女の乳房を哺む時と自分の拳をしやぶる時とに於て、その對象の出所の何處なるかを知らない。が、自他の區別は間もなく附き初める。此れを自我觀念の發芽と云ふ。自我觀念は對他關係、卽ち自分以外に外界の存在を認める事から生ずるのであるから、外界、卽ち環境と沒交涉

には決して生じない。そして此の觀念は環境との交渉が持續せられ、それが益々頻繁となるに從ひ、愈々發達する。即ち自我は環境順應性能、換言すれば、現實に處する能力であつて、此れは意識層の心をつくる事になる。父母に對する全知全能の信念は、勿論或る程度の自我が發達してから初めて生ずる。自我は環境との交渉に基き、外界の事物を吸收して膨大する。此れを取込作用又は同一化作用と呼ぶ。此の作用は恰度投出作用の反對であつて、矢張り無意識に示される。嬰兒は父母の全知全能を取込み、此れと同一化しようとする傾向を現はす。同一化作用が働くと、嬰兒は父母を見習ひ、其の性能を模倣し、此れを自分のものとして示したい願望を持つ樣になる。即ち嬰兒は父母の如く全知全能たらんと欲するのである。斯樣にして膨大した部分の自我を超自我若くは理想我と呼び、他の部分の自我を現實我と稱する。

六、抑壓前期の經驗記憶と良心の基因

嬰兒が四、五歳に達し抑壓期に會すると、理想我の一部は全知全能の信念と同樣に、無意識に抑壓される運命を受ける。抑壓作用は心の働きを滅却から救ふのであるから、無意識に陷された（抑壓の爲め）理想我は、そこに立派に存續して、直接間接、即ち無意識的に、又は意識の仲介を經て、言動を支配するのである。換言すれば、無意識にある理想我は德性倫理性の基礎を供し、我々の終生の運命を定むるのである。自我の一部を構成してをる理想我は何故に抑壓されるのであらうか。此れ他の部分、即ち現實我と一致兩立出來ないものであるからだと云はれよう。全知全能の信念と同じく、理想我は、經驗未だ尠き嬰兒の腦裏に映じた印象に基いたものであるから、經驗が廣められ、即ち現實我が發達するに從て此れと和合出來なくなる。和合出來ないものは終に崩壞せざるを得ないが、抑壓により此の運命を免かれる。嬰兒は父母を此の上もない偉いものと信じ、此れを自分の理想とするが、發育するに從ひ、漸く父母の弱點を認め、左程偉くないのを知ると同時に幻想は消失する。が、此れは意識層の自覺がなくなつたと云ふに止まり、幻想は無意識に保留せられる。無意識に保留せられてある幻想、即ち父母を此の上なき偉いものとして、此

れを倣ふとする心持は抑壓前期の經驗記憶、即ち其の出所と時代との觀念を失ふた記憶として意識面に現れる。此れ極めて漠然とした、所謂、良心とも云はれるものであらう。

七、理想我が高過ぎる爲めの精神病と低過ぎる爲めの犯罪

して見ると、良心なるものは、人間が先天的に有するものでもなければ、また神から特に授けられたものでもなく、抑壓前期の經驗記憶で、戸惑ひして意識層に出たもの、即ち空想に外ならないのである。良心の本體は無意識にある父母に對する全知全能の信念及其れとの同一化、崇拜である。此の信念及作用が無意識にある本能に基く原始的、蠻的衝動と軋轢衝突する時に意識せられる漠然たる一種の精神苦、此れ良心の呵責である。理想我の發達が高ければ高いだけ、蠻的衝動を壓迫することが益々甚しいから、軋轢衝突は愈々峻烈になる。即ち精神的懊惱、煩悶となる懊惱、煩悶が拗ぢれると、終に肉體轉換と云ふものが起る。肉體轉換とは精神作用が肉體の症狀としてあらはれるものである。症狀は精神苦、懊惱、煩悶の象徵的顯現である。換言すれば、精神變調の主なる症狀は良心の呵責を表現したものと見られるであらう。精神苦、懊惱煩悶及其の肉體轉換（即ち精神變調の症狀）は理想我と蠻的衝動との軋轢衝突の結果、相互間の讓合に齎らされる。此れを互讓と呼ぶ。互讓は兩者の勢力の比率に基く。と云ふのは、理想我が强ければ强いだけ、それだけ蠻的衝動は理想我の要求に應じ、理想我と一致和合する樣な鹽梅に、また其の程度まで、假裝象徵化せられる事を諾する。假裝、象徵化が諾されると、衝動は此れを諾した程度まで精神苦及其の肉體轉換として現はれる。即ち理想我の强い人は精神病、神經症に罹り易いが、此れに反し理想我が弱く、蠻的衝動が强い時には、後者は其の力の强さに準じ、本能的、粗野的容狀を帶びたまゝで現はれ、理想我が求むる假裝、象徵化を拒むのであるから、精神苦及肉體轉換の代りに、言動として示される。即ち理想我の弱い人は悖德、反社會、犯罪行爲に出で易いのである。

八、現實我と理想我及蠻的衝動

斯くして、理想我が强過ぎると精神病者を、弱過ぎると犯罪者を、つくるのである。此の强弱を好適に調整してゆくものは現實我である。現實我は三つのものを對手とする。第一は外界卽ち環境、第二は理想我、そして第三に無意識の蠻的衝動、此れである。第一は客觀的に獨立した實在であるから、此れを對手とするには自から順應する以外に方法はない。マホメットは云つた。山に來たれと命ずれど「山來らざれば、我れ自から行かん」と、此れ現實に對する態度でなければならない。現實は袖手傍觀して此れに處し得るものではない。棚の牡丹餅と運とは寢て待つべきものではない。第二、第三の相手は主觀的實在であるから、理想我及蠻的衝動は如何にして左右出來るか。既に述べた通り、現實我は意識層の働きから構成されてをる。意識層は感覺の中樞である。感覺は外界、卽ち環境から生ずる刺戟を精神作用に轉譯したものである。と云ふのは、感覺は實在に最も近いものであり、意識層に實在の知識が心に入り來る關門である。實在は心の力で彼れ是れする事は出來ないものであり、また間斷なく心の關門に來襲するのであるから、此れを防止するにあらざれば、心の奥深く侵入するのである。現實我はそれ自ら此の侵入を受諾する事に據り發達したのである。が、理想我及蠻的衝動は實在の一部の受諾を拒み、此れを無視しようとする傾向を示すのである。

九、過去の經驗記憶の總和を以つて現在に處する

如述の實在を無視しようとする傾向は、現實我をして最後の勝利者たらしむるのである。何故と云うに、此の無視は、現實我が間斷なく實在から援勢を得る動因をつくるに至るからである。が、此れは精神が常態に發達した時に限る。異常態の發達は、理想我の發展が高過ぎた爲め、理想我と無意識の蠻的傾向又は意識層の現實我との間の隔りが餘りに多過ぎる爲め、此の兩者間の軋轢衝突は幾んど間斷なく其の烈度を持續し、多大なる力が濫費せられると、現

實我の發達に資すべき力の不足を生じ、此れが實在に處する（卽ち實在を受諾する）性能を鈍めるものである。尙理想我が低く過ぎると蠻的傾向を阻止すべき役割が主に現實我の努力として轉嫁されるのであるから、前記の場合と同じ結果が生ずる。して見ると、子供の躾方及教育の要領は現實我の發達にある。現實我の發達は現實、卽ち實際の經驗に基くの外はない。が、體驗すると云ふ事には、二つの要素がある。一つは直接意識層を侵した外界の刺戟で、感覺として精神作用に轉譯されたもの。もう一つは、此の感覺に對し內界、卽ち精神作用が示す應答である。此の兩者は常に必らず或る割合で我々が體驗する每に、其の內に含まれてをるものである。精神作用が示す感覺に對する應答は過去の經驗記憶で定まる。そして過去の經驗記憶は意識層にあると、無意識にある（卽ち忘れられてある）とを問はないから、我々は現在の外界から來る刺戟に基き惹起せられる感覺に對し應答するに、我々の過去の經驗記憶の總和を以てする。卽ち我々は絕對に因果應報律の軛を逃がれないのである。

十、現在の環境と過去の經驗記憶

現在の外界から來る刺戟は何人に對しても同じである。また我々人類が稍や類似した共通の模型で出來てをる神經組織を有するものとすれば、此の刺戟に基く感覺も、槪ぼ萬人共通であるものと看做されよう。が、我々は過去の經驗記憶を異にしてをるから、我々の經驗の內で、精神作用が示す應答に關する部分は悉く違つてをらなければならない。此れ世の中は十人十色、各人各說と云へる事になるであらう。此の違つてをる部分は主に感情又はそれに基いた心の働で出來てをる。今此の働を假に感應と呼ぶ。卽ち我々の總ての體驗は感覺で出來てをる。そして、感覺は萬人稍や共通のものであるから、玆に詳細を論ずるのを止め、感應に就いて更に一層深入りして見ようと思ふ。感應は過去の經驗記憶を以てする現在に對する應答である。と云うのは、我々は現在の刺戟に基く感覺に據つて過去の經驗記憶を引出されると云ふ事になる。換言すれば我々は新しき刺戟に基いて、古るき刺戟を甦すのである。現在の感覺に據つて過去の經驗記憶を再生せしめ、此れを現在のものとして味ふのである。我々が現在に處するには過去の經驗記

の經驗記憶の內に織込まれると、後者は永久に改變せられ、爾後、現實に對する應答振りが一變するのである。即ち現在の感覺が過去ない。先づ收益簿に登ぼせ、本會計を濟るにあらざれば、支出する事が出來なくなつてをる。即ち現在の感覺が過去でなければ、效果を生じない。人間の心理的經濟は複雜なる組織で營まれるから、收益を直に支拂に充つる事は出來みであつて、現在に處する力を決して貢ぐ事はない。此れは過去の經驗記憶の內に咀嚼され、織込まれるに至つた後憶を以てするより外はまい。現在の刺戟、目前に惹起せられる感覺は、それが過去のものを甦すだけの效力があるの

十一、嬰兒時代の經驗甦生と性格の定著と

現實に對する應答振り、卽ち現實に處する性能は、過去の經驗記憶で定まるが、此の經驗記憶で意識層の働きを作つてをるものは、僅かに九手の一毛で、殘餘は無意識にある。尙、意識層にあるものと雖も其の大部分は各動機を無意識に宿してゐるから、我々は眞の動因を知らずに、盲動してをる場合が多い。無意識にある經驗記憶で、最も重要なもの、我々終生の性格を定著するものは、抑壓前期（四、五歲）のものである。抑壓前期の經驗記憶は、新しき刺戟、新しき感覺を受くるたび毎に甦生し、そして甦生が度重なれば度重る程、それに基く性格は益々深く定著する。例へば怒り易いものは、怒る每に其の度を高め、臆病なものは膽試しをされればされる程、愈々臆病となるのである。罪は罰すれば罰するだけ倍々人を罪に深みに沈めるのである。

十二、惡癖矯正の懲戒は子供を惡化する

抑壓前期の經驗記憶が意識層に現はれる時に所謂、瞑想が生ずるのである事は既述した。瞑想を好く操り、此れを對自然的及對社會的有利なものとなす作用、卽ち我々に現實に處する力、處世の能を與ふるものは、現實我である。が、現實我の發達は、廣く經驗を積む事、新しき環境の刺戟を受くる事が其の唯一の基礎となるのであるから、玆に一つの矛盾が起る。と云ふのは、抑壓前期の經驗記憶に基く性格は、新しき刺戟新しき感覺を受くる度毎に甦生し、

此の性格を愈々固定するから、惡い性格を有するものは、現實我を發達せしむべき筈の環境の刺戟が繁ければ繁い程益々惡化する事となる。卽ち子供の惡癖を矯めようとの譴責は子供を反つて惡くし、罪惡を正さうとの處罰は罪人を恰度反對に導く。古來勸善懲惡の敎へは、善人を戒むるに足つたかも知れないが、惡人を善導してはをらない。其の重なる理由の一つは、膺懲が外側から加へられるからだと云はれよう。效果ある懲罰は、內側、卽ち精神作用に基くものでなければならない。何故に環境の刺戟としての膺懲譴責は、其の效果がないのみでなく、反つて惡化を齎らすのであらうか。精神作用の內懲惡の基礎となるべきものは、理想我である。理想我は、所謂良心である。良心の呵責、自己膺懲、悔悟、此れ唯一の制裁でなければならない。卽ち地獄の責苦は決して後生の願ひとはならない。それ故に釋迦は懺悔に據り罪障消滅を說き、基礎は罪を悔改むるものは直に救はるべきを約したのであらう。（完）

乘馬咎めで死んだ實方中將

―中山太郎氏「乘馬咎めの神佛」
大槻氏「乘馬咎めの心理」參照―

仙臺市の境に接する名取地方は史蹟や名所舊跡に富んだ所である。中にも笠島道祖神の近くにある實方中將の墓のほとりのかたみの薄は古くからそこを通り過ぎる旅人の哀情をさそつた。西行は平泉へ行くついでに立寄つて歌をよみ、芭蕉も奧の細道を辿つた時よそながら眺めやつた。實方は行成朝臣に含む所があつて或時殿上でその冠を叩き落したのが主上の御目にとまり、歌枕見て參れとの勅諚によつて奧州に下つたが、道祖神の社前を乘打ちしたので、神罪を蒙り落馬して死に、此地に葬られたと云ひ傳へられてゐるが、その遺跡と稱するものも少なからずあります。（九月四日、小倉博氏、仙臺より放送談話の中。）

J・A・シモンヅのひそかなる情熱（四）

江戸川亂歩

次に順序として、我々はシモンヅ畢生の大著「イタリーに於ける文藝復興」（Renaissance in Italy）七卷の内に、彼のひそかなる情熱が如何樣に現はれてゐるかを一瞥しなければならない。

前述「ギリシャ詩人の研究」上卷を一八七三年、下卷を一八七六年に上梓し終つて、一先づ古代ギリシャへの逍遙を打切つたシモンヅは、これ亦學生時代からの研究題目であつた、憧れのギリシャの新しき顯現とも云ふべきルネッサンス研究に沒頭した。「イタリー文藝復興」第一卷（政治）は一八七五年、二卷（學術）三卷（美術）は七七年、四卷、五卷（共に文學）は八一年、六卷、七卷（共に宗教）は一八八六年と、十一年を閲して、通計三千頁に近いこの大著は完成した。

ある意味で古代世界の一つの中心力であつた騎士道的同性戀愛は、キリスト生誕以後の新世界には、表面上全く影をひそめたかに見える。古代には家庭の道具でしかなかつた女性が、キリストの母なる處女マリアの信仰と並んで、今や聖なるものとなつた。マリアへの靈の憧れは、やがて一般女性への憧れであつた。それが極限に達して、中世騎士道の狂熱的婦人崇拜と現はれたのであるが。又、一方では、社會生活の一單位としての家族制度が確立し、產業的個人主義は、古代の國家本位の寧ろ共產的な生活に取つて替つた。隨つて家族をなみする同性結合の理想は、この意味からも成立し得ないこととなつた。

だが、それは表面上の事に過ぎない。キリスト教の禁制は嚴しく、社會風習も亦これを是認しなかつたとはいへ、同性戀愛の特殊なる感情は決して亡びることとなく、社會の水面下を力強く流れてゐた。最も著しい一二例を上げるならば、聖アウグスチヌスの「懺悔錄」(第四卷第四章及第六章)ダンテの「神曲」(地獄篇第七獄)或はペーターの「文藝復興」に含まれるアミスとアミールの物語などによつて、我々は、ルネッサンス以前の、中世キリスト教世界にすらも、同性戀愛の感情が決して皆無でなかつたことを、たやすく知ることが出來るであらう。

さて、ルネッサンスは生物としての人間を再認識した時代であつた。ペトラルカを先頭とするヒューマニスト達のギリシヤ古典の導入によつて、キリスト教世界の超自然的思想が自然に歸つた時代であつた。古典學術の再興、樣々の科學上の新發見、比類なき文藝美術の隆盛、その一方には、マキベリズムの陰謀政治、ローマ法王廳の極度の廢頽、殺人とセンジュアリズムとあらゆる惡德の橫溢、それらの雜然紛然たる色彩を以て、ルネッサンスの巨大なる花は、眩くばかり美しく咲き出でたのであつた。神の威力も法王廳の支配力も、最早や昔のものではなかつた。信仰の光を覆つて、血と肉との人間の姿が、大きく立ちはだかつてゐた。

斯樣なルネッサンスであつたから、あらゆる人間的感情と共に、同性愛慕の感情も亦、社會生活の水面下にのみ潜んでゐることはなくなつた。極度に卑猥なカーニヷルの歌が物狂はしく巷に響き渡つた。そして、それらの滑稽諷刺の歌の中には、同性戀愛に關する露骨なる表現も、決して少くはなかつた程である。法王達は殆ど公然と愛童を抱へたし、ギリシヤ古典の研究から出發した當時の文學美術は、隨つてある程度まで、ギリシヤ的男性愛の思想をも受繼がないではゐられなかつた、作品に於ても、作者自身の感情としても。學術文藝のルネッサンスは、同時に亦ギリシヤ愛のルネッサンスでもあつたと云へる。

併し、十五世紀に復興したヘレニズムは、最早や昔の樣に少年の――大らかで偉大な少年の姿をしてはゐなかつた。人類は樣々の意味で大人になつてゐた。彼等は神々を友とし、神々と語らふ無邪氣さを失ひ、神と彼等との間には、古代には見られなかつた距離が生じてゐた。神は親しむよりは畏れるものであつた。神を畏れるが故にこそ、う

しろめたい數々の罪惡が彼等をそそのかした。彼等には古代人の夢にも知らなかつた複雜な大人の苦悶がつき纒つてゐた。このことは、例へばプラキシテレスの彫刻の思想と、ミケランジェロのそれとの、際立つた相違を見ることによつても、容易に理解出來るであらう。それ故に、ルネッサンスに復活した同性戀愛の感情は、昔ながらにほがらかなギリシヤ的戀愛ではあり得なかつた。古代の樣に、富國强兵の手段として、或は社會結合の要素としてのこの愛情は、もう必要ではなかつた。又、ルネッサンスは、この愛情の辯護者として一人のソクラテスをも持たなかつた。つまり、この時代の同性戀愛は、開放されたとはいへ、一般に道德的是認を得たものでは決してなかつた。こゝに古代ギリシヤの男性愛と、ルネッサンスに再現したそれとの間の著しい相違點があつた。

シモンヅが彼の畢生の事業としてこの研究を選んだ一つの理由は、彼が深くも憧れたヘレニズムの、後世に於ける最大最美の開花が、ルネッサンス、殊にイタリー、ルネッサンスにあつたからに相違ないが、併し彼の幼時の夢は、こゝでは、古代ギリシヤに於ての樣には滿足されなかつた。ルネッサンスの人本主義や異敎思想は、ともすれば、心を忘れ肉に走るが如き風潮となつて現はれた。生物としての人間の再認識は、とりもなほさずルネッサンスのアニマリズムと謂はれる所のものに外ならなかつた。シモンヅの夢が、その樣な肉の香の烈しいものでなかつたことは云ふまでもないのだから、彼はこの意味ではルネッサンス期の同性戀愛に失望しないではゐられなかつたに相違ない。

前にも述べた通り「ギリシヤ詩人の研究」は、ほとばしる情熱の散文詩とも形容すべき著述であつたのに比べて、この「イタリー文藝復興」は、もつと地味で、記述的で、情熱に於てよりは、詳細なる史的研究に於て優れてゐるもの樣に思はれる。無論それとても、一般史家の著作に比しては、格段に詩人的な感情と名文とによつて綴られたものではあるけれど。同書中の同性戀愛に關する事項についても、同じことが云へる。それは、恰かもこの愛情がルネッサンス期に於て表だつて是認せられなかつたのと同じ調子で、甚だ目立たない方法でしか記されてゐない。この著述には各卷を通じて夥しい長文の脚註が施されてゐるのだが、同性戀愛の事項は、大部分その脚註の中に隱されてゐる樣に見える。そして、それらの脚註には、恐らくは態と飜譯しなかつたイタリー語のまゝの引用文も少くはないの

である。

この愛情のかゝるひそかな取扱ひは、「ギリシヤ詩人の研究」での、表面からの寧ろ讃美に近い取扱ひに比べて、甚しい相違と云はねばならぬ。その理由は先にも述べた通り、ルネッサンスの同性戀愛が、無思想で、單なるセンジュアリズムでしかなかつたことが、シモンヅの純粋な氣持を害したからであらうが、それにしても、彼がルネッサンス、イタリーの諸人物を描寫するに當つて、一般史家の如くこの愛情に冷淡でゐることが出來ず、不必要に思はれる場合にさへ、殊更らそれに觸れてゐるのは、彼がその様な生物學的な同性戀愛にも、全く無關心ではゐられなかつたことを證するものではないであらうか。

「イタリーに於ける文藝復興」中には「ギリシヤ詩人の研究」中のギリシヤ騎士道論の様な、この愛情に關する纏つた意見は全く見出すことが出來ない。そこで、我々は全卷の諸人物の傳記中から、この愛情に關係ある部分を拾ひ出して、その銘々について著者の關心を探る外はないのであるが、私は便宜上、それらの人物を、美術家(畫家、彫刻家)文學者(學者、詩人)其他(政治家、宗教家)の三部に分ち、この順序で記述して行き度いと思ふ。

ルネッサンス、イタリーの美術家中、シモンヅが最も深き關心を持つた人物はミケランジェロ・ブオナロティであつて、この有名な美術家については、彼は同書第三卷に多くの頁を費してゐる外、Sonnets of Michael Angelo Buonarotti and Tommaso Campanella(一八七八年)の譯詩集と、The Life of Michelangelo Buonarotti 二卷(一八九三年)の詳細を極めた傳記の著述があり、他の隨筆類にも到る所にミケランジェロの名を見出すことが出來るのである。シモンヅが斯くもミケランジェロの人物に情熱を感じたのは、この大美術家が、一般的に、又同性戀愛の意味に於ても、著しいヘレニズムの讃仰者であつて、その作品にも、その生涯にも、プラトニックな同性戀愛の色彩が濃厚につき纏つてゐたばかりでなく、ミケランジェロ自身、シモンヅと同型に屬する女性的感情の持主(一種のウルニング)であつたことが、(私はこの兩者の容貌上の類似をさへ感じてゐる)一つの重大なる動機を爲したといつても決してこじつけではないと思ふ。

だが、ミケランジェロについては、私は後に右に記したシモンヅの二つの獨立の著述を檢する合場に詳しく述べたい心組であるから、こゝにはたゞ、「イタリーに於ける文藝復興」第三卷のミケランジェロ章には、到る所に、それとなく又露はに、著者の同性戀愛への關心が示されてゐること、最も具體的な記述としては、同卷三一八頁に、ミケランジェロの同性の愛人 Tommaso Cavalieri のことを記し、その脚註に於て、ミケランジェロの多くの短詩が、このカヴリエリに對する同性戀愛の爲に書かれたものであることを強く主張してゐること、同卷末尾の附錄中に、ミケランジェロの短詩二十數篇が英譯されてゐるが、その內の數篇は明かに同性戀愛を歌つたものであることなどを記すに止めて置く。

ミケランジェロの次に來るものは、シモンヅの關心の順序に從へば、彫刻家ベンヱヌト・チェリーニである。彼は本來が彫金家であつて、彫像にも優れてはゐたけれど、その作の今に殘るものが比較的少く、單なる美術家としては美術史上にあの大名を爲すことは出來なかつたかも知れない。彼を有名にしたものは、美術上の作品も作品ながら、彼の數奇を極めた痛快無比の生涯を口授筆記せしめて後世に殘した、浩瀚なる彼の自敍傳であつたといつてもよい。この自敍傳は、ホレース・ヲールポールをして「如何なる小說よりも興味あり」と稱讚せしめ、オーギュスト・コントは之を世界的名著として取扱つた程で、ゲーテは之を獨譯し、シモンヅ自身も亦之を英譯してゐる（The Life of Benvenuto Cellini 二卷。一八八八年刊。この書はシモンヅの多くの飜譯事業中の白眉であつて、名譯の譽高かりしものである。）

チェリーニの性格の不思議なことは、一方には優れた藝術的才能と、宗教的信仰を持ちながら、又一方では、手にをへぬ無賴漢であり、犯罪者であり、人殺しであつた。彼の單純赤裸々な情熱と惡德とは、併し、十六世紀のイタリー人にはあながち珍しからぬ性格であつて、彼こそ時代を代表する人物であつたとも云へる。さういふチェリーニの自傳であるから、記事は凡て開けつぱなしで、誇張的で、寧ろ露惡的でさへあるのだが、たゞ同性愛に關しては、甚だ內氣であつて、明瞭な記述は殆どない爲に、彼が果してこの特殊な愛情の持主であつたかどうかについて、後人の

意見がまち〳〵になつてゐる程である。例へばクェリンギー（Antonio Queringhi 十六世紀末イタリー詩人）の如きは、その著 La Psiche di B. Cellini で、それを否定してゐる由であるが、併し、シモンヅは無論肯定派であつて、「イタリーに於ける文藝復興」チェリーニ章の各所で、彼の同性戀愛に言及してゐるばかりでなく、「チェリーニ自傳」英譯の序文には「彼は不自然の罪（同性愛行爲）によつて投獄されたことがあるのに、自傳ではそれについて疑はしくも沈默を守つてゐる」旨を記し、シモンヅが肯定派であることを明かにしてゐる。（「チェリーニ傳」序文三十五頁。一言附記して置かねばならないのは、これらの記述は他書よりの引用であつて、私はまだシモンヅの「チェリーニ傳」を入手してゐないことだ。隨つて以下の引用文も直接チェリーニ自身の言葉によることが出來ないのは遺憾である。然し今も云ふ通り、チェリーニ傳には、同性愛の告白は殆ど見當らないことが分つてゐるのだから、同書未讀のまゝこの記述を進めても、さして不都合はないかと考へられる）

乏しい材料によつて想像しても、センジュアルな意味での同性戀愛は、當時の上流社會の流行であつたのだし、しかもチェリーニ自身があの惡德家であつたのだから、假令確證は殘つてゐないとしても、彼が全く潔白であつたとは考へられないのだが、そればかりでなく、次に記すシモンヅの記述は、殆ど確證に近いものではないかと思はれる。

「その頃、ジウリオ・ローマノなど、ラファエルの弟子達を含む美術家のクラブがあつて、彼等は一週に一度づゝ晩餐を共にし、雜談や音樂やソネツトの朗讀などに打興じたものである。こゝの會員は銘々その愛人を同伴する定めになつてゐたが、ある時、會員の一人であつたチェリーニは、丁度同伴する情人を持たなかつたので、その代りとして、ディエゴ（Diego）といふスペイン人の美青年を女裝させ、それを情人として同伴した。「チェリーニ自傳」にはその時の光景が實に活々と描寫されてゐる。我々は畫家や詩人や、美しいコステュームに包まれた婦人達の一團を目に見る樣である。テーブルは花や果物で彩られ、全體の背景には、深い色の唐草模樣の中に目のさめる樣な花が點々と開いてゐるジャスミンの花垣が擴つてゐた。女裝のディエゴ青年はポモナ（Porona）といふ女性の變名をしてゐたが、その美しさが際立つて見えたので、席上の美人中最上の美人であると、滿場一致の折紙がつけられた。併し遂にポモナが實は少年であつたことが發覺し、この事件は結局、例によつてチェリーニにつきもの

の血腥い活劇に終るのだが。」（「イタリー文藝復興」第三卷、三三一頁）

說明するまでもないことだけれど、假令その時適當な情人がなかつたからと云つて、チェリーニの如き男が、一人の新しい女性を物色するのに事缺いたとは考へられぬ。この青年女裝の思ひつきには、もつと積極的な意味があつたに違ひない。そして、それが女性以上に美しい青年の見せびらかしであつたにもせよ、又氣まぐれな一時の性的諧謔であつたにもせよ。彼の氣質が同性に性的嫌惡を感じなかつた、といふよりは寧ろある嗜好を持つてゐたことは分ると思ふ。

又次の一文は何等具體的の意味を含まぬにも拘らず、甚だ注意すべき記述の樣に思はれる。

「チェリーニは肉體的なあらゆる美について強い感受性を持つてゐた。――彼が Cencio や Diego や Faustina や Paolino や Angelica や Ascanio について語つてゐる所によつても分る通り――併し、彼はその作品「ペルセウス」や「ガニュメデス」や「フォンテーヌブローのダイアナ」などに、智識的な又は倫理的な美の痕跡さへも現はさうとはしなかつた。これらの作品の表情の空疏なことは、やがて藝術の墮落を證するものであつて、最早や藝術は完全な肉體美以上の何物かを理想化せんとする企てを放棄して了つたのである。ギリシヤ人達は、彼等の最も肉感的な女神達に對してさへも、こんな風には考へなかつた。卑猥な半羊神像或はサテュール像にすら、ある思想の痕跡が見られた。だが、チェリーニの彫像は何等の思想をも持つてゐない。その露骨なアニマリズムは作者の心持をそのまゝ現はしてゐる。」（第三卷、三三三頁）

右の文中注意すべき第一の點は、チェリーニが肉體美について強い感受性を持つてゐた證據として、「自傳」の中で彼がその人々の美しさについて感想を漏らしてゐるらしい六人の人名が上げられてゐる、その人々の性に關してである。六人とも有名な人物ではないので、私は今その悉くを詳かにすることが出來ないけれど、少くともその內の三人は、チェリーニよりも年少の美しい男性であつたことは想像に難くないのである。三人といふのは、ディエゴとアスカニオとチェンチオである。ディエゴ青年のことは前揭女裝の情人の引用文に明かであるが、次のアスカニオといふのは、チェリーニの門弟であつて、ある時後援者に對する恨みから、巴里に築いた彼の邸宅と全財產とを、このア

スカニオに託して、歸國してしまつた程の親任を與へられてゐた人物であるし、又もう一人のチェンチオといふのは後に記すシモンヅの脚註にソドミイの事でチェリーニを告訴したとあるのによつて想像するに、無論男性であつて、多分その相手方ではなかつたかと思はれる。かくの如く、チェリーニの敏感であつたといふ人體美の内には、明かに男性の、といふよりは美しい青年或は少年のそれが含まれてゐたのであつて、この意味では彼も又ギリシヤ人であつたと云へる。

注意すべき第二の點は、右の文中に引用されたチェリーニの三つの作品の内、二つまでが美しい青年の裸像であることだ。「ガニュメデス」はギリシヤ神話中の有名な美少年であつて、その美にうたれた大神ゼウスが、一羽の鷲に化身して下界に降り、トロイの貴族の子であつたガニュメデスを掠奪して、オリュンポスの神々の國へ伴ひ、彼の愛童として、神酒の給仕をさせ、常に身邊を離さず、夜も衾を共にしたといふ物語は、ホメロス以來のギリシヤ詩人達によつて屢々歌はれ、又多くの彫刻家達の題材となつた。私はまだチェリーニの「ガニュメデス」の寫眞を見る機會を持たぬが、同じ題材のギリシヤ彫刻家が極まつてさうである様に、彼の彫刻も亦、一人の裸體の美少年と一羽のたくましい鷲（ゼウス神）とが、睦まじく並び立つてゐる像ではないかと想像される。

もう一つの作品「ペルセウス」は、これも亦ギリシヤ神話中の若者であつて、彼が蛇髮の女怪メヅーサを退治した物語は人の知る所であるが、チェリーニの作はブロンズであつて、その寫眞版を見るに、右手に劍を握り、左手に討ち取つたメヅーサの首を高く掲げ、足はその怪奇な死骸を踏みつけてゐる、全裸の美青年の立像である。それがギリシヤ神話を借りて、美青年の肉體美を表現したものであることは一見明瞭である。

チェリーニの代表作として擧げられるものが、かくの如き作品であること、又、シモンヅがそれらの作品には、敏感なる肉體美を見るのみであつて、全く無思想であると論じてゐる事によつて、我々はチェリーニの製作の動機を想像し得べきである。

更らにシモンヅのチェリーニ章から、同性戀愛に關係ある記事を拾ひ出すならば、チェリーニが獄中で不思議な幻

影を見ることが記されてゐる部分に、幻影中での道案内者として現はれた青年は「丁度髭生えそめし年頃の若者であつて、その顔は怪しくも美しかつたが、併しその美しさはあくまで嚴肅で、少しもみだらな感じを伴はなかつた」（チェリーニ自傳よりの引用文）といふ記述がある。「髭生えそめし若者」の形容句は、この少論の初めにホメロスやプラトンから屢々引用した所であつて、シモンヅの深くも憧れた男性美であるが、その同じ句をチェリーニが、夢の物語に使用してゐるのは興味深く感じられる。

もう一つ、チェリーニ章の終りに近く、彼がバンディネリ（Baccio Bandinelli 當時の著名な彫刻家）の作品「ヘラクレスとカークス」を作者の面前で罵倒し、お互に野卑な言葉で詈り合つた事件が記されてゐるが、その脚註は甚だ具體的であつて、書き漏らすことが出來ない。

「バンディネリがチェリーニを罵倒して Oh sta cheto, soddomitaccio.（密かにソドミイに耽ける奴の意）と云つたのは、ベンヱヌトの日頃の所業に照らして眞實であつたらしい。チェリーニ自身はそのことを自傳の中で注意深く隠してはゐるけれど。その證據には、例へばチェンチオ（前に述べた Cencio）が、ソドミイの件で彼を告訴したことがあり、その爲に彼はフロレンスから逃げ出さうとさへしたのである。」（第三巻三四九頁脚註）

甚だ乏しい材料ではあるが、以上の拔萃によつて、殆ど明確な資料のないチェリーニの同性戀愛に關しても、シモンズは明かに肯定派であり、そのことにある關心を持つてゐたことが分ると思ふ。

時評

時言數題

大槻憲二

一、思想善導方策に就いて

思想對策委員會に於いて決定した教育改善に關する方策の具體案內容なるものを見たが、『國家的指導原理たる日本主義を闡明し、これを普及徹底せしむること』と云ふのが大眼目で、『敬神崇祖の美風を振興』したり、『國民精神文化研究所の支部とも云ふべきものを設置し、これを助成して小學校、實業補習學校の教員、青少年指導者等に對し日本精神を中心とする思想上の修養を與へ』たりするのがその細目であるやうだ。併し謂ふ所の日本主義、日本精神とは如何なるものであらうか。それをも少し明瞭にしてかゝる必要がないだらうか。それは既に國民精神文化研究所に於いて闡明され、確定してゐるが、新聞紙上などに於ける報導では一々斷ることが出來ぬと云ふわけであらうと思はれるが、併し私は平生から考へるのである、一つの傾向的思想に對抗するに他の傾向的思想を以てすることは、あまり教育的効果がないのではないだらうかと。一つの傾向的思想に對しては、傾向的ならざるものを以てするのが最も策の得たるものである。阿片吸飮者に向つて酒の趣味を說いたり、辛黨に甘黨の法悅を逆宣傳したりすることは、たゞ一方の反感と輕蔑とを購ひ、いよ〳〵自分の趣味に固執せしむるの結果を招致するに過ぎないものではないだらうか。これに對して彈壓を以て臨まんか、只一時は屈服する如き形を示さむも、心中の反抗心は更に一層の逆反撥力を培はれるに過ぎないであらう。

余はマルクシズムの幻想性と非現實性とを承認する一人ではあるが、この思想が純潔なる青年の道德心に愬える力のある事を看過してはならないと思ふ。單に就職困難のためにマルクシズムに歸すると云ふは一を見て二を知らざるものである。それに對して謂ふところの日本主義は、青年にとつては、それが國民的利己主義を意味し、彼等の道德心を滿足せしめるに足りないものゝ如くに思はれる(私は彼等の考方を必ずしも是認するものではないが、)點は、當局者に於いて十分に自覺してをらねば

ならない重大な點である。

私は一つの傾向思想に對抗するには、他の傾向思想を以てするの不得策を避け、可及的無傾向の科學思想を普及せしめることが得策であると思ふ。近時流行の轉向とても、それが日本主義思想宣傳の效果であると思ふならば、その方面の人々の自惚である。それは左傾者流の現實認識の樣式が違つて來たゝめに外ならぬ。もし日本主義思想宣傳の效果であるとすれば、それは彼等がそれを正しい（事實の認識としても道德の要求としても）と考へたゝめと云ふよりは、その方が自己の安全を期する途だと考へたゝめに相違ないと、私は認めて居る。

正直は最上の政策であると云ふ。傾向思想克服の最上策はまづ沒傾向的に現實を認識せしめることである。そのためにはまづ、傾向克服者が、無傾向となつてかゝらねばならぬ。

二、婦人の犯罪動機

日本犯罪學會ではこの春頃、『婦人犯罪』の檢討を試みたことがあつた。その時、婦人の犯罪動機に就いての統計が示された。昭和五年度の新受刑者七六七人に就いて調べて見たところ

貧困、一〇三　利慾、八七

怠惰、三二　虛榮、二七

出來心、二一　色慾、一九

射倖、一五　怨恨、一三

嫉妬、一〇　憤怒、一〇

と云ふ數字を示してゐる。

併し、さう云つては失禮だが、このやうな分類法で滿足してゐられる犯罪學者諸氏の考へが私に解し兼ねる。犯罪動機としての貧困と怠惰とはどのやうに違ふのであらうか。利慾と虛榮とはどう違ふのであらうか。利慾と出來心とはどう違ふのであらうか。色慾と嫉妬とはどう違ふのであらうか。怨恨と憤怒とはどう違ふのであらうか。それ等の對立的概念がそれぞれに截然區別され得るとしても、それは我々の觀念內容としてだけであつて、實際問題としてこれ等兩者が區別され得るわけはないし、兩者又は三四の者が同時に一つの犯罪の動機をなしてゐる場合が多々あることも勿論である。

このやうな常識的な分類法に基いて爲された統計が果してどれだけの科學的價値があるのであらうか。私は法醫學界に向つて遠りに憎まれ口を利くやうで誠に恐縮だが、本號が犯罪研究號であるためで私の評論動機を私的小感情を以て揣摩し給はざらむことを切に希ふ。

要するに私は、も少し深く精緻な心理學的根柢に立つ

た犯罪學の勃興せむことを希ふに過ぎない。醫學にも醫學心理學の起つてゐる今日、法醫學にも法醫心理學の發達せむことを私は切に祈るものである。

三、新刑法の保安處分制

この度、新刑法が施行せられたが、この刑法に於いては保安處分の新制度が設けられたやうである。これは各國に於いてもその刑法には草案として規定してゐるが、我が國では今までなかつたさうである。卽ち、刑法を適用するに適しないものとか、又は不充分と思はれる場合に、この保安處分に付するのださうである。從來の少年法の保護處分、精神病院法に依る患者の監護處分などに似たものである。この保安處分には、(一)監護所、(二)矯正所、(三)勞作所、(四)豫防所、の四制の別があるさうである。

これは刑法としては非常な進歩である。無暗に重刑に附するより能のないことは、無暗に叱るばかりしか能のない敎育法と同じやうに、益よりも害の方が大きい。併しこのやうに保安處分に附するためには、心理診斷が必要であらうと思ふ。本誌本號高水氏の紹介にもあるやうに、英獨諸國に於いては精神分析學者が法醫學者等と提挈して、犯罪の科學的處置を實行せんとしてゐる。わが國の新刑法の制定者等がこの方面に於いて如何なる考慮を拂はれたか、承りたいものである。

四、所謂原始感情に就いて

本誌前號に筆者の言及したやうに、かの小學校舍に放火した少年は原始感情の強い少年であるやうだ。殊にこれを新聞紙上で推定したのは兒童心理學者青木誠四郎氏であつた。火を弄することに異常の亢奮を覺えることに就いては精神分析學が既に相當の研究を重ねてゐるが、斯學の研究に於いては、これは無意識的な、本能的な、原始人からの遺傳的感情であると見做されてゐる。青木誠四郎氏もこの衝動を原始感情と見做される以上は、恐らく精神分析學的の考へ方を採用せられてゐるものと見做してよからうと思はれる。氏は時々斯學の考へ方に從つた定說をなされると云ふ事である。

では、謂ふ所の原始感情と本能との間には如何なる差異が存するのであらうか。本能とは本來の能力と云ふ意味にとられ、凡そ人類の生存頭初から彼等の具有してゐた力と解せられるが、原始感情と云ふと、原始人の生活感情が今日の文明人に遺傳せられたものと解せられる。この兩者がどの程度まで區別せられ、どの程度から同一視せられるか、この區別が假りに明白に成立するものと

すれば、放火衝動や、私が先號に於いて『所謂不良外人問題』に關聯して言及した處女性のタブーとその『毒味』思想の如きや、又はエディポス・コムプレクスの如きは、大體に於いて原始感情（個人的要素も固よりあらうが）と呼ぶことが出來るだらうと思ふ。

五、全法醫學界に質す

嘗て法醫學者某氏は某紙に『父を殺した少年』に就いて論じたことがあつた。その少年は大震災の最中に老父の病苦を見兼ねて手拭を以てこれを絞殺し、懲役三年以上五年を言渡されて『默々として服罪した』さうである。

檢事は直系尊族親殺しとして懲役十年を求めたが、×辨護士は、被告が十七歳の少年であること、大震災の物情騷然たる中で、世人が××人や×義者の襲來を事實と信ずるやうな危急存亡の場合に、心の平靜を失つたがための動機で、何人も正當な判斷の出來得べきでないと被告の精神鑑定を申請したが、裁判所では却下した。そこで某氏は『この憐むべき少年を考へて、果して敎化主義の處遇に、どの程度の妥當性があるかと疑』つたのである。私は某氏の人道主義的感情の價値は認めるが、この場合には『敎化主義』（罰を加へて直す）の處遇としてゞなく、分析的見地から見て、これ位の處罰が丁度適當してゐると論じたのである。

現行刑法（新刑法に依つて多少變つたかも知れぬ）第三十九條に依れば『心神喪失者の行爲はこれを罰せず、心神耗弱者の行爲は其刑を輕減す』とあるが、この少年の場合は、何しろあの大震災の混亂當時であつたから、總ての人々と共に彼の少年も、少くとも一時的『心神耗弱者』となつてゐたことは明かであらう。もし果して一時的心神耗弱者であつたとの假定が下されるとするならば、彼の父殺しは精神分析の所謂無意識（青木誠四郎氏の示唆に從ひ、原始感情と名付けてもよい）的行爲であつて、意識的行動（理性に依つて統制せられたる行動）ではない。もし意識的行動でないとすれば、彼の父殺しが父の病苦を救ふための倫理的動機（この種の契機を某氏は認めたがつてゐるらしいのだが）から來たとの推定も否定されなければならない。何となれば、カントも說く如く、倫理的善は意識の命法に俟つて始めて存在するからである。

彼の父殺しが無意識の動機に出づるものとすれば、その動機は精神分析の所謂エディポス・コムプレクス（人類永遠の――卽ち原始的――父殺し本能）でなければならない。彼は實際、この無意識願望を滿足させたのである。彼（のみならず我々萬人はみな）は平常意識の抑壓

に依つてこの本能を無意識裡に押込めてゐるが。『彼の時』のやうに『何が何だか分らなくなつた』時、卽ち抑壓が一時的にもせよ去つた瞬間にはこの恐ろしい本能は頭を擡げて來る。さうして意外の犯罪となつて現れる。併しこの犯罪は彼の意識の與り知らぬところであるにもせよ、彼の無意識はよく與り知つてゐる。その故にこそ彼は『公判に於いても素直に自白し』、『默々として服罪』したのである。異常なる行動の結果に對するこのやうな落着きこそは、その無意識的願望充足の證據の一つである。もし彼が父の病苦を輕減せしめんためだけの倫理的動機から爲したものとすれば、善行爲に對して刑罰を受けることの不當に對して多大の反抗を示しさうなものではないか。それをせず『默々として服罪』したことこそは、彼が自分の罪障を中心承認してゐることの明かな證據である。もし三年以上の懲罰を課しなかつたならば、彼は必ずや自殺その他の方法に依つて自己贖罪の方法を擇んだに相違ないと云ふのが私の論旨であつた。

これは慥に法醫學（又は法醫心理學）上の一大問題である。私はこれだけの大問題への示唆を與へただけでも、某氏から非常に感謝されることゝ信じてゐた。然るにこれへの答辯のないことは勿論、意外にもこのために氏の感情を非常に害したらしく、その後、同氏は我々の一團の友情的態度に對して極めて無禮であるばかりか、『父殺し本能』などゝ云ふ言葉が馬鹿げてゐると嘲笑したものである。それで高水氏は私に代つて本誌第二號の『寸言丈意欄』に於いて、あの辯明をしてくれたのであつたが、本能と云ふ言葉がいけないと云ふなら、青木氏の示唆に從つて『父殺し原始感情』と云直してもいゝ。言葉は事實の符徴だ。どちらでもよい。たゞこの事實を如何に見るかゞ問題だ。私は某氏に失望したから、改めて法醫學界全般に向つて、この問題を提示して見る。何も私の言葉に直接答へて貰はなくともよい。問題を問題とすることを知り、その解決のために考慮を拂ふことに依つて犯罪學上の進運を期するならば、私は滿足するものである。

六、學者の小心

學問上の問題を捕へて公平に論じても、これを私的感情に依つて受ける學者の多いことは、誠に慨はしいことではないだらうか。元來、學者は公の問題を料理する公人である。否、公人であるべきである。併し、それは當爲（ゾルレン）ではあるが、必ずしも事實（ザイン）でないことが屢々であるのは殘念だ。やはり、學者も完全に分析せられるまでは私情を離れることが出來ない。凡そ人間である以上、私

情を失くすることは出來ない。全然私情を去れとは人間に神になれと云ふことである。併し、學者たるものは、少くとも公私の問題を區別する能力だけは具へてゐなくてはならない。これは恐らく分析に依る以外には絶對に途はないやうだ。分析に依つてさへも、なか／＼困難なことなのだから……。

公私の別を知らざる學者に遭遇することの淋しさを、私は嘗て右言及の某氏に就いて經驗し、最近また憶病にして高慢な（これナルチスムスの特質）某心理學者に就いて經驗した。學藝は獨尊的(ナルチスチッシュ)な人間でなければ出來ない事だから、彼等が偏狹排他に傾くことは已むを得ないとは思ふが、而も學問は抑々私心を離れた公の有としてゞなければ存立しないものだ。學者たるものは御互によくその點を反省自覺しなければならない。

最近、坪内博士はその『沙翁全集』の譯稿を改訂するに際し、帝大派の英文學者たちに、從前の自譯に就いての忌憚なき意見を求めたと云ふ。近來の佳話である。學藝の業績は私の努力の結果にして而も公の有である。これが改善と檢討とは、相互に私情を離れてなされねばならない。私は學界一般の氣風のあまりに獨善的、ナルチスティッシュなるを悲む。

最後に、私はも一つ學者と一般人とへの警告として云つておきたいことがある。それは科學者として肩書のある人の判斷は、常に必ずしも科學的ではないと云ふことだ。右に論及した某氏が『父を殺した少年』への判斷の如きも、畢竟するに人道主義的（感情的）判斷であつて科學的（理性的）判斷ではない。所謂科學者の行動の全部を科學的であると思ふものは、人間性をあまりに單純に考へるものだ。人間は自分の感情を支配出來るまでは（完全に分析されるまでは）、眞に科學的判斷を下すことは出來ないのが事實だ。

七、精神病者監護法の改正

八月四日の朝日新聞の報道に依ると、精神病者に對しては從來監置主義を取つてゐたが、これを治療主義に改正すべしとの議が起つてゐるので內務省は省內に開かれた公立及び代用精神病院々立、院長會議に對し種々の諸問及び協議事項を提出したと云ふことである。從來、とられた監置主義と云ふのは、治療せずにたゞそつとしておいて死ぬのを待つてゐると云ふ態度に聽こえて、諸岡博士が（探訪欄參照）從來の精神病學が精神病の如何に癒らぬものであるかを研究するに止まつてゐたと云ふのと一致してゐるやうである。併し監置主義でも一七九二年に於けるピネル氏の「不拘束療法」以前のものに比すれ

ば進歩であらう。けれども新たな治療主義はどう云ふ方法をとらうと云ふのか。治療主義は固より結構であるが、分析法を利用して更に積極的に豫防主義に出づるに越したことはあるまい。

蛇の象徴　（A・A・ブリルより藤崎秀子譯）

童話の深い意味を把握するには多くの童話を象徴的に解釋しなければならない。此處にその典型的な一例がある。――昔、或る處に一人の男があつて、彼は三人の娘を持つてゐた。或る日、彼は市場に出掛ける時に娘達に向つて、「歸りに何を買つて來てあげやうか」と尋ねた。一番上の娘は金色の絲車が欲しいと云ひ、二番目の娘も金色の絲巻きが欲しいと云つたが、末娘のオーダは「市場の歸り道でお父さんの荷馬車に落ちてゐた物を私に持つて來て下さい」と云つた。父は二人の娘が欲しいと云つた品を彼女達に買つた。そして歸り道で突然車の下に一匹の蛇のゐるのを見て、末娘の土産にその蛇を捉へて我家に歸り、門の前にそれを抛り出して置いた。末娘のオーダが、其處へ出て來ると、蛇は彼女に向つて「可愛いオーダさん、私は貴女のお家に入つてはいけませんか」と云つたので、彼女は「私のお父さんはお前を入口まで連れて來たのだけれど、お前は家に這入りたいつて云ふの？」と云つて、彼女はその蛇を家の內に入れてやつた。蛇は家に入ると、今度は彼女の寢室に行きたいと云つたので、彼女は自分の寢室へ連れて來た。と、又今度は彼女のベッドに入れてくれと云ふので、ベッドに入れてやつた。すると蛇はたちまち若き皇子に變つてしまつた。彼はこの方法に依つて、始めて救はれたのである。――吾人が既に夢の象徴に就いて論じた處からして、この物語りの意味を知る事は容易である。その蛇は明らかに男性の要素を表はしてをり、此處に單純な性的願望がある。吾人は精神病に於てもまた、此の特殊な象徴に遭遇すると云ふ事實に注目すべきである。斯樣にして、精神病院にゐる私の一婦人患者は蛇が自分の體內に居ると想像して、或る日彼女は「蛇が自分の生殖器の中に居る」と私に告げた。吾人は此所で象徴が如何にうまく表現されてゐるかを看る事が出來るのである。（完）

資料

フランスに於ける精神分析學の研究

(*Chapitre V. La Critique de la Psychanalyse.* LA PSYCHANALYSE DES NÉRVOSES ET DES PSYCHOSES, Par E. Régis et A. Hesnard.)

松田俊武譯

わが國に於いて精神分析學の研究が始まつて以來、既に二十年以上になるが、外國文獻の紹介せられたものは殆ど獨墺英の三國語のものに限られ、フランスのものはまづ殆ど見當らなかつたやうである。玆に紹介するレヂス、エスナール兩氏の研究と批評とは、從つてわが國に於ける最初の佛文獻輸入としての記録となるかも知れない。兩氏の論に就いては、フロイドもその『精神分析運動史』中（大槻氏譯『精神分析總論』二五六頁參照）に言及してゐる。フロイドの云ふところでは、歐洲諸國の中で精神分析學に對して最も反撥的な態度を示したものはフランスであるさうだ。チウリヒの人メーデルの親切な入門書が容易な道を切開いてゐたに拘らずさうであつたらしい。最初の贊成の聲は中央都市からでなく、地方からモリシヨウ・ポーシャンに依つて發せられ、次いで一九一三年に至つてやうやくレヂス、エスナール兩氏の著が出て同國人の先入見を打破した。併しこれもやはり地方（ボルドー）人であつた。フロイドはこの兩氏の說を『詳細な、併し時々は理解の缺けた論（彼等は斯學の象徵觀を嫌つてゐる）』と評してゐる。さてこの論文は、とにかく一册の書物である。こゝに同時に全部を譯出することは許されないから、とりあへず第五章、「精神分析の批評」の內の「一般的批評」と「醫學的一般批評」の二節を紹介し、餘は他日に讓ることにする。即ち目次を與へれば——

（一）一般的批評

（二）醫學論的一般批評

a、神經症及び精神神經症の說明に就いて

b、精神症の說明に就いて

一、一般的批評

精神分析學に對する種々の批評にして醫學的文獻に現れてゐるものを一瞥すると、其等は非常に數が多く、且つ多岐に亙つてゐる事がわかる。從つて、其等の價値は

甚だしく不同である。

人々は食はず嫌ひに精神分析學の大部分を勇敢に拒否する。道德倫理宗敎などの情操的な考慮を介在せしめる批評は、凡て斯うである。だが、之等は餘りにも極端すぎる。卽ち、或は、フロイドを目して、人々から輕蔑無視されてゐる學的使徒であるとする彼の門弟達は、眞に斯學に理解ある人だと言ふよりは、寧ろ神祕主義的な熱狂的な人達だとするとか、又或は、フロイドを目して宗敎的な幻想家、夢想家、卽ち曖昧な、危險な思想を懷くものであるとし、そしてフロイドは彼の門弟達を一種の集團的妄覺運動に誘惑してゐると評する樣である。所でこの樣な批評をするものは、槪して卓越してはゐるが、何分にも馬鹿げて無邪氣な人達であつて、例へば、性慾を何等科學的に理解する所のない、逆上した道德家とか、自己の敎義に盲目となつた宗敎家とか、フロイド說の樣に自由な思想を恐怖する敎育家とかである。――だが、彼等が何れ程の確信をもつて、自己の所說を支持してるかなどは、今更論議するにも及ばぬ事である。斯學に非常な興味を感じるのは、それが素晴しい精神療法的效果を持つてるからだと言つた者もあるが、全く理由の無い事でもない樣だ。尙又、次の樣にも云ふ。我々がそれに大なる興味を懷く譯は、我々が性的問題を習慣的に如何に取扱ふかと云ふ事に、無論より深い關係があるに違ひない。卽ち、性的問題と云ふものは、社會が著しく變則的に發展して行く爲に、凡ての心理學上の不分明な事や幽幻な現象のあらゆる神祕すらをも包含してるのは事實ではないだらうか。だから、人々がこの神祕なものに向つて好奇心をいらだたせるのも、又已むを得ない話ではあるまいか、と。

この種の反駁は、主として、オッシュ Hoche, フェルステル Foerster, マンデル K. Mendel, ドゥラージュ Delage, ブロンデル Blondel, ボッダン Bodin, ヴァッシェ Vachet などによつてなされるのであるが、之等は問題とするに足らない。我々は之等の反駁を我々の爲すべき科學的批判の內に入らしめてはならぬものと考へる。我々は、同樣の理由からして、凡ての面白半分の批評や、それから、例へばブロンデル Blondel のやつた樣な、フロイドの思想を滑稽化する傾向のあるものを棄て去らう。科學的批評と云ふものは感情的な氣分とは調和しないものだ。自己の一生涯を奉仕した業績が斯くも輕々しい冗談の對象にされるのを見る事は、斯學の創始者の樣な偉人にとつて、如何許り苦痛でなければならないかは、人々の良く知る所である。

尙又、フロイドの反對者の內には、激情にかられて不

作法な侮辱を加へるものさへ屢々あるが、之等の者の中にはフロイドの精神療法の成功を嫉視する醫者や淫猥文學のジャアナリスト達が居る。所で、彼等は苦心慘憺して駁論を捏ね上げて、批評精神や社會常識迄をもフロイド説から防衛する事が出來たと思ひ込んで居るのであるが、我々が其の論文を骨を折つて讀んで見ると、實際は彼等が最も辛辣なる眞理に反抗するもの丶蒙るべき懲罰を受けつゝある事を明白に知るのである。

以上の様な次第であるから、吾人は制限を加へて純粋な科學的精神に立脚する批評のみを述べるに止めよう。最も愼重な批判をなした者は、デュウボア（ドゥベルヌ）Dubois (de Berne), フリードレンデル Friedländer, ヂャネー P. Janet, コスチレフ Kostyleff, ドウ・モンテ de Montet, ラダーム Ladame, ロウモニエ Laumonier, クリュウシェ Cruchet 達であるが、之に對してブロイレル Bleuler は非常に興味ある論戰をやり、彼等に最も巧妙に應酬した。

彼等の批評の大部分は斯學の特殊問題に向けられたものである。

例へばデュウボアは特に斯學の精神療法的原則の價値に目を注いだ。コスチレフは主として觀念聯合、腦髓の反射運動、想像等に就ての、常態心理學への分析學的理論の應用を考察した。ラダームは神經症に於ける性慾の役目に關してのフロイド説を駁論した。クリュウシェは幼兒性慾の實在性を論じた。ヂャネーはヒステリーの外傷的記憶に就ての分析學説を批評した。假令、之等の研究は興味深きものであり、且、多少科學的精神を以て記述されたものであるにせよ、尚又分析學に關する二三年前のフランス人の考を可成り正確に要約したものであるにせよ、之等が部分的な評價でないと云ふ譯には行かないし、又斯學の現代に於ける組織的な批評であるとは、何うしても考へる事が出來ない。

之等の批評家の大部分のものは、フロイドの提唱する分析療法の實施を多少は忍耐强くやると云ふ、この重要な事を不幸にして觀過したのである事を、吾人は繰返し力説せねばならぬ。所で、分析者の大多數のものは、我々とても同様であるが、非常に深い疑惑に陥りつゝも、斯學を長期間に亙つて愼重に實施した後に於て始めて、其の科學的價値を信賴する様になつた次第なのであるから、吾人分析者は以上の様な批評の無效を宣言しても一向差支へないものである。(註)

(註) 斯くしてイー・ジョオーンズ E. Jones はペー・ヂャネーが未だ分析法を實施してない事を非難して、次の様に云つた。「もしも、ヂャネーが分析法を實施してゐたな

らば、彼は、之等の生殖機能の缺陥が病者の初期の性的生活の發達に依存する特殊な障害である事を必然的に確認したであらう。」と。

ヂャネーは答へて曰く、「噫、如何にも私はジョーンズの語る樣に分析法を實施した事が無い。取りも直さず私は、病者の言葉を、前以て決められた獨斷說の意味に從つて解釋しなかつたのだ。……私は、獨斷說を信じなかつたから、當然それをやる事が出來なかつたのだ。私はたゞ眞理を確認せんと探究してゐる者なのだ。」と。(P. Janet, Rapp. au C. de Londres.)

だが、ヂャネーは果して、性的領域に於て眞理を探究した事があるのだらうか。私はそうだとは思はない。ヂャネーは彼の業績内に於て性的心理學に極く僅かの役割しか與へてない爲に、神經症者に於ける性感的機能不全を正當に評價する事に就て、數々の過誤を犯してるが、この事は病態心理學の他の部門に於ける彼の科學的に完成した業績と鋭い對照をなすものである。

フロイドの反對者の多くのものは、ロウモニエ Laumonier の樣に、分析學的方法に從つて僅か許りの臆病な實驗をした後、直ちに失意落膽してしまふ。二三の反對者は、滿足されなかつた性的興奮は、ある患者に於ては、病症發生に必要な刺戟にはなるが、決して唯一の原因ではない事を發見する事が出來たとさへ云つた。だが、この事はフロイドの理論に對する駁論とはならない。又、ある者は、神經症者の性慾が頗る欺瞞的であり、細密な爲に、フロイドは錯誤に陷つたのだと付言する。だが、この事もフロイドは決して否定してはゐないのであつて、或る種の患者では、病的想像は記憶と同樣に病原となるものである。又、ある者は多少は辛苦して實驗した後で分析的方法（methode）を拒否する。最後に、イセルラン Isserlin の樣な人達は、斯學は御都合主義と同じ樣に非論理的であるから（彼等は實際斯う云ふのであるが）斯かるものを論理的に承認する事は我々には實驗して見るまでもなく、不可能に思へるからとて、それを實驗する事さへをも拒むのである。(註)

吾人はこの管見の内に、之等の反對論の二三のものを取り入れよう。

吾人は特に臨床的、精神療法的見地より考察した場合に分析學が指示する若干の注意、並びに、性慾に就ての教育的偏見にとらはれない、斯學の實施に熟達した批評を虛心坦懷に述べるに止めよう。

吾人はフロイドの論述及び彼の反對者の駁論の、實際的檢證から齎らされた私見を述べようと思ふのであるが、其より先に、臨床醫が神經症及び精神症の傳統的な

醫學的概念から先第一に考へる批評を書いて見よう。

(註) ブロアBlois精神病學會に於て、或る若い心理學者は、精神分析學がデカルトの方法論に違反する樣に思へるからとて、斯學を實驗に付する事を拒絶した。

二、醫學理論的一般批評

第一版の本章は全部レヂス教授によつて一九一三年に書かれたものであるが、余は第三版(一九二九年)に於て之に完全な改訂を加へた。改訂の目的は、吾がフランスに於いて斯學が最初に流布されるに當り惹起された、斯學の醫學的論爭の明確な概念を讀者に與へんが爲である。

フランスに於ては斯學の研究は、間接に、フロイドの飜譯書を通じて、唯單に理論的に、知られるに過ぎなかつたものであるが、第一版の本章は其の當時、我が國に行はれた科學的な公正な意見を反映するものであつた。之は又其の時代に於ける吾人の意見でもあつたのだ。

余はフロイド療法の實地經驗を得た後、其の經驗によつて以上の批評が殆んど一般的價値の無いものである事を了解した。卽ち、其の批評のあるものは相當の理論的根據があるらしく思へるのだが、それにしても、フロイドが必しも強く斷言しなかつた主張やフロイドが犯さなかつた過誤を、我々が勝手にやつて置きながら、其の事でフロイド(Maître de Vienne)を屢々非難したからである。この樣な次第であるから、余はレヂスRégisの批評(第一版)の原文の内容を出來るだけ忠實に尊重はするが、分析學的問題を成可く引締める必要上、レヂスの批評に對して余の批評を順次付加しながら、專ら公平を期せんとするものである。〔エスナール記す。〕

* * *

精神分析學は心理學的、卽、理論的批評を蒙ると共に殊に醫學的卽臨床實驗的批評を受ける。この見地に於て斯學を檢討する前に、吾人は、斯學の理論體系に都合の惡い(或は、其の範圍を狹める樣な)凡ての批評を前以て絕滅せんための精神分析者達の反對に一言しておかう。この反對と云ふのは、分析的醫療に就て聽けるやうな意見を述べるに、長年の經驗を積み分析療法を嚴格に專門職業とする者にして、始めて之をなす事が出來ると云ふのである。吾人は斯の樣な分析學理解の奧義が絕對に必要だとは考へないし、比較的短い期間でも充分に分析學の理論と實際とを了解する事が出來、そして其れの醫療的方面に就いて意見を述べても差支へない樣に思ふ。(註)

(註) とは云へ私だけに就て云へば、斯學を理論的に了解するに十ケ年を、それから充分な醫療的知識を得るに五ケ年を要した事を斷つて置かう。フロイドの思想を完全に理解するに要する莫大な年月を短縮する唯一の方法は自

分が精神分析を受けて見る事である。〔エスナール博士〕

我々の考へを隔意無く云へば、斯學の門弟達は丁度哲學的政治的或は宗教的大運動の熱狂した使徒達の樣に、彼等の信念の宣傳及び防衛の爲には確かに尊敬するに足る熱情を示すものであるが、然し乍ら、實際の所彼等は明かに過激であるやうだ。だから、斯學の理論と實際に通曉した精神病學者が、先入見的な敵意や法外な熱狂振りを示さないで、卽ち、不偏不黨の態度で以て、精神病醫の立場から、斯説及び其の醫學的應用を檢討しても惡くないであらう。吾人の態度が卽ち之と信じてゐる。

神經症に付ての斯學理論に向けられる最も一般的な醫學的批評は、斯學が秩序立つて侵略的である事、及び斯學と精神神經病理學全般との關係を、充分な理由はないが、無限の膨張要求の樣なものによつて、次第々々に結合して行く傾向があると云ふ事である。

當初に於ては、斯學は唯單に神經症一般、否寧ろ、僅か二三の神經症を問題にして居たに過ぎなかつた。尙、精神症の領域に於ては、最初は單純な精神症を取扱つてたが、次いで一層複雜な精神症にも及んだ。現在に於ては、早發性癡呆症の樣な外傷性精神症を扱つてるが、將來に於ては、無論一般の痳痺症の樣な明かに組織的な精神症に到達するでもあらう。所で、斯學に凡ての精神症及び神經症に於て著明な地歩を望む許りでなく、主要な絶對權的な、輝しい地位を要請する。如何なる神經症及び精神症と雖も、斯學の一般に明確な還元法及び解釋法によるならば、其れの心理的症候や病原並びに其の根柢迄もが説明されるのであらう。然し乍ら、之等の解釋術は餘り複雜であり、奇妙であり、且又、豫想外である爲に、宛かも象形文字、豫言、謎の解釋法の樣に人々に思はれがちだ。尙、外傷と云ふ事に就て述べるならば、例へば早發性癡呆症に就てクラシックな學者が記述したのと同じ樣に、メーデル Maeder, ユング Jung などの或種の分析者は、旣に其の疾患に純粹な偶然變異、並びに、寧ろ心理的な病原を發見して居る。

約言すれば、分析者達にとつては神經學及び精神病學の凡ての問題は分析學によつて解釋されねばならないものであり、而も、斯學のみに依據せねばならないのである。

エ氏評——この第一の原則的批評はフロイドの熱狂的門弟達と、それから殊に、フロイド説に異議を説へる學徒に對して向けられたものである。我々が斯學原理を完全に理解せんが爲には、性慾の主要問題に對して（同時に、一般の感情生活の問題に對して）傳統的なものとは非常に異つた態度を採らなければならないのは確かだ。所で、若しも精神分析者を

教育的偏見から解放してやると、實際の所、斯學的見地は非常に排他的な外觀を與へるものだと、彼に思はす危險に陷る。だが、之れは程度問題だ。

余は、我がフランスの者達がフロイドの性慾上の觀念を最も正當に評價し、以て、他の諸國に於て見られた樣な無暗な理論上の誇張に陷る事を避けうるであらうと確信する。――

＊　＊　＊

若し斯學の若干の詳論に眼を轉ずるならば、吾人は直ちに醫學的分析學には理論的、及び方法的の二方面のあることを知るであらう。

a、神經症及び精神神經症の說明に就て

フロイド敎授は、神經症を現實神經症或は本來の神經症と精神神經症の二つに分類した。前者は有機體の中毒による機能障害であつて、何等の心理的意味も、病原的コンプレクスもない。之に反して、後者は本質上は抑壓し損つたコンプレクスの作用による。フロイド說はこの出發點をフロイドが闡明したと云ふよりは、寧ろ既に自明のことゝして是認するものゝ樣に思はれる。以上の事、並びに、現實神經症は心理に何等關係がないと謂ふ事は如何にして證明されるだらうか。尙、我々が內臟の自家中毒による精神障害が存在する事を確證する事實を何う考へるだらうか。而も、他面に於て、早發性癡呆症の樣な、心理的病原に歸せられる傾向のある精神症に於て、この事を確證するのである。だが、この場合には、斯學は何等のコンプレクスをも發見出來ないと云ふのは何うしたものであらうか。所で、非常に優秀な分析者の告白によつて見るも、斯學は必しも常にコンプレクスを發見する事が出來るとは限らないのである。約言すれば心理的內容なき現實神經症と心理的內容ある精神神經症との區別は相當微妙なものでもあり、且又、理論上のものでもある樣に思はれる。從つて、斯學は基礎的見地に於ては上述兩者の區別を全く是認してゐるにも拘らず、この兩者を性的事實に關聯させてると云ふ譯は、斯學に於て主要な役目をしてる樣に見える幼兒的コンプレクスが全然存在してない樣な場合でさへも、フロイドの汎性慾論は決して其の適用の權利を失つた譯ではないからだ。だから、二つの現實神經症の內の神經衰弱症の方は自瀆に、不安神經症の方は性的不滿に歸因すると說明するのであらう。

王氏評――現實神經症と精神神經症との區別が不分明であり、理論上のものに過ぎないと謂ふのは、斯學の理論的批評家が、實驗に際して、兩者の區別の比較關係を會得する機會を持たなかつた爲によるものである。精神發生學は常に存在するのだ。尤も、現實神經症に於て、精神的病原が曖昧なの

は、現在の性的不滿によつて惹起され維持されてゐる主要徵候の彼方に、それが隱れてしまふからだ。

フロイド說は先驗的に、ある場合には精神發生的抑壓が存在し、ある場合には存在しない事を是認するものであると言つたりなどするのは、神經症の發生は「偶然の體質」に起因すると謂ふ傳統的假說に慊らない研究者達が、日を逐つて益々種々な觀察をなした結果、この斷定を得たのだと云ふ事を否認する樣な事となる。

吾人はこの際、フロイドは自瀆の影響を確かに誇張しすぎること、そして、これは神經症殊に神經衰弱症並びにヒポコンデリーが自瀆や精液浪費によるものとする過去の理論に吾々を導くものである事を注意して置かう。自瀆は、一般の場合には、人々が過去に於て信じ、尙現在でも多くの者が信じてゐる程、心身の健康に絕對的な惡影響を及ぼす樣な事は、全然ないと謂ふこの我々の確信は、長年に亘る眞摯な經驗に基礎を置くものであつて、實際久しい以前から分つてゐたのである。吾人が屢々語る自瀆は無論頑固な永續的のものを云ふのであつて、幼少年時代の一時的な餘り重要でない自瀆を指すのではない。之は原因と云ふよりは寧ろ結果なのである。フロイド自身も、凡ての自瀆者が神經症者になるものではなくて、或は人々は如何に控へ目にやつても重症の神經症者になる事を認めてゐる。つまり、神經衰弱症の基礎には神經衰弱的、或は性的衰弱的な徵候の發現に多少は都合の良い樣な體質があると云ふのである。吾人の意見を繰返し述べるならば、病的自瀆者は男女を問はず、決して自瀆の爲に神經症に罹る樣な事はなく、寧ろ反對に、自瀆は他の衝動的或は强迫的傾向と同樣に、神經症の結果であり、徵候の一つであるに過ぎないのだ。其の證據には、自瀆者は何時と云ふ事はなく、一種の窮迫狀態の樣なものによつて自瀆を强迫されるのである。この場合の自瀆は任意的のものではなく、屢々自己の意慾に反してさへ自瀆を强迫されるものであつて、之は丁度不可抗的な中毒狂的傾向が同じ病理的狀態で起るのに似てゐる。所で今度は、過度な自瀆が個人の神經質や神經衰弱を增進さすと云ふのは可能でもあり、且ある場合には確實だと云つても良い。だが、この場合は、一種の循環論法が反動作用の爲に、原因の上に益々增進する結果の活動が積み重ねられて行くに外ならないのである。吾人の考へを述べるならば、自瀆の厄介な結果は確かに存在しはするが餘り誇張されすぎたのであつて、實際、大多數の人々は自瀆に對する(傳統的な恐怖)の爲に苦悶して居るもので、遂にはこの恐怖に驅られて强迫恐怖症や强迫觀念となり自殺する樣に迄なる。で、眞に過度な自瀆の犧牲となる

ものは之等の者よりは遙に少いのである。何は兎もあれ、吾人の斷定し得る事は、自瀆はフロイド説が主張する樣に常に神經衰弱症の原因となるものではなく、寧ろ精神葛藤の一表現に過ぎないと云ふ事である。

吾人は性的不滿の役割にも同樣に論ずる事が出來るだらう。節慾は危險であり精神神經症の發生を左右すると云ふ意見は一般に通じるものではない。實際、この點に就ての豐富な實例を見るに、我々は心身の全き健康狀態を充分保ちながら絶對的な禁慾生活を送る事が出來る。尤も、フロイドも彼が非常に漠然と説明したある條件の下に於ては、禁慾は健康と兩立し得る事を是認してゐるのは事實であるが、この條件に關してフロイドは個人の〔性的緊張〕の變化と云ふ事を問題にする。然し、この性的緊張が病原となるのは、唯單に體内に性的分泌物が蓄積される結果だと斷定する事は、取りも直さず、醫療によつて消滅さすを得ない性的障害を何等の根據なくして假定する事になる。要するに、之の事は、不安神經症の發生を完全若くは部分的禁慾により性的不滿に歸せしめる事となり、從つてその病原學を凡ての制限を越へて狹め、且他を除外して唯一つの原因丈の重要さを法外に誇張する樣な事となる。尙、フロイドは神經衰弱症と不安神經症とは、その病因が關聯してるから、完全に共通し得ると云ふのであるが、この事はフロイドが創設した現實神經病と精神神經病との病原學的並びに病現學的分類の價値を減少せしめるものである事を注意して置かう。

ヒステリーとそれから多分强迫神經症とによつて代表される精神神經症は、發達の段階に從つて幼兒期に迄遡る事の出來る、抑壓し損つたコンプレクスに起因するのだと云ふらしい。だから斯學はこの連續關係の再構成をやるのであらう。精神發生學の再構成をする事によつて精神的疾患の內容を探究するとの原則は、古典的方法に矛盾する樣な根本的方法を其の內に含んでない限りに於て、非常に正當なものゝ樣に思はれる。分析學は昔の神經精神病學に於て既に用ひられた方法を益々有效ならしめる心理探究の方法であるが、然し乍ら、現在の所では未だ不完全な從屬的な探究方法の一つである。所でこの方法は、隨分前から卽ちフロイドの研究よりもずつと以前から、不確かな經驗主義的な遣り方で應用されて居たのだ。その法則は、實際非常に簡單なものであつて、現在の症候から過去に迄遡る觀念起原的の聯鎖を探し求め乍ら、患者の個人的な感情的經驗に入つていくのである。卽ち、醫師は治療をやる度每に患者に臨床的な質問を發し乍ら、症候の心理學的病歷を作る樣に計るのださうである。無論、フロイドは上述の技法を改良したので

はあるが突飛な方法でやつたのだ。而も、こんな風の改造をやつた許りに、其れの技法は非常に複雑となり、又範圍が廣くなつた。で、其れは過去のものよりも一層不確實になつたし、且又餘りにも假説的でありすぎる樣に吾々には思へる。故に、如何なる分析的手法と雖も、吾人が他の個所に於て述べた樣に、多數の解釋が同一の被檢事實に付て下し得られるとの非難を受けねばならぬ事となる。

エ氏評——自瀆に關して——レヂスのみが此處で主張する成熟者の自瀆に就て述べるならば、フロイドが神經症發生を自瀆に歸してるなど云ふのは正しくない。即ち、フロイドは幼少年者の神經消耗の非常に稀な徴候のみが自瀆に歸因するとしてるに過ぎないのであつて、其以外の凡ての症例では、彼とても自瀆は原因であるよりも寧ろ結果であると考へてる。自瀆は自己性感的定著の極めてありふれた徴候であつて夫々の場合に從つて重要であつたり、或はそうでなかつたりする。自己の非行に對して傳統的な恐怖を懷くが爲に自瀆が主動的に働きかけるのだとの意見を、先づ第一に發表したのは確にフロイドであつて、彼は最近上位自我の概念によつてこの事を明確にした。〔このレヂスの批評は、最も優秀な臨床醫がフロイドに就いて善意で批評して、而もそれが無價値であつた著明な實例である。〕

性的不滿の不安神經症に對する關係をレヂスは認めない。然し、フロイドは久しい以前からこの事を組織的に研究した。だが、他の人々はこの樣な説明方法を拒否して、其の問題を眞劒に研究した樣な者はフロイド以前には誰も居なかつたのだ。

精神神經症を精神發生的に解釋したことに關して、レヂスは之が今尚進歩しつゝある傳統的な觀念から生じた一方法に過ぎない事を論じたのであるが、この事は如何なる精神分析者と雖も檢證して見樣とさへしないであらう。

b、精神症の説明に就て

殊に分析學を精神症の病理學に應用する事が最近行はれたが、この事は、斯學が漸進的に組織的に侵略して行く傾向を著明に示すものである。この點に付ては、簡單に述べるに止めよう。早發性癡呆症に就いては、分析學が其れの凡ての事實や徴候を探査し、暴露し、解釋し得たので、遂に分析學的考へ方に適應した、それの説明方法を發見する事が出來る樣になつた。斯學は凡ての病的な表象（假令それが如何樣に不條規であり、出鱈目であつても）の謎を解く鍵だと云つても良いだらう。斯學は凡ての表象の隱した意味を認めて鮮明にするものであるが、未だ現在の所では、早發性癡呆症者の發する「言葉のサラダ」（語臉）とも呼ばれる、あの非常に錯亂した言葉の意味に就いては何うする事も出來ないのであつて、

分析學を以つてするも、あの祕敎的な言語の豫想外の意味は不明のまゝである。以上の次第であるから、少くとも或る人々に言はせれば、凡ての病症は精神發生的に説明し得るとの結論に達する譯であるが、ブロイレルの如き他の者はこの様な結論をする程大膽ではない。斯學の説明に就てのこの様な讃め過ぎは、嫉妬妄想や單純な追跡妄想の説明に於ても見られるのであつて、分析學的に謂へば、之等のものは、程度の差こそあれ、兎に角象徴化によつて歪められた所の過去の場面の單なる再生に過ぎない事となる。

フロイド説は次第々々に精神症の夫々の症候の領域に侵入して行くのではあるが、然し乍ら、斯學は精神病の症候を斯學のみによつて説明せんが爲に、其等のものを無理に分析學の領域内に押し込め様とするものであるからして、精神症の症候を審査するにしても、前以て分析學的に豫想され制限された考へ方でやるのである。だがこんな事を之以上說いて見た所で何にもならない。

工氏評——所で、精神病學に於ける分析學者の主張が何れ程正當な價値を有するものであるかを知らうと思ふならば、我々は、斯學が精神病學に於ける一つの新しい見解である事、而もこの見地は（精神症を治療する事は出來ないが）臨床醫學に種々裨益する所がある事を銘記せねばならぬ。斯學が病因の精神發生説に關して屢々作り出す假説は、多少不合理なものではあるが、然し乍ら、精神病醫が顯微鏡では到底發見出來ない様な事象をそれに期待したり、或は又、漠然とした形而上學的唯物論から得た淺はかな、暗示的な觀念によつて、臨床的事實に關係ある腦髓的傷害を想像したりする精神病學の假說程不條理なものではないのである。（此項完）

奥本　島田

本誌第四號に記載されてゐる様に、羽仁もと子女史の如き精神分析學を御存知ない御方があるけれども、私は次の様な精神分析に理解ある女性の存在を知つて感謝してゐます。私が精神分析學の存在を知つたのはこの婦人の御陰なのです。それは昭和七年五月號雜誌「日本國民」に載つた「既成宗門の沒落と新興宗教」（野見山不二子女史稿）であります。論文は相當長いものですが、フロイドの精神分析に就いて、次の如く論じてゐます。

『勿論フロイドの學說は、或種の神學說、倫理說によつて支持されて來た峻烈な禁慾生活の價値をも又共にうちくだくであらうが、これによつて最も正しい廣い意味に於いての精神生活に何等のヒビも這入らぬことに大安心をなしうるものであらう。』

心理學と政治

――"Psychology and Politics," by W. H. R. Rivers, LL.D.――

岩倉具榮譯

リヴァーズ（一八六四―一九二二年）は英國の醫學者、心理學者、人類學者、民俗學者として盛名を走せた人で、多くの學會や研究團體に會長としての位置に就いてゐた。吾々の見るところでは典型的な英國學者で、當時社會に重望を負ふてゐた。その高弟たるエリオット・スミス Eliot Smith が『氏の生涯、氏の睿智、氏の廣き興味、同情、學識、並びに人格の寬宏、正直こそは、學問の進歩に携る我等皆人の模範たるべきものである』と云つてゐるのは、よくその師を評し得てゐる。精神分析學に對しても同情厚く、同國人はリヴァースの推讃に依つて精神分析學を信用すること愈々厚かつたと云つて過言でないかも知れない。斯學關係の著書としては『本能と無意識』（一九二〇年）、『葛藤と夢』（一九二二年）などがある。わが國に於いては柳田國男氏始め、リヴァースに敬意を拂ふ人々は相當多いに拘らず、未だその著書論文の紹介は、稀有のやうである。我等岩倉氏に囑して本稿をこゝに紹介する所以である。本稿は一九二二年、ロンドンに於ける講演筆錄であつて、内容は精神分析學には直接關係は薄いが、本誌本號の特輯題目に必然の關係があるから特に揭げた次第である。（編輯者）

私は心理學と政治との關係について話さうと企てゝゐるのであるが、これは自分ながら、いさゝか大膽に過ぎたやうな氣がする。多分、諸君の中大部分の方々は、吾々が現在遭遇してゐる多くの面倒な政治問題のあるものを解決するために私がこの樣な心理學的知識を利用することが出來るだらうと希望して居られると思ふ。たとへこの方面に向つて私が多少進むことが出來るにしても、私は諸君が餘り多くを期待されない樣にお賴みもし、又吾々凡てが目指す目的を成就する途中には爾々の障害物があることを斷つておいてから、この講演を始めることにし度いと思ふ。

最初にお斷りしておかねばならぬ點は、心理學といふ科學は未だ大層若いといふことである。吾々が今、關心を持つて居る如き種類の問題に關しては、それは未だやつと十代にも達しないと云へるのである。吾々はみな今日では、政治といふ技術は、理智によつて支配されるより遙か以上のものであることを認めてゐるが、而も尚極

く最近までは心理學者は他の事にはあまり興味を持つて居なかつたのであつた。最近まで心理學者は精神生活の感情的方面や、感情方面と密接の關聯ある本能や、又は意識には即座には近付き得ないし、また近付き得ても近付くになかく骨の折れる無數の經驗、而も我々の思想や感情に影響を及ぼす無數の經驗に對して殆んど注意を拂はなかつた。之の方面の心的經驗及び活動は智的過程に比べると非常に曖昧で不定のものであるから、それ等を研究することは、論理學をやつて知力的な訓練をやつて來たり、形而上學をやつて微妙な區別や言葉の洗練を仕慣れて來た人々（當時の殆ど總ての心理學者がさうであつた）にはあまり氣乘りがしなかつたのである。心理學では少しでも感情的な方面が如何に無視されてゐたかといふ驚くべき實例としては、私は自分自身を擧げることが出來る。大戰の直前頃で十年前にもならないが、私は心理學の試驗の爲に（而もそれが心理學的醫術を專門にしようと望んだ者の爲に考へられた試驗に對してであつたのだから尙更いけない）按問を起草する一人となつた。大戰後吾々はこの按問の訂正を企てねばならなかつたが、その時そこに本能と云ふ題目が含まれて居なかつたことを發見して私は呆れたのである。その頃には本能と云ふやうこなとは吾々はあまり問題にして居なかつたので、その重要さが今日ではあまりにも自明で、まさかこれが省略されようとは信ぜられぬ樣に思はれる心理學的醫術の方面にさへその題目を逸した程であつたのだ。そして今では吾々はみな、心的活動の他の多くの分野に於て、本能や、本能に關係ある感情的情態や、本能がその基礎となつてゐる情操などが、如何に人類の行動を、殊に（政治的行動はその單なる一部類に過ぎない）社會的性質の行動を決定するに與つて重大な要素であるかを認めるのである。現在ではそれが行き過ぎて、（とかく人間と云ふものは經驗に依つて前非を悟るとさうなり勝なものだが）振子は反對の方向に餘りに遠く走り過ぎて了ひ、又振動し、いや目下まだ走りつゝあるところだが、今や人間行動の決定に於る智的要素の重大さをあまり低く評價する傾向がある。理智や理智的要素が感情の勝つた心的要素をも支配し導くに如何なる役目をなすかと云ふことや、又、個人のにせよ群衆のにせよ、正氣の行動の窮極の要素は要するにそれの基礎となつてゐる本能要素が理性によつて變形されたものであると云ふことが分つて來るのは一足飛びと云ふわけには行かない。只、段々と分つて來るに過ぎない。

この科學はまだ若くて實際殆ど胎生期のやうな不確實な狀態にあるのだから、その發見したところを實地に適

用するには餘程氣を付けねばならない。今や心理學は、世人の信用を失墜せんとするの危險に瀕してゐる。それは、一部分は心の無意識的な幼兒的な方面に對する心醉者の熱心の爲ばかりではなく、その假定された發見をその根據が不確實な中に、早まつて實地に利用せんと試みる爲である。今日では心理學研究の興味は殆ど世界的となつてゐるが、何れの日かそれに對する反對があるであらうし、又現在では心理學的說明や解釋がこの樣に希望と興味を起してゐるが、やがてこれ等に關心を持つのは滑稽だとされる時が來るであらうことは、私には殆ど疑ふ餘地がないやうに思はれる。

私は政治に於る心理學の直接的價値について以上の如く考へてゐるから——その窮極の價値に就いては何等の疑問を持たないが——心理學が政治問題の解決に卽座に適用され得るかどうかを示さうとの餘りに野心的な試みを敢てして、却つて反動の來ることを早からしめようとは思はない。

この講演に於て私は主に、ある一般原則を取扱ひ、そしてたゞ問題を述べるに止めて、その解決は試みないであらう。併し同時に、私はかう信じてゐることを告白する、一つの問題を明白に曖昧でなく述べ得るならば、その解決は既に半ばついたことになるのである、と。

まづそれだけの警告を與へておいて、さて私の問題を考察し始めるのであるが、吾人は心理學を政治の分野に適用するに際して、個人心理よりもむしろ社會的或ひは集團的心理を取扱ふであらうといふ事實を先づ强調しておかねばならない。と云ふと同時に直ちに澤山の問題が蜂起して來る。それは最も困難な性質の問題で、個人心理と集團心理との關係如何、集團心理或は群集心理の槪念は如何、また社會は如何なる點まで一つの有機體と見做され得るか、又多くの個人が一緒に行動する場合に、その結合された行動の結果は、個人活動の結果が何か外部の力によつて合成されたにしても個人の個々別々の行動から發するものとは同じではないといふ事實を如何に說明するか、などの諸問題である。之等の問題に關して、私はこの講演の中で話す積りである。で、私は今、個人の研究から群衆の研究に向ふ心理學者が直面する基本的問題をまづ論じ度いと思ふのである。

私は一九一四年に『社會學と心理學』と題する論文を書いたが、戰爭が起つた爲に二年後迄それは公刊されなかつた。その論文の中で私は、心理學と社會學との間の關係について考察し、社會心理に關する適切な科學を樹立すべき吾々の主なる道は社會的行動を觀察することであり、またそのためには日常生活の社會的行動許りでは

なく、宗教、經濟、政治、並びに言語などの如き社會慣例として綜合される社會的行動をも研究せねばならぬとの論旨を主張したのである。私は「行動主義」"behaviourism" といふ言葉は用ひなかつたが、その論文に主張された觀察點は、社會的行動の眞の淵源を諒解する爲には、吾々は行動主義者の態度を採らねばならないといふことであつた。人類の社會行動は、その行動の心理的根據とは獨立して、方法論的行動として研究することが出來、それが「純粹社會學」と呼ばれる原則であるとの見解を述べたのである。またそのやうな原則が社會心理學の研究に對して堅固な基礎を供するのだと見解を述べたのであつた。自分の觀察點を說明するために、私は（比較研究された）戰爭時の社會狀態とウェスターマーク教授が特に强調した復讐感情との間の關係を採用した。彼の著作『道德思想の起原と發達』"The Origin and Development of the Moral Ideas" (London, 1906, vol. 1 p. 477). に於てこの著者は、特に血族鬪爭としての戰爭は復讐の感情の動いた結果であると先づ喝破し、この論旨を立てるために世界の種々の地方から多くの戰爭の實例を引いてゐるが、これに依つて彼の論旨を支持することが出來ると信じたらしいのであるが、事實としてはそれ等の多くは彼の論旨に直接撞着するのである。このやうにウェスターマーク教授は、單なる一例を擧げれば、自說を支持するために、血族鬪爭は、殺人者を家族の中に取り入れ、彼を家族の一員とすると云ふ形で復讐がなされる場合に決定されると云つて居る。彼の最近の著作『人類結婚史』"The History of Human Marriage," (5th ed., 1921 vol 1. p.9) から判斷しても、ウェスターマーク教授はこの様な社會的行動と、血族鬪爭が復讐に依據するといふことは直接適合しないことを理解出來ない樣である。吾々はこの種類の行動から始めても、ウェスターマーク教授によつて主張された單なる復讐感情以上の複雜した動機を想定せざるを得ないであらう。よしんば復讐はやはり吾々の主なる興味として殘存するにしても、吾々が次の數々のことを發見するとすれば、吾々は何とか取扱方を變へなければならない。卽ち、復讐は人類の心の一般的特徵であること。もし一般的だとしたら人類史上でどの程度迄それは發達したか、また弱められたか、或は變形されたか。又これが一般的だとしたら、違ふ人種の間でも同じ內容と性質を持つた感情であるか、肉體的或は社會的環境に伴つて違ふものであるかどうか等である。之等の區別は官學的な閑問題ではなく、最重要なものである。かくして復讐は一般的の人間性ではないといふことが示されゝば、從つてそれは本能的で

はないことになり、本能的としても極く最近獲得された本能の現れであるか、或ひは根深い本能的存在としても、禁壓すれば出來るものだと分るであらう。以上の二つはどちらにしても戰爭根絶と云ふ點に關しては、復讐がウェスターマーク教授の云ふ如く原始的の深く存在する一般的本能である場合よりも、吾々としてははるかに希望のある狀態に居るわけになるのである。

私が只今問題にしてゐる拙論『社會學と心理學』のさきの方で、純粹社會學或は（もつと適當した言葉を用ふれば）歸納的社會學といふ科學は理論的には存在し得るが、この科學がその術語を日常生活の言葉（それは必然的に心理學的な意味を帶びるから）から取るのでは、之は不可能だと云ふことを明かにした。また純粹社會學と社會心理學、或ひは歸納的及演繹的社會學の二方面の研究は、相並行すべきであり、又研究者は二方法の何れに從つて居るかを判然と認識すべきであることをも、私は明かにしておいたのである。

私が到達した一般的結論は次の如くである、吾々の現在の研究程度に於て、また恐らく將來永い間、純粹社會學或は歸納的社會學の研究家は、現在及び將來にも社會的心理學のためにより多くを、心理學者が社會學といふ科學の爲になし能ふよりも遥かに多くをなし得るし、又之からもなし得るであらう、と。集團心理學といふ科學を樹立するには吾々は永い間かゝつて社會的行動を觀察し、この觀察を以つて主なる器具としなければならない。

心理學と政治に關する講演を始める際に、その範圍に政治をも含んで居る社會學といふ科學について此のやうな言葉を用ゐては始めから少々皆さんの氣を重くさせるやうな氣がする。私が言及した論文は八年前に書かれたもので、方法論としてはそれはまだ妥當すると私は信じてゐるが、心理學といふ科學はその間に非常に進歩した。或はかう云つた方が正しいかも知れない、——或る心理學說は當時あまりよく知られてゐなかつたが、今日では全般的に理解されてゐるとは云へないにしても、殆ど全般的に興味を持たれるやうになつた、と。知識がこのやうに進歩したために、心理學說を直接何等かの實際政治問題の解決に適用することが、八年前よりも一層可能になつたかどうかを、この講演で考へて見度いと思ふのである。

社會學にとつては政治の研究はその一部分をなすわけであるが、吾人はその社會學といふ包括的な科學と心理學との間の關係を考へるに當つて、一例として戰時の社狀會態と復讐の感情との間の關係を採つて見たのである。私は今、政治學の分野に一層適確に當てはまる同樣

な數個の事例を擧げ度いと思ふ。けれどもさうする前に、私は吾々の主題に確に關係を持つ基本的に重大な一問題に言及しておかう。吾々の現在の心理學的知識は個人の研究から得たものである。即ちまづ第一に、多少とも常態の個人の心理過程を觀察し、或は內省することに依つて得たもの。次に、變態的狀態の下にある個人、又特に病氣に犯された場合、及び幼年期の發達期間にある個人を外部から觀察して得た結論に加ふるに（好ましい場合には）さう云ふ個人の內省によつて得た結論を以てしてゐるもの。所謂「社會心理學」の大部分は、この個人心理學の結論を集團行動に直接適用することに存するのである。さうしてその際、暗默裡に、或は公然と假定してゐるのは、即ち社會が個人より成る故に、個人に就いて眞理であることは必然的に、個人の集りに取つても眞理であるに違ひないといふことである。この問題は後程考へることにしようと思ふ。今は只、何故社會的行動を獨立した說として研究する必要があるかの今一つの理由として述べておくのだ。何となれば、私が提出した如き問題は先驗的論據に基いて答へらるべきではなくして、滿足な答へは、個人行動と群衆行動とを比較してその相違の研究によつてのみ到達される事であるからだ。只今の處、私は只この問題を諸君に示し、そして政治の二三の部面に於る動機と行動との間の關係について簡單に探究する私に從いて來られる間それを心に留められることをお賴みするだけで滿足せねばならぬ。

私は最初の例として婦人選擧權問題を採るであらう。我が國及他の諸國に於てこの政治問題について永い鬪爭を促した多くの衝突動機の中には、政治能力の點に關する男女間の心理的差異の存在について科學的の名に値する何等適確な知識のない事であつた。兩性の心理的特質を比較した著作は、大抵は感覺の銳さ、反應の速度などを研究したもので、それ等は政治的機能の實行に當つて演ぜられる遙かに精細な心理要素とは何等明白な（否、全然）關係を持たない。心理學といふ科學は、婦人選擧權が政治的鬪爭の問題であつた時に何等かの價値ある寄與をなし得たかどうかを私は疑ふ。解決せらるべかりし問題は非常に違つた種類の要素によつて決定された。被選擧權を納稅の必然的結果と見做す如き政治的原則の適用は別問題としても、その係爭點は大部分個人的の好惡や偏見により、又政治的便宜に基いて決定された。而も他方、恐らく最も著明な事實は、我が國に於て鬪爭の最終の平和的歸結は、主としてとは云はないまでも大部分は、純粹に感情から、即ち、婦人が戰爭中行つた凡てに對する社會の感謝から決定されたといふことである。且

又、婦人に政治的機能が許されてゐない間は、政治の術に對する彼女等の技能を眞實に知ることが出來なかつた。但し勿論、議會以外の他の團體に於いて、又英國以外の國で、婦人に政治が委託されてゐる場合は別である。從つて婦人が政治的機能を實行する樣になつて以後は、世界は科學的研究を可能ならしめる多くの事實を所有するに至り、又所有すべきである。私が示さうと思ふ點は、婦人の政治行動や彼等の政治行動と男子の政治行動間の差違（若し有るとすれば）やを觀察すれば、兩性の心理についての吾々の知識に眞の寄與をなす多くの事實が分つて來るといふことである。それ等の事實に依つて、男女間の心理的差違（若しあるとすれば）及び此の如き差違の性質が吾々に明かになるであらう。私が考へてゐる一種の事實は、投票する男女の相對的比例の研究から、又特に係爭點が一層混合錯雜してゐる議會の選擧と比べて即座に理解される地方選擧に於るこの點の差異の研究から、推斷されるであらう。もう一種の事實は、婦人選擧權弘布前後の方法の、特に、教育と衞生に關する立法の性質を研究することから推斷されるであらう。この點に於て特に價値のあるのは、アメリカ合衆國に於ける如く、その或る州だけがこの選擧形式を採用した樣な地方に於る證跡であらう。私の論點は、政治行動の觀察と統計的研究とは兩性の差違についての吾々の心理的知識に對して、他の方法で得た知識がそこに含まれてゐる政治問題の解決に對して寄與し得たであらうより以上遙かに貢獻し得る、といふにある。

又、男女の政治行動に差違が存するとすれば、それ等の差違は兩性の本然的性質に固有なるものか、或はグレーアム・ウォラス Graham Wallas の云ふやうに社會的遺傳としての諸要素に依つて決定されてゐるものか、これ等の遙かに一層困難な問題の解決を期待し得るのは、たゞ右に述べて來た如き種類の諸事實（そこにもつと別の證據をも加へて）を利用することに依つてゞあらう。私が主張せんとする點はつまりかうである。即ち吾々が前にも云つた通り、人類史に於いて復讐と云ふ感情が如何なる位置をとるかを理解するのは、たゞ戰爭と呼ぶ特種の行動を比較研究することによつてのみ可能であるのだ。丁度それと同じで、政治に於ても吾々が政治行動に含まれる心理的要素の眞の性質を諒解するのは、政治行動の研究によつてのみ可能である。比較社會學の廣大な分野に於ても、又政治の狹小な分野に於ても、共に社會的及政治的行動の事實を認識することの方が、吾々の現在持つてゐる心理學的知識が社會及政治問題の諒解と取扱に寄與し得るよりも、遙かに大なる貢獻を吾々の心理

學に對してなし得るのである。

　私の說きつゝある命題の著しい實例は、私の見るところでは、「政治に於る人間性」についての我が會長の偉大なる著書中に供せられてゐる。その書物の全體を通じて著者は、自分が心理學的知識を政治行動の說明に應用してゐることを謙遜に暗示してゐる。私は敢て次の如く幾らか違つた見解を述べる。卽ち、この著書の最も重大な貢獻は、その著者が政治生活に從事してゐながら、而も公平な觀察の能力を生かした人であり、さう云ふ人によつて集められた多くの事實がそこに與へられてゐるといふこと。又、「政治に於ける人間性」に記錄されてゐる通り政治行動を硏究することによつて、グレーアム・ウォラスは心理學の助力を受けた以上遙かに心理學に貢獻したことである。別方面の仕事に依つても心理學は、グレーアム・ウォラスが政治觀察によつて自ら進んで行つた方面へと動きつゝあつたのは眞實であるが、この著書の特別な貢獻は、他の者が個人の病的狀態の硏究に依つて知つた要素は亦政治分野に於ける我國人の集團行動にも働いてゐるといふことを證明した點にあつた。

　心理學と政治との間の關係と云ふ問題を論ぜんとするに際して私がまづこんなことを云つたのでは、政治家に對して心理學の知識がどんな價値を持つてゐるかを私が明白に指示するであらうと期待して居られた人々を失望せしめたかも知れぬと思ふ。併し私はわざとかういふ風に始めたのである。何となれば、私が云つたことに何等かの眞理があるとすれば、そこに指示されてゐる敎訓は明かであるからだ。政治心理學者も材料の揃はぬ中に仕事をすることは出來ないのである。政治心理學者も依つて以てその假說を樹立すべき材料や、よつて以つてその假說を試驗すべき事實を持つのでなければ、彼等も政治行動の動機についての法則を定めることは出來るわけはない。

　私が諸君の前に述べた見解に何等かの眞理があるとすれば、吾々が知識を進めるために必要なのは政治行動の觀察から得られる材料の蒐集である。但しこの場合「觀察」と「行動」といふ言葉を非常に廣い意味に用ふるのである。これ等の材料は數箇の組に分類されるが、その中二つは明かに互ひに區別される。心理學者の役に立つ事實の一組は、旣に政府諸省の集めてゐる、又は政府各省の集め得る諸々の記錄で、常に多少とも統計的形式のものである。他の主要な組は、心理學的訓練ある人々により、政治行動の種々なる形式を直接に觀察することから得られる。で、さういふ風な觀察の一例としては、私は旣にグレーアム・ウォラスの著作を引いたのであつた。

これら二種の觀察を考へるに當つて、私は始めに自分の確信を述べるならば、第二種の觀察は二つの中で遙かに一層重要であるばかりでなく、それは一層直接的に必要で、それから引出された知識は統計材料をうまく利用するにはなくてかなはぬものである。社會心理學者はこゝに於て、卅年前に個人心理學者が最初に實驗方法に向つた時に提示されたのと大變似よつた問題に直面するのである。新しい方法の光輝と魅力とに眩惑されて、多くの人々は心理學の諸問題は實驗法によつて解決されつゝあると信じた。その當時の所謂「新心理學」の擁護者たちは、その方法を洗練し細かく計量すればする程、又かくして作られた觀察を倍加し、それ等に最も精巧な統計法を適用すればする程早く、心理學の黄金時代が到來するであらうことを彼等は堅く信じて居た。その信者たちはまだこゝ彼處にさまよつてゐるが、此の如くにして興された希望は無慘に裏切られて了つた。何故にそのやうな幻滅が生じたかと云ふに、それは新方法の擁護者たちは個人心理を細緻に質的に研究したり、病氣と云ふ變つた條件のために個人心理がどうなるかを比較研究して得る知識が必要だとの事實を忘れてゐたからである。實驗的方法が適用され得るのは心的活動としても極めて限られた場合だけで、さう云ふ極限された場合から得られる統計的材料を利用する前に是非とも吾々は右に述べて來た如き知識が必要であつたのだ。

社會心理學者も同じ危險に陷りさうだから、それを避けることが非常に必要である。彼は社會的又は政治的行動を細緻に直接的に研究してからでなければ、社會及政治的統計の心理學的解釋から多くを學ぶことは許されないといふことを認めるのが是非とも必要である。（中略）

私は政治研究にはまだ初心者であるから、細々した問題に心理學を實際に適用することは私の任でない。私は社會心理學の根本問題に觸れる方がも少し適任であらうと思つてゐる。（完）

ある悖徳者の分析觀察

則近保良

私はこゝにある一人の、一般的にみてかなりに特異な悖徳的な性格を有つな男の生活記錄の中から、特に異常と考られる二三の行爲を抽出し、これを一の實例報告として諸君と倶に研究してみたいと考へる。が、私は二の理由から、分析的

穿鑿を充分に行屆かせることが出來ないかも知れない。理由の一は私が斯學に未熟だと云ふことであり、他の一は、此の男が私にとつては、幼時からの親しい友人ではあるが、今は既に亡き人であるがためである。然し兎も角も私は誠實に出來る限りやつてみる。軈てこの男の三回忌も來やうとしてゐる。而して彼と最も親しかつた私が、彼への追憶を新にし、一の實例としてこれを綴つたにしても、生前の彼の深い友情を憶へば、決して彼はこの故に私を咎めはしないであらう。

(一) 兩親と家庭

便宜上此處では彼を假りにAと呼ばう。然し本論に入る前に、先づAの兩親の極く簡單な素描と、A自身の變化に富んだ經歷の概略を記しておく必要がある。

Aの父は非常な大酒家で、酒とその職業と以外にはなんら趣味を有たなかつた。孰れかと云へば躁鬱性の型(タイプ)に屬する肥つた人であつた。彼は郵船會社に奉職する高級船員で、職業柄海外にあることの方が多く、年に三月と家庭に居ることは稀であつた。母は父と同樣な肉體を有つてゐたが、強度なヒステリー患者で、始終顏面神經痛に惱んでゐた。一見男と思はれる程毛深い性で、言語動作、倶に粗暴であつた。彼女は勝負事を大變好み、殊に花牌を弄んでは時の觀念を全く無くする有樣であつた。後年になつても、手持ち無沙汰なときなど毎時も札を切る手眞似をしてゐた。Aと親しく往來してゐた私は屢々それを目擊した。その手振りまで、今に明確に記憶してゐる。

女中の二人も置いて家庭は相當豐であつた。Aは此の夫婦の一人子であつた。が、父は殆んど家にゐないし、從つて彼は母一人のお人形であつた。七歲の折父に死別したAは、其の後彼が中學を放校されるに至る迄の八年間を、全くこの母の手一つで哺育された。放校の原因は早熟なAが餘りに文學に耽溺し、現實と空想との區別を失ひ、女學生に附文したのがその理由なのである。家を飛び出した直後の一年間を、Aが什麼に生活したか私は知らない。それを私は遂にAから訊き出すことが出來なかつたのである。が、その後の拾六歲から拾八歲に及ぶ間Aはスリであつた。此の年若い、マーキュリーの信奉者は、婦人、それも妙齡の婦人ばかりを相手に、彼の所謂商賣を營んでゐた。まる三年、彼は此の穢れた空氣の中にゐた。拾九の年の春になつて、始めて飜然畫家を志し、それ迄の闇の生活から足を洗つた。再び彼は母の許に歸つた。而して遂に行詰つて自殺するに至つたまでの數年間を、その母と、外見は比較的靜穩にみえる暮しを續けてゐたのである。

私が此の一文を綴るに當つて、豫め諸君の念頭に置いて頂き度かつた豫備的な記述はこれで終つた。私は早速本文に入るであらう。だが、これは何處迄も單なる實例報告として、諸君と倶に研究してみたいと冀ふ意味をもつて書かれたものであると云ふことを、呉々もお忘れなき樣に願ひ度い。

（二）　飛行機恐怖の原因

Ａには自殺をする二年ほど前、昭和四年の夏の始頃から、奇妙な習慣が生じた。それは飛行機を極度に恐れだしたのである。遠雷の響をもつて大空の彼方に一點機影が現はれると、今まで元氣に道を歩いてゐたＡは、急に蒼白になつて軒下に身を竦めて仕舞ふのだ。彼は如何にも恐ろしさうに脅えた眼差を以てそれを見詰め、全身汗まみれになつてゐる。此の時若しも連れの友達が惡戯ら心で、無理にＡを道の眞中に引張り出さうとでもすれば彼は忽ち腦貧血を勃して卒倒するのである。たゞ飛行機だけが不可ないので、他のエンヂンの音と飛行機のそれとを、Ａは實に敏感を以て區別することが出來た。Ａは幾分耻づかしさうにして、自分の奇妙な癖に就ての辯解を、常にかう表現してゐた。

「あの廣い大空に、ポツンと點のやうに小さく浮いてゐるのをみると、なにか迚も賴りなく、不安でならないんだ。」

此處には確に墜落願望が含まれてゐる。と同時にまた吾々は、抑壓されたる去勢恐怖をも認めざるを得ないであらう。精神分析の說くところによれば、一般に抑壓されたものは記憶として意識への復活の働きを停止されるが、なほその作用力は保存されてゐて、他日外から何かの影響が働きかけると、忘却されてゐるものが轉化的な形で回想されたり、その影響が誘導體となつて抑壓されてゐるものを意識面に招致するのである。Ａに此の飛行機恐怖の習慣の生じたのが手淫の惡習に惱み始めた直後からであることを思ふとき、抑壓過程に就いて右に述べたことの正しさを認めることが出來るであらう。

夢に於て飛ぶことは多くは性行動を意味してゐる。フロイドはその入門書の中に於て『重力に反して立ち得るペニスの驚くべき特性としての勃起の現象は、實に屢々飛行機の夢に據つて表現されてゐる』と述べてゐる。

Ａの恐怖の或る部分は飛行機に象徴された彼自身の性器の小さいことに基く不安に出發してゐるのではないだらうか。もしさうとすれば、大空をもつて表された肥つた父親との比較に於て、より良く理解出來るやうになる。大空は常に父を象徴するものであるが、Ａの此の恐怖の

中には特に父親の逞ましい體力がはつきり表出されてゐることを、私は見逃すことが出來ないと考へる。何故ならAは思ひ出の中で父を語る場合、稀にしか家にゐない父親に抱き寢をして貰つた樂しい幼時の印象を、次の言葉を以て非常に嬉し氣に、繰返し語ることを忘れなかつたからである。

「僕の親父の肌は眞白で、本當に船乘りに似合ず眞白で、子供心に綺麗だと思つた印象を忘れないね。親父にその滑つこい廣い胸壁をもつて抱かれると、僕は空に浮いてゐるやうな快感を感じたものだ。――親父の胸壁は、五月の穹窿の感じだつたよ。」

Aは穹窿と云ふ語を强調して、畫家らしくその印象を說明するのであつた。此處に於て今や吾々は、幼時父親の胸に抱かれた經驗が形を變へて巧みに再現され、Aの恐怖が對比的な關係に據つて强調されてゐることに氣付くであらう。

Aがスリの群れにあつたとき自瀆の性癖に染まなかつたのは、他人の懷中物をスルことに願望の滿足がなされてゐたからで(此の點に就ては後に述べる)、彼が正道に戻つてから始めてこれを覺えたのは、願望の抑壓に對する一の補償作用とみていゝ。而して飛行機を眺めることに據つて惹起された恐怖はその結果にくる後悔を意味してをり、飛行機をみることを嫌つたのは、杞憂を起させない爲に自我が自身に課した制限即ち禁制現象であると私は考へる。換言すれば、精神的陰萎症 Psychische Impotenz としての自己を認めまいとする努力の表れなのである。

然し私は此處で一つの假說を與へてみたい。それは他でもなく大空の象徵的意義であるが、父と云ふ基本的な象徵以外に、ある場合には物體を抱擁する球體と云ふ意味に於て、子宮をも象徵することがあるのではなからうか。私はそれを唯今、例を擧げて考證することは出來ないが、若しこの說が首肯されるとすれば、Aの恐怖中には、分裂の結果からくる苦悶がかなり作用してゐるのではないかと思ふ。自我と本能の相剋は互讓(コムプロミス)となつて、徵候としての象徵的行爲の中で解消せられるのであるが、恰もこの最初に於ける權力爭ひのやうに、Aの中にある男性的要素と、後に說く女性的要素との二つが、各々獨立してその權利を主張し合つてゐると云ふやうなことが、實際起り得はしないであらうか。此の分裂した財產の相續爭ひが飛行機恐怖としての徵候となつて現れ、墜落願望と去勢恐怖との凝縮された鬪爭として、Aの苦悶を惹き起してゐるのではないだらうか。然しこれに就ては私には既にこれ以上深く研究する機會がないので、

後日また別の實例に就いて充分に調査を徹底させるより外はない。今はたゞどこ迄も假説として述べておく。

（三） 同性愛的傾向と異性愛的傾向との混合

Ａはまた彼の父親の中に、母を多分に感じてゐたもゝやうである。このことは後年に於ける彼の嗜好の中に纖かな彩りを添へもした。「歌舞伎の女形の動作をみてゐると、それが本統は男だと思ふために一層女らしくみえて、僕は却つて變に昂奮を感じるね。」Ａはこれを彼の發見した警句として、少し得意にさへなつて云ひ云ひした。女形が一層女らしくあると云ふことは度々他の人々に依つても主張されてはゐるが、Ａの言葉にはそれらの影響はない、寧ろ彼自身の幼兒的經驗に緒口をもつてゐる感じを見出すことが出來る。それと倶に此の言葉は彼がまた同性愛者――尠くとも完全同性愛者ではなかつたことをも示してゐると私は思ふ。彼は明かに女性的要素に據つて刺戟され、昂奮を感じてゐるのであるからだ。Ａはその過去に放縱な生活をしたことがあつたにも拘らず普通に云ふ意味ではその童貞を失つてゐなかつた。而して遂に童貞の儘で死んだのであるが、彼の女性嫌厭を表面的に解釋しやうとすれば、その據り處を極端な禁壓と彼自身の絕えざる去勢恐怖とに求めねばなるまい。然しながら、若しも今一歩深い分析的な解釋を望まれるなら、吾々は彼の幼兒期にまで遡らなくてはならない。その場合には、强迫神經症者に屢々みうけるやうに、彼の女性嫌厭が、婦人に對する愛着と彼の父に抱いてゐる憎惡との結びついてゐる一對の感情の闘爭にまで行き亘つて、說明を要することになるかも知れない。だが唯今其處まで進んで行くには、私の用意する材料では不十分である。それ故に私は殘念ながら此の點に就てはこれだけの記述に止めるしかない。而してＡの、內面に於ける眞の彼自身は、實は熱心に女性を求めてゐたのであるが、この慾求の行動への移行が、種々な原因に據る外的內的の障碍のために禁制されて、その結果女性嫌厭と云ふ狀態となつて彼の表面に出てきたのである――との私自身の解釋を附加するだけで、私は先を急がねばならない。なほまた私が以上に於て觸れた、一對の相反する衝動の共存的な働き（精神分析ではこれを、相反並存性感情 Ambivalenz と呼んでゐる）に就て、その特質をもつと詳しくお知りになりたい方は、フロイドの『性說に關する三論文』を御覽願ひ度い。

私はＡが完全同性愛者ではなかつたと云つた。然し、だからと云つて私は、實際Ａが同性愛者的傾向を有つて

ゐなかつたと云ふのではない。現にAは彼の幼時、父に對して彼自身を女とすることに據つて、卽ち自分を母と同一化することに據つて、父の愛情を母と爭ふが如き心持になつたことは疑ふまでもないやうである。このことは然し、それのみが特に著しく現れるのでない限り、別に心配すべきものではなく、また特異な例でもないのである。幼時に於ける性的倒錯は寧ろ普通である。フロイドは、子供が多少でも性慾を有つてゐるとすれば、それは倒錯的なものでなければならぬと云ふ。その理由は性慾の發達がまだ部分的である上に、性慾を生殖作用ならしめる生理的完成が缺除してゐるからだ、と。たゞ不可ないのは、此のAの場合の如きに於て、父と云ふ對象にのみリビドーが纏綿されて、成長するに及んでもそれが昇華（スブリミーレン）されない時や他方面の發達のないときである。そのとき若しも對象たる父が死亡する如きことが起ると、對象を失つたリビドーは必然的に自己內へ引上げられ、過去へと退行し、その結果定着が生ずるからである。話が些か岐路に入つたが、Aは彼の思ひ出の中で、幼時その父から愛情をもつて「お孃さん」と呼ばれてゐたと語つてゐる。また彼は幼年時代に於て赤い塗下駄(明かに女の物であるところの)を、就中、木履（ボックリ）を非常に好み、殊に晴着を纏つた場合それを切望したさうである。此の好みはAが四歲（大正元年）當時から小學校へ通ふやうになつたずつと後（大正七年前後）まで續いたと、これはAの母から私が直接聽いた話である。Aの母はこの話の後で、次のやうな重要な記憶を物語つた。卽ちAは「父が家にゐる間は特に赤い塗下駄ばかりはいて、男物の下駄を毛蟲のやうに忌み嫌つた。」と。

なほまたAの、その母への同一化に就て、根據のある他の例をも私は擧げることが出來る。

Aは後年、なにかに癇癪を勃したり不滿に焦々し始めると、激しく顏面の神經を痙攣させるのであつた。私はAと倶に幾度か古本漁りをしてゐたとき、思つた本がみつからぬので焦々し、まるで肉體を引き撈られでもしてゐるかのやうに、恐ろしい相貌で唇を引き吊らしたAを何回となく目擊した。而してAの病的な痙攣は確に、始終顏面神經痛に惱んでゐる母への同一化（肉體的遺傳と云ふことも或はあるかも知れないが）に違ひなかつた。

尙私は前述したAの飛行機に對する恐怖の中に、近親相姦的願望（エディポス・コムプレクス）に基く贖罪願望をも見出してゐるのであるが、此の點に就ては未だ深い分析を試みてをらぬので、此處ではそのことには觸れないでおく。

(四)窃盗の性的契機

Ａと私との間に交際が復活したのは、云ふまでもなくＡが家に戻つてから(昭和二年四月頃?)であつた。私達は以前よりも親密になつた。Ａはその頃よく私に、スリをしてゐた頃の話を、多分に自己輕蔑を混へた、澁い表情で語つたものである。

「僕が家を飛出して納豆賣をしてゐたときなんだが、ある日、公園で餘り人相のよくない男と喧嘩した後で、今度は其奴と仲良しになつたんだがね。それが矢張僕と同年配で、僕がスリを覺えたのは、專ら其奴の指導に據るんだ。而してスリは、最初は若い婦人の懷中物を狙ふことから始めてゆくがいゝと其奴は云つたが、これは後になつて僕にも首肯けたよ。若い女は、假令スラレたことが解つてゐたつて、羞かしいから、滅多に人混みの中で大聲を立てないからね。――たゞ難かしいのは、相手を選ぶことにあるんだよ。」

Ａは遠くをみるやうな寂しい眼いろをして、其麼具合に語り出すのだ。

始めて婦人の胸から懷中物を奪つたとき、Ａは强い滿足と、犇々と胸にくる寂しさを感じたさうである。而して此のアムビヴレントな感情は、其の後彼がスリを働く度毎に味つたものださうであるが、然しこの氣分が薄れかけると、まるで驅りたてられるやうな熱望をもつて獲物に向つて行つたのだとＡは告白した。

スリを斷えず繰返して、既にそれに熟練した後に於ても、なほ、Ａが、若い婦人のみを對象に選んでゐた事實を併せ考ふるとき、吾々は其處に物慾とは離れて、性的密境へのＡ自身の强度な探索心を嗅ぎ當ることが出來はしまいか。金が欲しいよりもたゞ女の胸から拔き取るだけの興味だつたと白狀するＡの言葉に、恰も受胎願望に捉はれたヒステリー患者が、絶えず象徵的な受胎行爲を繰返す事實を、私は聯想せずにはゐられない。實際Ａの此の幾度となく反覆された行爲には、神經症候に多く類似するものが含まれてゐることを、私は看過出來ないと考へる。Ａが殆んど性的衝動に支配されてゐる如き氣分に捉はれてスリをした行爲の中には、確に象徵的な願望充足があつたと推察しても、これは決して不當なコヂケではないのである。神經症的徵候は、屢々性的願望の代償的な充足であると云ふ命題を、吾々は忘れては不可ない。而して吾々は、その願望の根源を指摘すべき筈の現實の不滿と、過去に抑壓せられた願望とを探り出すことが肝腎である。一切の神經症は、此の方面の開拓者に依つて

說き明されてゐるやうに、抑壓された感情を自己からもぎ奪らうと努めて失敗した處に發するものである。

私は先づ一の事實から考究してゆかう。

Aはスリをしたくなつたとき、その咬られた氣分を無理に抑制すると、激しい胃痙攣に襲はれるのが常だつたと云つてゐた。私がAと再び交際しあふやうになつてから、胃痙攣に罹つたAをみた記憶はない。然し私に嘘を吐くAではないし、これが本統であるとすれば、私の興味は大變に唆られる。

夫に愛を求めて拒絶された若妻が、翌日胃が痛むと云つて床についたと云ふ話を、先輩から私は聞いた。またその場合大低の妻は、非常に飲物を、殊に牛乳を求めるさうである。これは多く、象徴的な願望を症狀として現はしたものであるがAの胃痙攣もこれと同じ、或は類似した作用に因るのではないだらうか。私一個の考へとすれば、Aは婦人の懷中物をスルことに一の性的滿足を見出してゐた。而してAの幼兒期に於ける母との同一化(胃痙攣と顏面筋肉の痙攣と、此の對照は頗る妙ではないか)は此處にもその影響を及して、Aの行爲は、最も大切なものを奪ふこと、卽ちペニスを自分に取らうと無意識に欲求してゐたのだと思ふ。これは後年の飛行機恐怖の中に面貌をみせてゐた去勢コムプレクスとも關聯してゐると考へられるが、このことは別としても、Aのこれを抑壓した場合胃痙攣を勃すことは、ペニスを求めて得られない場合胃病になつて床につく若妻のヒステリー症狀と、同一の機制に據るのではないかと思考されるのである。然しながらこれは私個人の考へなので、從つて此の解釋は一つの假定としておくことゝする。だが性的滿足の抑壓が身體の他の機能に影響して、肉體的症狀となることの機制に就いては、その入門書中に說明してゐるフロイドの次の言葉が理解のヒントを與へはせぬかと思はれるので、私は此處にその一節を拔粹することにした。

「ヒステリー患者はその症候をあらゆる有機的組織の上に現はし、それによつてあらゆる機能に障碍を與へることが出來る。分析の示すところによると、倒錯的と呼ばれ、生殖器を他の器官で代用しやうとするところのあらゆる衝動はこれらの症候に現はれ出る。(中略)ヒステリー的症候に於ける、一見性慾とは何の關係もない器官の無數の感覺や神經作用は、從つてその本質に於ては倒錯的性的衝動の滿足であり、それによつて他の器官が生殖器の機能を奪つたのである事が解る。かうして吾々はまた營養器官と分泌器官とが如何に色々な風に性的衝動に關聯し得るかを知るのである。」(中村古峽氏譯、二三八――二三九頁)

次に私は、Aがスリをした晩には必ず同じ夢をみた、

と云ふ事實を擧げておかう。その夢と云ふのは、次のやうである。

Ａは何處だか分らない山の小徑を、手に鞭をもつてせつせと登つてゐつた。するとその行手に當つて、表面の滑めらかな眞白い岩が、その巨軀で道を遮つてゐるのに彼は打つかるのだ。Ａはその前で當惑した。それを越してゆかうにも、岩の上面はすべすべして全く據り處がないのだ。彼が困り入つて岩の前で間誤々々してゐると、白い岩肌へ鮮かな墨字で澤山な文字が獨りでに書かれてゆくのだ。Ａはそれをみると、「あつ、不可ねえ、山櫻がみてやがら。」と叫んで、どんどんもと來た道を逃げ戻つてくる。――夢の筋はこれだけで、毎時も變化はないさうである。私は話を聽いた後で、その岩面の文字は什麽意味のことを述べてゐるのかと質問したが、「それを話すのは厭だ。」と常にＡは不機嫌に拒絶した。これが彼の口から明かにされてゐたなら、私はもつと重大な事柄を此の夢から抽出すことが出來たと思ふ。それをＡが自分だけの胸奧に藏して永久に葬り去つたことは甚だ殘念である。が、私はそれでもこの夢から、二三の重要な種子を拾ふことが出來た。

小徑が女性の内臓器官を屢々意味することは、諸君も既に御存知の筈である。而して彼が此の道を、鞭を手にして登つてゐたことは確に性交を意味してゐる。これは甚だ明瞭な象徴行爲である。鞭がペニスの象徴であることは勿論である。岩が特に白く滑らかであつた一事は幼時の印象に基くもので、これは父の胸壁を意味してをるとみていゝ。然し岩はまた父であると同時に、中學校の教師でもあるのだ。岩面に墨字の書かれたことは學生時代の印象に關係がある。特に「山櫻がみてやがら。」と恐怖したＡの叫びがこれを裏書してゐる。蓋し山櫻とはＡが中學時代女學生に附文をしたとき、最も强硬に彼の退校を迫つた監督教師の異名なのである。（山櫻とは、花―鼻―より葉―齒―が出る、卽ち出ッ齒の意）。而もＡの父の名が岩三(註)と云ふのであつたことを知れば、私の此の解釋が決して牽强附會ではないことを了解して頂けると思ふ。それに鞭も亦學校を暗示する一の屬性となつてゐる。夢はその獨特なるメカニズムを以て、父と教師とを一個の岩に凝縮せしめてゐたのである。

註　私はＡの父の名を岩三と書いたが、本統は假名なのである。本名を記すことは、周圍があるので私には許されてゐない。然し本名も殆んどこれと同じであるからこの場合の分析解釋には何等の支障がない。

なほまたより深く觀察を進めるならば、吾々は父を表すことに依つて同時にＡの母も再現されてゐることに氣

付くかも知れぬ。母は當時のAにとつては、常に父の代理者であつたからである。而して岩が道を堰てゐる意味は、父と教師の監視を誇張的に示してゐるものであると私は解してゐる。

これだけのことを理解して、吾々は再び前に戻らう。Aがスリを、性的行爲の禁壓に據る補償としての象徴的性的行爲として繰返してゐたことの中には、周圍の監視の眼を逃れて目的を遂行すること、卽ち父(教師も同樣父に還元される)の復讐が、執拗に表示されてゐる。(註)が、夢そのものは目的が果されない。竟り其麽ことはしなかつたと云ふ辯償だつたのである。從つてある點これは懲罰の夢に加へらるべきで、願望の充足は、心的生活中の倫理的局所のそれであるかも知れぬ。だがそれはともあれ、此の行爲と夢との關係は、ヒステリー徴候にみる滿足要求と懲罰要求との互讓(コムプロミス)に等しい。

註　その表面的な意味、卽ちテキストとなるものは、勿論性的慾望の象徴的滿足にあるのである。

アルバート・モーデル Albert Mordell はその名著„The Erotic Motive in Literature“の中で斯く云つてゐる。

「一の動機が往々にして、ときにはまた一の調子が繼續して作家の文中に現はれ纒綿してゐる場合には、それに關する理由が彼の個人的生活中に存在するものである。」

右の言葉は然し、また次のやうに言ひ換へることも可能である。

卽ち、同樣のことは個人の一生を通じて、異常な熱望をもつて、若くは屢々繰返されるときには、その基因を彼の幼兒的經驗の中に求めることが出來る――と。

Aは拾歳(大正七年)のとき、偶然何氣なく開いた母の小筥中に春畫を發見したさうである。此の經驗は、その後彼の好奇心を簞笥とか押入とかへ强く惹きつけた。家人が留守になればその中を掻き廻して、なにか其處に祕密を見出さうと懸命になつた。彼が母の小遣を盜み出して買喰ひすることを覺えたのも此の直後である。而してこのことゝ、彼がスリを働くことに異常な滿足を感じたことゝの間には、深い一聯の繫がりのあることを諸君は推察されるであらう。Aの男根(ファルス)にむけられた異常な興味に就ては、私は前に鳥渡觸れておいたが、それをもつと良く解き明す鍵となるかも知れない、Aの他の記憶をも私は知つてゐる。

「子供のときには、詰らぬことが迚も興味を惹くものだね。僕はずつと幼いとき、親父と始めて一緒に風呂に入つて親父の〇〇の大いのを偶然發見して、全く吃驚したね。なにしろそれまで僕は母とばかり風呂に入つてゐた

んだから知らなかつたのだが。それからと云ふものは非常にそれが氣になり出してね、それのない母親が偉らくないものに思へてきたんだ。子供つて實際妙なことを考へるものだよ。」と、Ａは私に打明て笑つたことがあるのだ。吾々は此處でまた分析を一歩進めることが許されゐやうである。

Ａの女性的要素（母との同一化）が、成人のファルスをみて抱いた興味と結びつき、それが強い羨望に變つて行つた經過については理解出來る。而してそれが軈て、性器統裁期に入るに及んで種々な外的影響から、Ａの内部に眠つてゐた偷視慾（偷視本能）Scoptophilia を刺戟するに至つたのではないだらうか。

男性的要素が專らスリをするに婦人を求めながら、右に述べた心的特質が彼の反面に潛んだ女性的要素と結合して、スリの行爲の中にペニス獲得の象徴的滿足を見出さしむるに至つたのではなからうか。彼の嗜好物が羊羹であり豆平糖であつたことも、此のペニス獲得の欲求に對し一脈の聯鎖を求めて不當ではないと考へる。然しこれは私の獨斷であるから、或は誤つてゐるかも知れぬ。

以上私は、Ａの特異な二三の行爲に就て、それぞれに分析解釋を加へてきた。此の上は個々の分析の結果に聯絡を與へて、もつと正確に、これを總括して結論するのが本統であるかも知れない。だが私は殊更、それをすることを差し控へ度いと思ふ。而してその結論を私は諸君におまかせする。

たゞ私が諸君にお詫せねばならぬことは、此の分析が甚だ概念的な記述に終つたことに就てゞある。これは私自身にとつても甚だ遺憾なのであるが、Ａが私の友達であつたといふこと、既に故人となつてゐて、只今の私の分析眼を以て觀察診斷出來ないこと、周圍の思惑に拘泥しなければならなかつたことなどのためである。

而して最後に、此のメルポミニの女神に憑かれてゐた哀れな男は、遂にピストルに據つて自殺を決行したと云ふ事實を附言することで、私は此の稿を終へる。だが、若し此壓想傷が私に許されるとしたならば、Ａは、自殺にピストルを使用しなかつたら、多分、高所から墜落して死ぬ方法を選んだことであらう。彼の飛行機恐怖に現れてゐる墜落願望がそれを證明してゐる。（完）

――一九三三―八―二五――

附言――大空が父であると共に、母でもあると云ふ事は、それが凹形に見えるためばかりでなく、一切の轉嫁對象が兩親的（兩性的）に過度決定されるためでもあらう。

『棄て鉢』の心理

長崎文治

『棄て鉢』が、墮落とか犯罪の動機に、何れ程の力を持つかといふ事を、精神分析學的見地から、簡單に考察してみたい。

一體『棄て鉢』といふ言葉自體が、精神分析學から見ると一種の興味がある。卽ち『鉢』は女性器の象徴となることが屢々である。私は前に（本誌第二號）排泄物心醉に就いて考察した時、神殿に供へる聖水は、その原の形は尿であると云つたが、この聖水を盛る器が、多くの國では女性器を象どつてあることを、幾多の考證から知る事を得た。そして聖水が女性の尿であると云ふ事に就いて、女性の尿が多くの巫術的要素を持つといふ事と連關して考察するのも興味ある事と思ふが、玆では省略する。偖て、鉢は女性器の象徴であると云つたが、更に又それは、母胎の象徴でもある。女性器と、母胎とは屢々同じ象徴を以てあらはれる。そこで、玆に於て『棄て鉢』とは、母體（胎）を放棄する事であると解釋される。抑々母體放棄は、人生の過程に於て、正しく三回行はれる。第一回は出產、第二回は成年式（又は結婚式）、第三回目は死である。誕生と冠婚と葬祭は人生に於ける三大儀禮として嚴肅に取行はれるのは、蓋し母體を放棄する重要なる契機だからであらう。母體放棄の第一步が誤まると、生涯の行程が歪曲させられるのであるから、この儀式は非常に重大な意義を有するものである。

第一の母體放棄である出產は、胎內時代の全能感が、現實感に代る時で、今迄母體內の附屬的位置に依つて、凡て有機的に母體との連關を保つてゐた胎兒が、母體との紐帯を絕つて胎外に出る事に依つて、獨立性を持つた生活體として世の雰圍氣に觸れ始めるのである。こゝでは『生活體』としての第一步が始まるのである。これから一定年齡迄は、兎に角、家庭の中に擁護されて發育期を過すのである。この時代は、雛鳥が親鳥に伴はれて食餌とか步行の練習をしてゐる樣な、極めて安易な人生の搖籃期である。云はゞ胎內期の延長ではあるが、併し搖籃期と云つても、胎內時代の絕對的全能感は望まれない。現實としての環境の影響は、誰彼の差別なく、これを受けなければならないものであるし、これに依つて自我の發生は促される。此の時代はそれ故、又自我の發達時代

であり、現實への練習時代であり、更に、社會に對する準備時代でもある。

第二の母體放棄である、成年式（又は結婚式）は、今迄親の擁護下に、社會生活への準備期を過して來た子供が、一定年齢に達すると共に、家庭の手から社會の手に移される契機を意味する。こゝでは、一定年齢に達した事によつて、獨立生活を爲し得る能力が出來上つたと認められ、人格を與へられた代りに、社會的の義務を要求される。そして更に、結婚によつて、母から妻へと感情の轉移を强ひられる。今迄の母は、保護者、養育者としての母であつたが、この時期になると最早、保護も、養育も受ける必要がない、こゝに母體の放棄が爲され、次に、助成者としての妻が代つて來る。そして生活々動の上に於ては異なるが、感情生活の上からしては、妻が第二の母性となるのである。男性が、その配偶者を求める場合に、その母と最も近似した者を、無意識的に選擇することは何人にも肯定される。エディポス的立場に於て母を獨占して競爭者である父を斥けやうとする無意識的の感情は、自己の父性化と見られる。母の獨占は或る意味で父との同一化を意味する。併し今迄はそれは單なる觀念上のものに過ぎなかつた。成年期となり、配偶者を得る事に依つて妻を母性化し、自己の男性化と共に、嘗て願望してゐた位置を現實に併し代償的に、かち得たのである。

第三の母體放棄である葬祭は、現實の母體、即ち母や妻、良いては現在的なる母體を去つて、原始的母胎（大地）に還元する、最後の別宴である。

人間の生涯は斯くして、母から母への轉移である。即ち、胎内から、搖籃（家庭）に移された幼兒時代、母から、妻（母代償）の手に渡される青年時代、最後に妻から「母なる大地」へ還る終末期で、大地の母懷に還つた人間は、永遠の搖籃として、彼の世の思想が出て來、更にそれから再び母胎内時代に入る。彼の世から母胎内迄の時代を、吾々は觀念の上で胎内時代と呼ぶ。それ故に死の願望は、換言すれば胎内願望であるといふ事になる。以上の論から結論して茲で吾々は、逆説的な次の如き假定を立て得るのである。卽ち『母體放棄は、母體追求である』と。

それ故、三大儀式に於ける母體放棄は、單なる放棄でなくして、積極的であり自然的である。然るに『棄て鉢』に於ける母體放棄は、消極的であり異例的であり、從つて不自然的なものである。そこには、母體より母體への轉移が見られない。云ひ換えれば『棄て鉢』は追求の無い放棄である。追求の無い所には、希望も無く、目的も

ない。從つて安心、滿足の感情は得られない。子供の弄んでゐる刄物を、危ないからと云つて單に嚴格に、これを放棄する事を命令しても、子供は容易に應じやうとはしない。無理にこれを捨てさせやうとすれば、失望と憤怒は、無穢な童心を蝕んで、竟には狹く歪められた性格を作つて了ふ。それ故、心ある母親は、この危險極まる刄物に代る、有用な、兒童の注意を一層惹く物を與へて刄物を自發的に捨てさせる樣な方法を採る。子供は、斯くする事に依つて、心を亂されることなしに、移轉を全ふする事が出來る。これと同樣に『母の放棄』は、母代償の追求に依つてのみ可能である。蓋し、母は愛そのものである。人間の嚴肅さの權化が父であり、その神格化が神であることが肯定されるならば、愛の權化は母でありその神格化がマリヤであり觀音である。而して、人間生活に於て、母の放棄は快感原則と現實原則の置換であり、母の追求は、現實原則の快感化であり理想化である。理想化なくしては、快感原則と現實原則との滿足なる置換もあり得ない。吾々は此の作用を『昇華』Sublimationと呼ぶ。かくして次から次へと別の鉢を持ち續けて行くのが人生の姿である。

『棄て鉢』は、追求の無い母體放棄であるから、現實の否定である。墮落や犯罪の『惡の華』はこゝに萠し、理想化されない快樂を追求する現實逃避主義である。

『棄て鉢』は個人の心理に於いて許りでなく、社會の集團心理にも、起る。現代の如き混沌としてゐる社會的狀勢に於て人々は理想化の指標を得難い爲めに墮落と犯罪は當然起るのである。英雄を待望し、大人物なきを喞つ識者が、既に、確固たる快感原則と現實原則との置換を行ひ得る技倆を有つて居らぬし、現實逃避と願望放棄に不徹底な妄動を繰返してゐる。指導原理は明かに快感原則を理想化するの契機であるが、現下の思想界は、これをも確立する事が出來ない。茲に於て、吾々は再び本然の自己に還つて、人間性の正しい認識と、意識作用の奧に潛む傾向の發見とを主張し、正しい人生の道筋を辿るべきを慫慂した。精神分析學は、この意味に於て凡そ現代の指導原理を供すべきものであり、その進歩は正しい社會の建設に資する唯一の力とならなければならない。

前號正誤

七頁三行	「衆言者」を「虚言者」に
十頁九行及び十一行	「記憶交錯」を「記憶妄錯」に
八〇頁下段十六行	「石原誠六」を「石原誠之」に
表紙四面十三行	……mit *der* der Säugetiere（一語補入）
同二十六行	A. Neile を A. S. Neill に

社會心理の分析的研究文獻

高水力太郎
伊東豊夫

（小序）——社會學（又は漠然と意味を廣めて社會思想、或はもつと特殊に限定してマルクシズム）から精神分析學を批評したもの、及び精神分析から社會思想を批評した文獻は相當の多數に上つてゐることゝ思ふが、只今我々の眼界に入り來つたものを拾ひ集めて次に紹介して見る。但し、この内ライヒW. Reich の『辨證法的唯物論と精神分析學』は今井末夫氏（一九三二年？　ロゴス書院）と植田正雄氏（一九三二年、京都共生閣）との二種の譯が出てゐる。植田氏譯には、なほザピールI. Sapir『フロイド主義、社會學、心理學』が添へられてゐる。恐らくこの二篇の論文はこの方面の邦譯文獻中唯二つのものであらうと信ずる。ライヒはドイツの分析學會員であるから、勿論精神分析學に同情を持つてゐる。只今、我々はまだ日本に紹介されないものだけを次に擧げて見よう。

一、『分析的社會心理學の方法及び問題』

Erich Fromm: Über Methode und Aufgabe einer analytischen Sozialpsychologie. (Ztschr. f. Sozialforschung I/1—2), 1932. C. L. Hirschfeld, Leipzig.

精神分析學と社會科學との關係に就いては、既に多くの事が論ぜられた。精神分析學を社會科學に應用したものゝ多くは、その方法を永く熟考した後になされなかつたので、根本的な問題に就いて、なほ多くの不明な點や矛盾した個所が見られる。それは、社會學上のさま〳〵な問題に一應深く潜入して見ることが必要であることを證するものであるかも知れない。

然るに、このフロムの近著『分析的社會心理學の方法及び問題』は非常に明白に論じてある。ベルリンのフェニヘル博士の批評をこゝに紹介しよう。この著書の論ずるところに依ると、如何に多くの體系的な科學的勞作がこの方面に必要であるか、殊に精神分析學と社會學との兩方に通じた人々の手に依る勞作が必要であるかゞ、まづ分るのである。併しこれまでの分析的社會心理學は、根本的な批評に堪え得るものは極めて少いと

云ふことが分るのである。かう云ふ有様では、他の方面の學者から精神分析學者たちがあまり重視せられなくなつても已むを得ない次第となる。で、願はくは、フロムの著の如きが契機となつて世間の誤解を解き、精神分析の方法論的に行届いた適用が如何なるものであつて、從來の不十分なものとは如何に違ふかを明かに示して貰ひたいものである。

分析を唯物論的に證明し（これは原始本能的な生活慾求に對する環境の影響から精神的現象を説明するものだ）、またこの證明を歷史的に跡付けて考究（この考究は生活の變遷から本能の構成を理解しようとする）して行くならば、要するに社會學（この學問は精神分析とは多くの點で觸れ合ふが、また他の多くの點では、フロムの云ふやうに撞着し合ふ）とは史的唯物論であると云ふことになる。『一致點は、既に他の著者等に依つて指摘されてゐる如く、精神分析は史的唯物論と同じく、顯現的事象を假面と見做し、その蔭に本來の力がひそんでゐるのだとするところにある。さうしてまたこの力とは、觀念にあらずして慾求にあるとするところにある。然るにこの慾求たるや――こゝに兩者の相違が存する――前者に於いては無意識であり、本能であるに對し、後者に於いては、社會の經濟的條件である。

『そこで必然的に起つて來る問題は、これ等二つの命題が互に撞着するか、もし撞着しないとすれば、如何にして兩者が提挈するか。第三に、精神分析的方法は史的唯物論のために役に立つか、立つとすれば何故であるか・・など云ふ事柄である。』

フロムがこの書中に於いて論究してゐるのは以上の三問題に就いてゞあるが、それは、ライヒ（W. Reich）が類似の問題のために捧げてゐる著書（本論の「小序」を參照）と大體に於いて（細々した點では違つてはゐるが）喜ばしくも一致してゐる。

『集團心理』とは――フロイドが『集團心理と自我の分析』の中で明かにしてゐるやうに――『一つの集團に屬する各個人に共通する心的態度』である。精神分析に於いては、個々人の心的現象はその人の生活史から説明せられる、それと同様に、分析的社會心理學に於いては或る集團の心理現象はその集團の生活史から説明せられるのが當然である。

『併しこの生活史は、その集團が大きければ大きいほど愈々、偶然的なものや個人的なものには存せず、この集團の社會經濟的事情と合一する。で、分析的社會心理學とは、或る集團の本能構成、卽ちリビドー的（大部分は無意識的）態度を、その集團の社會經濟的構造から理解

せんとすることである。』

個々人に對して非常に重要なる早期幼兒時代の生活史は、また同時に社會的にも條件づけられてゐる。何となればそれ等の生活史はまた環境（これは心理學的にのみ説明すべきでなく、社會學的にも説明すべきである）に依屬してゐるからである。フロイドが超自我を認識するやうになつて、始めて這般の説明がつくやうになつた。『社會又は階級が、それ相應の、それに特殊の構造として幼兒に、從つてまた成人に刻印を與へるのは、家族を通してゞある。幼兒にとつて社會とは、階級とは、自分の家族の事である。從つて、成人してからも自分の幼時の家庭を見た眼を以て社會を見、階級を見る。家族は社會の心理的原動體である。』ライヒも同樣な意味で家族を『觀念形態製造元』„Idologiefabrik“と呼んでゐる。

經濟的に條件づけられた外的現實は、生物學的に條件づけられた（併し或る方面では更に生物學的以上に出づる）本能の構成上に影響を及ぼして、兩者は一つとなつてゐる。如何にしてそれは起るか。それを探究するのが分析的社會心理學のなすことである。

『社會心理學的現象は、社會經濟的事情に對する、本能の能動的及び受動的適應の過程として解すべきである。本能それ自身は――或る根本的な點に於いては――生物學的なものであるが、併しその後、種々な變化を加へることの出來るものである。經濟的條件には本能に變化を與へる第一の要素としての役割が課せられてある。經濟事情が個人の心理に改變的影響を與へるのは、家族なるものを仲介としてゞある。社會心理學は社會的に普通な心理的態度並びに觀念形態を――殊にその無意識根源を――リビドーに對する經濟的條件の影響から説明しなければならない。』

から云ふ根本的な考へ方は、種々な誤つた（フロムの意見に依れば）考へ方と對比されるが故に、愈々重要となつて來るのである。例へば、これまでの多くの分析的社會心理學的な著書がそれである。（但しベルンフェルドの『シシフォス』とライヒの著とは例外とされてゐる。）これ等の著書は、家族と云ふ條件、並びに家族に結び付いてゐるエディポス・コムプレクスを見落してゐる。

『この點に於いてこれまでの精神分析的社會心理研究者たちは一つの先入見を持つてゐたのだ。他のブルジョア的な（進歩的ではあるが）研究者たちと共通の先入見を持つてゐた。即ちブルヂョア資本主義社會を絶對視し、この種の社會が『常態』の社會であり、そこに見られる心理狀態が凡そ社會なるものゝ一般的な、典型的な心理

狀態であると云ふ信念を先入見としてゐた。』

さう云ふ誤謬は、フロムの議論する通り、とかく從來の精神分析者の陥り易い誤りであつた。健康者と同じ社會に生れながらそれとは別の態度を以て社會に反應する神經症者を理解するためには、『階級的支配と階級的屈從とから成り立ち、合目的々な方法に依る利得に依つて組成されてゐる權威的社會に於いて生ずる心理的特徵』は、殆ど重要でないであらう。それには個々人の生活史のみが重要であらう。個人心理の場合はさうかも知れぬが、社會心理學的研究の場合には、それが丁度反對になることを、人々は看過してゐる。フロムが次のやうに云ふのは、全く正しい。『これ等の誤謬があるために、分析學は、社會學の眼から見れば、殊にマルクス主義的社會科學の眼から見れば、全然妥協的なものとなつてゐるのである。』

その上そこにまたマルクシズムに對する誤つた解釋がある。この誤つた解釋に依つて、史的唯物論の中に經濟學的心理學を見ようとする。卽ち、マルクスは、人間が射利心から行動すると說いたと見ようとする。（ラッセル、ド・マン、ベルンシュタイン、カウツキー。）そのやうな解釋は甚だ自由主義的な思想である。マルクスとエンゲルスとは唯、人間の慾求（必要）と云ふことが究極の動機であり、生產一般の基礎であると說いたのみであつて、決して『射利への本能』が唯一の慾求であると說いたわけではない。實は、さう云ふ射利本能と云ふ如き心理特徵は特に資本主義社會に於いて擡頭するので、分析的社會心理學は人間の（性的、殊はナルチスティッシュな）本能慾求に對する資本主義經濟の影響からこれを說明しなければならない。唯物史觀に於いては、『經濟的』（エコノミッシュ）と云ふ語は、主觀的心理的動機ではなくして、『人間の生活々動の客觀的條件』である。

『史的唯物論は史的過程を自然環境の諸條件に對する人間の能動的及び受動的適應の過程として解する。』

さうして本能を適應させることが正に社會心理の目的である。本能裝置それ自身の根本機構は生物學的であつて、これを社會學的に硏究せんとする場合には、たゞ社會的過程の『下部構造』に屬するものを供するのみであるが、社會學的硏究に於いてはこれをもやはり調べなければならないことは、丁度これ以外にも、生產の自然條件や土地の性質や氣候その他を調べなければならないのと同樣である。

この部分の下部構造は觀念形態の經濟的基礎に就いてのマルクス說にとつては殊の外重要である。觀念形態（イデオロギー）とは『人間頭腦內に轉換せられたる物質』であると云はれ

てゐる。下部構造の上に如何にして上部構造が築かれるかは、唯物的心理學なくしては把握することがない。『で、精神分析は、本能生活の途上に於いて經濟的事情が如何に觀念形態に變化するかを示すことが出來る。それに就いては、本能と環境との間のこの『新陳代謝』が人間を爾々のものとして變化せしめること、宛も人間の「勞働」が自然界を變化せしめるのと同樣だと云ふことを、特に强調しておかねばならない。』

併しながら精神分析はまた、一度擡頭した觀念形態が社會に及ぼす反響的感化力を別なものとして認識することが出來る。卽ち、精神分析に依つて『リビドー的共鳴板』の說明がつくのである。

『現實に於ける一見觀念的と思はれる動機も實は本能的な、リビドー的な慾求の尤らしく合理化せられた表現に外ならないことや、時々の我々を支配する慾求の內容と範圍は、觀念形態又はその背後にある慾求を生ずる集團の本能機構に及ぼす社會經濟的事情の影響から說明されると云ふこと』は、精神分析を俟つて初めて明かになるのである。

併し、觀念形態の發生と效力の及ぼし方とに就いて心理を尊重することは、史的唯物論に對しても一層多く役に立つことであらう。社會の結合を確保するものは（强權的規定もさることながら）、實はリビドーの力である。被壓階級は支配階級とは違ふ。被壓階級の子供は支配階級の家族の子供のやうには育てない。そのリビドーの結合に特殊な形式があるばかりでなく、本能を禁制し、弱める道德觀にも相違がある。敎育、懲罰の如き諸制度は時々の社會、又はその社會を支配してゐる階級に好都合な考へ方を作り出すのみならず、またそれは社會心理學の研究對象である。一つの社會がその客觀的な經濟的矛盾のために崩壞すると、それ等の諸制度並びに社會一般のリビドー的機構もまたそれに連れて崩壞することは勿論である。

フロムは自家の研究を要約して、次のやうに云つてゐる。――

『分析的社會心理學の方法は、古典的フロイド精神分析の方法であつて、つまり社會現象に向けられてゐる。卽ち、共通的な、社會的に重要な心的態度を、社會經濟的生活條件に對する本能の能働的又は受動的適應の過程から理解することである。

精神分析的社會心理學の果すべき問題はまづ、社會的に重要なるリビドーの働きを調べ出すことである。換言すれば、社會のリビドー的機構を闡明することである。更にまた社會心理學はこのリビドー機構の起源と社會的

過程に於けるそれの機能とを說明しなければならない。』

以上の紹介に依つて、本書が我々精神分析者にとつて（我々が社會現象を考究せんと欲する限りに於いて）根本的に重要であるかを明かにし得たと思ふ。フロムのやうに考へて行つたならば、誤ちは少なかつたであらうと思ふ。社會的に『中立』であるところの精神分析者としては、まだ疑問視されてゐる史的唯物論に加擔することは不可能であると云ふ考へを持つ向きがあるならば、乃ち人々は反問を出すことが出來る、では社會的立場を定めずして社會心理學的著書を編むことはどうして出來るのであるかと。『史的觀念論的社會心理學』はその方法と精神分析の結果とが丁度適合すると云ふ事をまづ證明しなければならない。宛もフロムがそれを史的唯物論のために爲したと同じやうに……。それはむづかしいであらうと思ふ。もしさう云ふ試みをなすとすれば、その批評は精神分析的なものでなく、社會學的なものとならざるを得ないと思ふ。併しこれ等の問題はみな非常に困難であることは勿論である。これまで社會學に敢へて精神分析を應用した文獻は稀でないが、それ等のよりも遙かに難問であることは勿論である。

二、『資本主義と性慾』 R. ET Y. ALLENDY : Capitalisme et Sexualité. — Verlag Denoël et Steele, Paris.

フランスの分析學者アレンディ博士 Dr. Allendy はラフォルグ博士 Dr. Laforgue との共著として『精神分析と神經質』、『夢と精神分析』、などを既に公にし、また『內的正義』、『宿命の問題』、『精神分析入門』などに依つて斯學を同國內に普及させてゐるが、最近には分析者の立場から性慾と資本主義との間の關係を觀察し、解釋してゐる。同書は、ラッセル說のやうに、所有本能と生產本能とが至るところで對立してゐると云ふ立前から論じてゐる。さうして資本主義を生む如き社會に於いてはこの葛藤は一層甚だしいと考へる。著者たちはまづかゝる葛藤に參與する幼兒的本能の役割を調べ、またこの本能が成人に於いて如何なる姿をとつて現れるかを考究してゐる。著者たちは相互に撞着する二つの力の生物學的發達を調べた後に、更にまた神經症者に就いての分析に依つてそこに働いてゐる何等かの機制を明かにした後に、男女相會の社會的諸形式を彼等は闡明してゐる。彼等は、動物界に於ける原始形式から現代文明人の形式に

至るまで、廣汎な基礎に立つて、結婚の意義を分析し、所有本能や社會本能や性本能が結婚に於いて如何に混合してゐるかを、また發達進歩に從つて如何に金錢を重視するやうになつてゐるかを明かにしてゐる。賣淫もまたまづその心理的原因から理解せられる。さうして資本主義(カピタリスムス)(この概念は最も廣義に用ゐられてゐる)*との關係に於いて理解せられる。本書の最後から二番目の章に於いては生殖と經濟事情との間の問題が主として論じてある。生殖と云ふことあつて始めて個人の生物學的價値は生じ、またそれに依つて個體の死滅と云ふことは不安でなくなるのであるが、この生殖のために個人が貧困になつては切角の力が力でなくなる。現代の我々は正にこの危機に臨んでゐるのであるが如何にしてこの危殆を避けるか。これを著者たちは最後の章で論じてゐる。併し確實にそれを論斷することは避けられねばならなかつたのであらう。證明はたゞ主觀的な價値しか持たない程度でなされてゐる。

註　カピタリスムス Kapitalismus のカピタルとは元來『頭』と云ふ意味である。であるから、カピタリスムスには資本主義の外に『頭大主義』『頭でつかち主義』『中央集權主義』『大都市主義』の意味があることを忘れてならない。

三、『シシフォス』

„Sisyphos, oder die Grenzen der Erziehung", von Dr. Siegfried Bernfeld. 2Aufl. 1928.

ベルンフェルドの『シシフォス』(初版は一九二五年?)は又の名を『教育の限界』と呼び、マルクシズムとフロイディズムとの調和を計つたものとされてゐる。シシフォスとはギリシアの『ホーマー』物語中に出づる人名である。彼はコリント國王であつたが、貪慾にして惡政多く、遂に下界に赴いてから極刑を課せられ、大石を山上に押上げ、漸く頂點に達するとその石は山麓に轉落せしめられる。そこで彼は再びそれを山嶺に押上げ、幾度も〳〵この無意味の勞苦を反覆しなければならない。從來の人間の教育もまたかくの如し。如何に勞力を盡しても根本の問題に觸れてをらぬから要するにみな無駄であるとの意を寓したものであるらしい。

その序文にある次の一節を讀んで見ると、大體の趣旨が分るやうである。『…教育學が教育の本質を築くのではなく、政治が築くのである。倫理と哲學とがあらゆる方面に妥當する價値に從つて教育の目的を決定するのではなく、支配階級がその權力の目的に從つて定めるの

である。教育はたゞこの非常に醜い事實を隱蔽するに理想と云ふ美しい外衣を以てするだけの事である。教育が人間の理想を實現するのではなく、今日の社會の××がより高き人間型の生じ得べき素地を作るのである。教育はそのやうな社會的限界のために自分の效果が妨げられてゐることを認識しないが故に、無教育、無教養、人非人として哲學の難じて來た人間性を永遠に續かせる一助をなしてゐるのである。

『それを主張するのは、私が最初ではない。併し拙著の「シシフォス」は目下のところ、教育書として（私の知つてゐる限りでは）唯一の書である。さうして私の主張は兒童の被教育性と教師の教育力とを非常に改善することが出來、また教育のためには窮極の希望でゞもあるところの科學――フロイドの精神分析學――を土臺とするものである。……心理學及び社會學に基礎を置く教育學は、從來も今後も認められてゐる唯一の精神科學的教育學に對立して自然科學的教育學と呼ばるべきものであり、今日なほ行はれて教育學の觀念性に對比して、唯物論的と名付けらるべきものである。』

また本論第一章の卷頭には、から云ふエピソードが紹介してあつて、これを以て本書の書き出しとしてゐる。

『フレーベルの幼稚園のために、ワイマールの教育大臣ギイデンブルーフの有力な援助を仰いでやりたいと思つて、マーレンホルツ・ビウロウ夫人が大臣を說き立て、大臣が抱いてゐる舊思想を打破しようと努力してゐた。夫人はフレーベルの方法に依つて如何に自由になるかを說いてゐた。大臣は成程さう云ふ事もあるかも知れぬと云ふ考へになりかゝつて居たやうであつた。併し自由それ自身は大臣には氣に入らなかつた。その言葉が既に危險であつた。――なにしろ時はまた一八五〇年の事だ。――マーレンホルツ夫人は急いでその杞憂を打消した。なにそれは內的の自由で御座います、自己發展を自由にすると云ふことで御座いますと云つた。併しフレーベルの方法が一般的にそれだけを目指すとは私は信じないと大臣は答へた。何となれば、人間はいつでも人間で、つまり不完全なものだ。と云ひつゝも、大臣はフレーベルの教育法援助のために出來るだけの事をするに吝でなかつた。併しまづ國內に安寧と秩序とがなくてはならぬ。』

なるほどこの物語の中には、ベルンフェルドの云ふやうに、種々の暗示がある。教育が如何に心理と社會の改變を豫想するかゞ、暗示せられてゐる。

この書は『教育學に就いて』、『教育の豫想と機能』、『教育の手段、方法、及び可能性』の三章から成立つてゐる。何れ詳細は他日に紹介する機會があらうと思はれ

る。（以上、高水稿。）

四、ボルシェギストのフロイド批判
—及び、これに對する教會側の合槌—

グルキエフ G. A. Gurjev は露國の自由思想家の月刊雜誌「アンティレリギオツニーク」に「フロイディスムスに照合されたる宗教」の標題の下に、可成長い論文を發表した。國際プロレタリア自由思想家（Internationale proletarischer Freidenker）の機關誌たるギィンの月刊雜誌『無神論者』"Der Atheist" は四回に亙つて（一九二九年六月、七月、八月、九月號）彼の露文を飜譯した。吾々は此處に論文の二三の見解を再錄するが、その際、一目瞭然たる而かも重要な誤解が、精神分析學の何處の點に對して、爲されたかは、正確に一々指摘するにも及ばないと信じる。

先づグルキエフは、精神分析學が精神療法から本來の文化哲學に迄發展した、と論じる。「フロイディスムスは歐米同時代の最も大衆的な思想と轉化し、思想の支配者となつた。」ブルジョア・インテリゲンツの廣層に亙る興味は、一時的のものではなかつた。恐らく何か特殊なものが、同時代のブルジョアジイをフロイディスムに惹きつけるのであらう。「ブルジョアの思想家等に取つては、フロイディスムスは何を措いてもマルクシスムスの重要な敵手に見える。ブルジョアジイの階級意識は、フロイディスムスを前進させ、後援し、凡ゆる方法で斯學を傳播させるのだ。」「思想の中心點と云へば、性本能の全能の法則である。」就いてグルキエフは云ふ。『之等の性本能の概念がフロイドにより一新され、改變され、更に新たな內容を追加された事は公平に認められる。フロイドが彼以前にはなべて未だ探求されなかつた多くの極めて興味あるモメントを發見したと云ふのは、一つの事實である。それは官僚的なブルジョア科學が、人間の性生活に關する凡ゆる問題を、僧侶流な僞善によつて踏みつけた爲なのだ。』併しながら彼の誤謬は『フロイディスムスが、强力な性本能は凡ての多種多樣な現象の中に、キッパリ全社會の運命を決定すると、主張する所にある。』フロイディスムスに從ふと、人間の意識は歷史的社會的存在によらず、心理的存在によつて決定されると云ふのであらうが、此のフロイディスムスの社會學上の根據の薄弱さは凡ての意識的、革命的マルクシストに取つては一目瞭然である。

グルキエフは書いてゐる。色情、性的放縱は社會的條

件から獨立して成立するのではない。寄生蟲的ブルジョアジィの生活、例へば白人の植民番兵共は色情に終始するのであらう。『それに反して、プロレタリアート及び廣汎な勤勞大衆にあつては、凡て無制限な性的衝動生活は論外である。』

フロイドは、社會學を生物學の下位に置くのであらうが、これこそマルクシズムスの精神に反して居る。社會的なものを、生物學的なものの中に解消した所で何物も解明され得ない。生産方法と人間の經濟的關係のみが、共に此處に掛つて居るのである。「フロイド派の心理學的見解は社會現象の生物學化の(種々なる)方法を示してゐるのである。正に此の故に、フロイディスムスは同時代のブルジョアジイの意見に從つてゐる。」フロイド學はブルジョアジイの墮落の産物でさへある。(沒落し始めた古代のエピクライスムスやフランス革命前の貴族階級の懷疑主義と比較。)

「歴史に對する恐怖、個人的、私人的な凡ゆる善の價値轉換、人類に於ける、生物學的なものと、性的なものの占める首位、――之等こそ此の凡ての思想現象の共通色彩なのだ。」

フロイドの性本能觀(セクシュアリスムス)は同時代のブルジュア哲學の、個々の反社會的契機を寄せ集め、揑造し、一つの煮詰められ香りをつけられた(形態になされた)ものである。レェニンのクララ・ツェトキンとの會話(一九二〇)の言葉に曰く、「私には性説の氾濫するのは個人的必要からであらうと思はれる。つまり、自分の變態的或は極端な性生活をブルジョア道德に對して正當化し、自らを許容せんが爲の努力に因るのであると。如何に革命的に、反抗的に振舞はふと、つまりは全くブルジョア的なのだ。」

次いでグルキエフは彼本來のテーマ(フロイドの宗教に關する意見)を論ずる。自由思想家たる露國のこの著者は、宗教の否認者、批評家として當然、フロイドを僚友と看做す。併しながら彼には、神の觀念、宗教的感情の將來についてのフロイドの説明は、マルクシスムスと合致しないやうに見えるのである。

フロイド學説は根柢に於いて非實證的で、その結果一面的であると云ふのだ。宗教の中に、强迫神經症を見る事は空虛な類推だと云ふのである。宗教の發生に就いてのフロイド説は、宗教の信仰觀念の内容と形式に於ける變遷を説明出來ないし、又それを未だ試みた事もなかつたと云ふのである。「宗教に於いて性的問題が第一の原則的位置を占める」べき、科學的根據は絶對にないと云ふのである。…何故なら、若し宗教の解釋にフロイドの立場を取るとすると、ロシア、中華民國、その他何千

萬の農夫等は、唯性的關係が不滿なばかりに、宗教的になるのであると云ふ結論を引き出さなくてはならぬ。」グルキエフは書く。一般に吾々の立場からするに、此の書物（フロイド「幻想の未來」）の難點は、宗教發生についての新説にあるのではなく、「宗教の結末が來るであらう」と云ふ彼の見解の證明に用ひられる立論の中にある。」

フロイドが決然、科學を宗教に對して防衛してゐるのは重要であり、フロイド個人の中に、今日のブルジョア科學が凡ての宗教を、總ての土臺を奪はれた空虛な幻想として、餘儀なく認めさせられて居る點は重要である。この故に、フロイドの著作は、吾々の過渡期に於ける意味の深い、人類の記錄として、資本主義沒落期のものとして、價値を認むべきである。そして吾々の側からは、全部が全部、廣汎な勤勞大衆の意識を、宗教の阿片から解放する爲の吾々の鬪爭の新らしい論證として用ひる事が出來る。

＊　＊

ヴィンの「無神論者」の編輯は、グルキエフの論文への案内として、ロシアの著者がマルクシスムスとフロイディスムスとの對蹠點を示さんと努める餘り、犀利に渡り過ぎたと云ふ。唯、此の論文を收載したのは、「何にせよ、自由思想家運動の實際の爲に、吾々がフロイディスムスから取れるものを、取り出す爲に、」さうした期待を以て試みたのであると。

同じく此のヴィンの雜誌は、グルキエフの論文を引き續き發表し始めた六月號に又、（ハルトヴィヒ敎授の）、前年に出版された宗教科學に就いての二著作（ピイステア「宗教性とヒステリイ」及びジョーンズ「キリスト教の精神分析に就いて」）に關する批評ばかりでなく、更に一つの論文（同くハルトヴィヒ）他の宗教批判の方法と並べて殊に精神分析學のそれを扱つたものを載せた。

ハルトヴィヒは此の點についてフロイドの一ヶ所を引用した。つまり、精神分析學は宗教の如く複雜したものを、一つの源泉から推論しやうとは試みなかつたであらう。（グルキエフの場合にも誤解が先入してゐるのを、ー脚註參照ー ハルトヴィヒも見落してゐるやうである。）ハルトヴィヒは論じる。宗教の素材は、第一、自然環境、第二、經濟的環境、第三、社會的、政治的環境、第四、精神的環境等から供せられる。此の第四番目の中に、ハルトヴィヒは、精神分析學の探求の結果を、フロイド、ジョーンズ、ピィステア、ライク、チャドヴィクの著作に從つて並列する。

＊　＊

グルキエフの連載論文の一つが「無神論者」に現はれるか現はれない中に、もうカトリックの神學者が、ヴィンの僧侶等の雑誌「ライヒスポスト」„Reichspost“に、フロイドの宗教批判は無神論者等や赤い連中(„Roten“)に取つてさへ突飛なのだと、嗤笑しながら歡聲を擧げたものである。神學者ローフス・コールバッハは、「無神論者に四回に渡つて連載されたグルキエフの論文の中、御目に掛つたのは第三回目のものだけなのだ。それに就いての御満足を、彼は、「ライヒスポスト」の八月十八日の長い論章にこめたものである。フロイドのお蔭で吾々の世紀が臺なしになつた。——過敏な(神經衰弱的の)、病的の廿世紀が、吾々の問題の解決に、これ迄最も邪道であり、暗黒面であつた道へと踐み出し、ジグムント・フロイドに至つて宗教の起源を病理學的なもの、病的なもの、神經症的な變種の中に探求せねばならぬと信じるに至つたのは、過敏な病める、神經衰弱の卅世紀に取つて顯著な事である。

扨て、神學者の著者は、教會側のみならず、「無信仰な」連中迄が、フロイドを否認すると決論して御満足の體である。そこで、前に報告したロシアの著作が指示される。「此の論文を聞くのは一種特別な刺戟であり、教訓に富むで居る。これに依つてもグルキエフと、彼と共に「無神論者」は、フロイドの思想を却け、滅すのに、或る犀利さが無くもなかつた。」

フロイドは宗教の變遷を説明しないと云ふ、グルキエフの非難を、コールバッハは敬虔な和諧音(アコルデン)で伴奏する。そして他の「フロイド學説の礎石」の一つである、「父性」については、グルキエフが「束にして片付けた」とコールバッハは直截に言ふ。

そこで、吾々の「礎石」の殘骸の上に、羅馬加特教の神學者と、激昂するモスカウ人とが、(精神分析學が先刻存知のあの)抵抗を、精神分析學に向けて、仲善く一緒に並んでゐるのを吾々は見るのである。

御存知の如く、一時に多くの方方を満足させるのは骨が折れる。所で精神分析學は、色々な方方を一網打盡に葬むるのは、遙かに容易であるのを何時でもよく心得てゐる。(『分析運動』誌、一九二九年、第三册より、伊東譯。)

(一〇一頁末から續く)

社會の敵たる犯罪者の心理をよりよく知ることに依つて、犯罪法の目的は促進せられる。社會がその敵のために辯護に立つわけになる。英國とドイツに於いては、精神分析的に見ることが判事の間に既に種々の形で必要視せられてゐる。(完)

犯罪心理の分析的研究文獻

高水力太郎

犯罪心理に關する分析學的文獻は、左に紹介したもの以外にも、まだ隨分あることゝ思ふが、只今はとにかく私の眼に偶然觸れたものだけに止めておく。

一、ロンドン犯罪學研究所に就いて

この研究所が昨年十一月に開設せられた事は本誌第二號彙報欄に紹介しておいたが、その時のはほんの事件の報道に過ぎなかつたから、只今その研究所の趣旨を、開設當日に於けるグラヴー博士の挨拶の全文が『分析運動』誌本年三、四月號上に掲げられてゐたのを、シュミーデベルクのドイツ譯から重譯することに依つて精細に紹介して見よう。

この研究所の創立者中には心理學者、法醫學者、社會學者、精神分析學者等がみな參加してゐて、日本の學者たちのやうに精神分析が科學であるかないとか呑氣な時代遲れの事は云つてゐない。もうとつくに實行の時代に這入つてゐる。こんなにまで精神分析が實用化され重視せられてゐるかと夢のやうに思ふが、併し考へて見れば、それが當然だ。日本の學界が遲れてゐるのだ。皆、相互の領分に於ける知識を碩前することに依つて學問の促進に資さうとすることは、流石に先進國たるの實を示してゐる。分析學者はフロイド、ジョーンス、グラヴー等は勿論、エーダー、リクマン、並びに私が後にその著書を紹介してゐるペイルソープ等も所員となつてゐる。

開設式は十一月二十九日に催され、出席者三百名、開會の辭と閉會の辭とはグラヴー博士であつた。司會者はグラヴー博士が述べ、祝辭その他の演說は學界の諸名士が試みた。次にグラヴー博士の開會閉會の辭を紹介しておく。

皆さん、我々の犯罪學研究所は決して途方もない幻想をなすものではないのであります。我々はこの研究所の弱點を知ると共に、將來の偉大な可能性を知るものであります。我々は世間の注意を喚起するために必要以上に大聲叱呼することを好みません。私はこの研究所が何を慾求するかを述ぶるに留めまして、この研究所の創設の如何に至當であるかに就いては、他の話者諸氏にお委せしておかうと思ひます。

研究所に就いてほんの一寸した報告をいたしておきますが、この研究所は多數の人々の確信から生れて來たものであります。確信と申しますのは、凡そ成人の國家でありますい以上、二歲の少兒の粗笨な診斷や原始的療法で

犯罪學上の諸問題を取扱ふやうなことでは駄目であるといふにありました。現代の懲罰權は原始的な權利觀念や少兒の殘酷さから事實上來てをり、または犯罪の合目的々な取扱ひの第一步は、憎惡、激怒、並びに不安を除去するにあることは確かであると思ふ。實際、我々がそれを爲し得るのはたゞ、我々が、犯罪取扱ひを原始的道德から一つの科學にまで形作らうとの學的努力を拂ふにあるのみであります。我々のかう云ふ考へは多くの思慮ある人々の齊しく考へるところであるとの假定の下に我々は玆に相集り、この研究所を創立したのであります。けれども我々がこの創立を、時もあらうにこの一般的不況時代に敢へてしたと云ふことは、如何にも輕卒であつたと思ふ向きもあるかも知れないが、併しこのさゝやかな社會的、道德的の小波はやがて大きな波に依つて併合せられるであらうし、また只今これだけの企てを立てゝおけばまた盛んな促進を受けるかも知れないと云ふ望みを以てしたことであります。

なほも少し云つておきたい事があります。この新しい研究團體の創立者の中には、種々な人道的な改革運動者のみならず、社會學的、醫術的、心理學的など、あらゆる方面の人士を網羅してゐます。――これは私の考へるところでは、なか〳〵重大なことであります。技師會長として私の知つたことは、さし迫る共通問題のために總ての意見の相違は完全に押込められてしまつたことであります。併しかうした一致だけでは研究所は出來るわけのものではありません。支持すること少なければ、それだけ仕事も出來兼ねるわけであります。我々は二三の犯人を科學的興味から處置することは出來よう、二三の講演を催すことは出來よう、新聞に論説を寄稿することは出來よう。併し大きな感化を及ぼして政府の注意を喚起することは出來ません。我々は敢然行動に出でなければなりません。それ故に我々は犯罪學界の諸權威を糾合し、それぞれの學的原理に即して相互孤立的に研究して居た諸團體を統合し、心理療法所、診療所、相談所、慈善團體などを集結し、法律家や官廳の理解とを乞ひ、大規模な博愛的支持を確保するのを、目的としたのであります。今日の會合は、その第一步を意味するのでありまず。我々が種々の團體の代表者を招待しましたのは、當研究所が皆さんに時間と精力と學識との御提供を切望するものであることを語らむためであります。如何なる團體にいたしましても、犯罪剿滅のために方策を樹て得たとすれば、それは誠に名譽なことでなければなりません。併しながら私はこれがまだ一場の夢に過ぎないであらうことを恐るゝものであります。多數の學會や研究團體を

當研究所が統一し連結せしむるに成功した曉に於いてのみ、合理的な犯罪學的運動を卷起すことが出來るであらうと信じてゐるのであります。

併し私は皆さんの内、この運動を支持せんとの用意を有せられる諸氏に、警告しておきたいと思ふのであります。我々は幾年の間、懷疑的な世間の嘲笑と輕蔑とに堪へ忍ばねばならないであらうと云ふことを……。犯罪の科學的處置に對する當研究所の事業目の一つの重要な點は次の如くであります。――犯罪の如何なる處置が爲されⅰ得るかを證明するためには、まづ如何なる處置がなされ得ないかとの重要な調査をしてかゝらなければならないと云ふことであります。

（閉會の辭）

皆さん！　この研究所は既に一年前から存在してはゐるのですが、この短い間に、人々の期待し得る總ての事を爲して來たことは、やはり人々の認めざるを得ないところであります。まづ始めにやつた事はそれ自身の組織を造り上げることであつた。それの技師團に於いては既に今までに、あらゆる分野の心理學的及び社會學的の考へ方を網羅したのであります。さき頃にはまたマリノウスキー教授とセリグマン教授とが技師團に加盟さるることを聲明せられたことを玆に報告し得るのは誠に同慶の至りであります。今や吾々は、犯罪學のあらゆる人類學的諸問題に就いて權威者の側から知識を得ることが出來るやうになりました。文明社會に於ける犯罪を理解するに就いて、人類學的犯罪學の如何に重要であるかは、今更喋々するまでもなからうと思ひます。

當研究所はまた現存の調査機關や處置機關を豫め大觀しておきたいとの企てを立て、さうして諸方面の支持を受けたのであります。ロンドンの或る病院の協贊を得て、當研究所は第一期の處置場を持つ運びになつてをります。更に吾人は、政府が諒解した場合に判事が犯人を寄越すことの出來るやうな信用ある場所の表を作製したいと望んでおります。それから、當時には何の病院にも關係を持つてゐないにもせよ、犯人の調査や處置を引受けてくれる個人、教養ある心理學者たちの人名表を作りたいと思つてゐます。

當研究所はまた所員のために、所員以外でも犯罪の社會學的、心理學的、法學的、並びに人類學的諸問題に興味を持つてゐる人々のために、段々と講演會を催すことにしてをります。吾々はまた既に、その必要ある場合には、犯罪心理に關する一層專門的な講座を催す準備をしてをります。その他、當研究所が既に企てゝゐる事業は、犯罪關係の判例や議會報告の調査であります。當研究所

の代表的特質から云つてもさう云ふ報告に關して當局の注意を喚起するのが、特にふさはしい事柄である。また現行の制度や法律を改變するやうに提言するのも、至當の事と考へられる。

それに就いてまづさし迫つた問題と云ふは、當研究所の活動のために中心となる場所を作ることである。これは純粹に管理の中心局としてもよいし、或は管理局であつて同時に調査や處置の目的のために役立つ場所——卽ち診療所——としてもよい。研究所が獨自の診療所を持ちたいと云ひ出すと、他の診療所の綱張を侵すことになりはせぬかと、あらぬ心配をする向きもあるかも知れぬが、併しこれは根據のない取越苦勞と申すべきものだと私は信ずる。第一に、現在ある診療所だけではあり餘る件數をこなし切れないではありませんか。今日も私は精神分析診療所で犯罪性のある一患者を扱ひましたが、その患者は社會的劣等感と潜在的な同性愛的傾向があつて、その上空想的な虚言をついたり盜みをしたりする。典型的な心理上の疾病併發であります。この男は自分がこれまで捕へられなかつたのは、自分に仕事を與へてくれた種々な人々の親切のお蔭だと云つてゐます。併し精神分析診療所へ豫め申込みのある患者の數は非常に多いので、我々はその患者を早くても二年の後にでなければ引受けることが出來ないのであります。ところが他の診療所もやはり患者が殺到してゐてなか／＼直ぐには引受けることが出來さうもないから、多分その若い患者は分析處置を受けるまでに、捕まつてしまふだらうと思ひます。——併し犯罪なるものは精神病でもなく神經症でもなく、（勿論兩者と關係は深いが）特殊なものであるから、獨特の技法の修練を以て臨まなくてはならないものであることは勿論である。犯罪のために特殊の調査機關と處置機關とが必要である。さう云ふ立前からして、當研究所の技師團は診療所の設立を重要なりとするものであります。

三、『我等の投獄するもの』

"What we put in prison," By G. W. Pailthorpe, M. D. (Williams Norgate, London, 1932.)

この書の著者のペイルソープは婦人である。多分警視廳のやうなところに勤めてゐる婦人醫師であるらしい。この書と同時に別に役所向きの書を著はし、それを醫術的調査顧問會と云ふものに提出したやうである。併しこの方が、自由に思ふやうに書いてあつて出來がよいと云ふことである。この書に於いて、女史は英國に於いて犯

罪學の開拓者となつたと分析學者エドワード・グラヴーE. Glover 氏は云つてゐる。以下グラヴー氏の批評を紹介する。

著者の責任ではないが、或る事情のためにこの書の公刊は大層遲れたやうである。ところが丁度その遲れてゐる間に、英國の分析學は非社會事情を帶びた子供に就いての分析研究が非常に行屆いたのであつた。そこでペイルソープ女史も勿論、最近の兒童分析知識の比較的早期のものを適用することを怠つてはゐないが、併し女史が再檢討したならば、も少し詳細に説明する必要を痛感したであらうことは疑へない。殊に犯罪行爲の大部分に就いて見られる、早期幼兒時代の不安的心境のあるものをも少し精しく説明しなくてはならないことを感じたであらう。

この書の大部分は、著者の蒐集した種々の犯罪者の心的歴史でそれにざつと分析的解釋を施したものである。併し多少とも考深い讀者ならば興味を持たざるを得ないやうな風に材料が扱つてある。犯罪科學に關する研究熱のない英國に於いて、この書の出現は非常に刺戟になることを思へば、ペイルソープ女史の功績は甚大であると云はねばならない。今や犯罪學の進歩するとせぬとに就いて責任は懸つて讀者一般の方にあることゝなつた。

三、『犯罪者とその審判者』

フランツ・アレクザンダとフウゴウ・スタウブ兩氏共著の『犯罪者とその審判者』„Der Verbrecher und seine Richter“ (Ein psychoanalytischer Einblick in die Welt der Paragraphen) von Franz Alexander und Hugo Staub. の獨文原書が精神分析學會のギイン本部の出版部から公刊されたのは、一九二九年であつたと思ふが、一九三一年にジルボールグ氏 Gregory Zilboorg M. D. に依つて英譯され、それの批評がエーデル Eder 氏に依つてなされ、『國際精神分析學雜誌』英國版の第十四卷第二部に掲げられてゐる。

この書は『犯罪の理論』と『精神分析より見たる二三の犯罪事件』の二部から成立つてゐて、『正義のための戰』、『現代に於ける正義の危機』、『行爲の判斷に於ける心理學の役割』、一般的人間現象としての犯罪』、『犯罪心理の根本としての神經症的症候構成に關する精神分析的理論』、『精神分析に依る犯罪の診斷』その他の諸章より成り、第二部は、『犯罪分析に關する方法論上の注意』、『罪障感からの犯罪』、『或る神經症者の殺人の試み』、その他の諸章から成り、最後に附錄として『懲罰者の心理に就いて』と云ふ一節が附加せられてある。

筆者はまだこの書を繙讀しないが、エーデル氏の批評に基きこの書の大體を紹介しておかう。

今から約四十年前ハヴロック・エリスが英國に於いて始めて犯罪心理に關する書物を公にした時に云つたさうである、英國は歐米の諸國よりも犯罪學に關して質量何れに於いても隔かに遲れてゐると。現に當時に於いて犯罪學に關する專門雜誌はまだ英國にはなかつたさうである。日本に於いてもまだないやうであるが、『犯罪科學』とか『犯罪公論』などゝ云ふ通俗雜誌は却つて發達して犯罪的興味を煽つてゐる。英國に於いては、その後犯罪に關する二三の著書はあつたが、四十年前と今日もあまり大差ないやうである。併し刑罰の方法は大分科學的となり、犯罪者は醫術的診斷を受け、監房の通風をよくするなど種々の改善は施された。併し英國ではまだこのやうに、物的體的の方面にのみ着眼してゐる時代であるから、精神分析が問題とするやうな內的な方面には注意を向けるに至つてゐない。

本書の著者たちは、犯罪者の心理を分析的に說明することに努力すると共に、また犯罪者に對する社會の關係、殊に法律や行政の關係を說明せんと試みてゐる。さうして犯罪者は特殊の性格型であるとの結論に對してゐる。犯罪性格に就いての彼等の研究が窮極の結論に達したと云ふわけではないが、今後の研究は彼等の示した方向と方法とに於いてなされねばならないと云ふ。

「神に見離されたばかりに俺は行かねばならない」と云ふのが、犯罪者の非犯罪者に對する直觀的な見方であつた。凡そ如何なる犯罪でもそれを聞いて自分もそれを犯さないであらうと思ふやうな犯罪はいつもないとゲーテは云つたが、併し本著者たちの見解は、たゞ神に見離れたばかりで、或者は犯罪者となり或者は犯罪者とならないで濟む、つまり犯罪者と非犯罪者とを同一無差別に見ることはよろしくないと云ふにある。著者は抑壓力を研究して見なければならないと云ふ。自我と超自我とを研究せよと云ふ。著者は犯罪者の分類を試みて左の三種としてゐる。

一、神經症的犯罪者。その反社會的行動は、心內の葛藤から結果してゐる。その葛藤に於ける無意識と抑壓力との間の緊張は、對他的に弛められる。精神神經症患者が對自己的に弛めるのと對比するものである。

二、そのやうな緊張のない常態的犯罪者。アイヒホルンに從つて著者もまた、犯罪的超自我と犯罪的自我とを、かゝる場合に認めると云ふ。

三、何かの身體的缺陷を有つ性格のための犯罪者。

これ等の題目は個々人を細かく心理學的に調査して、

それに基いて研究して見なければならない。我々はまだ、神經症的又は常態的犯罪者を精神分析的に治療した效果を知らないのである。四五の場合は首尾よく成功してゐるが、併しもつと完全に調査して見る機會が與へられなければ、殊に若い犯罪者にして刑務所に送られる以前の者をよく調べて見るのでなければ、精神分析者はまだ十分にこの方面に於いて成功し得ると云ふことを約束することは出來ない。犯罪者を遇する今日の方法は慘酷(意識的に又、無意識的に)であり、無知である――野蠻時代の遺風――ことは、心理學者たちはよく知つてゐるし、また社會の或る方面の人々も直ちにこれを認める。こんなことでは却つて犯罪者の數を多からしめるものである。懲罰を加へれば犯罪が少くなると云ふことは事實に合はない。これは犯罪者の心理を理解せざるやり方である。刑罰を受けむがために罪を犯す場合さへ、少くはない。

そこで直ちに必要になつて來るのは、心理學的の診療所である。その診療所に於いて、犯罪者を處置すると共にその心理內容を調査するのである。卽ち犯罪者を神經症者や精神病とは別に、一つの犯罪者型として調べて見なければならない。この書が出て後に、ペイルソープ博士 Dr. Pailthorp の著書が公刊せられたが、この書もまた犯罪者を肉體的に心理的に調査すべき診療所の必要を認めてゐる。併しこゝで我々が忘れてならないことは、犯罪者の心身の間の關係に就いては何も分つてゐないことである。否、抑々何等かの關係があるかどうかさへも分つてゐないことである。

アレクザンダ、スタウブ兩家のこの書が先驅となつて、犯罪者の心理がよりよく理解されるやうになり、更にこの方面の精神分析が進步するやうになれば、殊に慶ばしいことである。

四、法醫學と精神分析

フランスの法醫學雜誌(Annales med. lég. de langue franc. 1932. XII. 634—638)に依ると、一九三二年五月パリに於いて催された第十七回法醫學總會に於いて、シフ P. Shiff 氏は非常に熱心に精神分析學のために辯護を試みた。裁判的精神病學は精神分析學に負ふところ極めて大であり、前者は後者のために多大の利益を受けてゐる。犯罪學は精神分析學の力に依つてロムブロゾー式の宿命觀から離脫し、犯罪に關しても豫防や治療を云々する勇氣が出て來たのである。精神分析は刑法の改革にも影響を及ぼすであらう。よしんば、それが意識的に承認せられるかどうかは別問題としても……。(九四頁末〔ヘ〕)

講座

性的象徴に就いて

田内長太郎

無意識裡に抑壓されてゐるものは、その極めて大部分が性的性質を帶びてゐると精神分析學は見るので、それだけでも一般の人々には嫌はれるのに、この學説が性的象徴を重要視するので、愈々以て多數人に受容れられないことゝなる。既にこれまでの講座に於いて論じて來たやうに、抑壓されてゐる諸々の衝動は苟も存在する以上は、何等かの方法で意識に感ぜしめないでは居ないのだ。尤もその感ぜしめ方たるや、甚だ間接的で、それの背後にひそんでゐる意味が往々にして鑑識されない程ではあるが……。いや、實はこのやうに鑑識されないやうにすると云ふことが衝動の現れ來るに就いての本質的な一條件となるのである。さてそれ等の間接的に表れる方法の中で、最も重要なものは、象徴の方法である。

精神分析學の尠なからぬ功績の一つは、性的（その他の禁止せられた）材料が、一寸見たところでは何だか分らないやうな風に示されてゐる、その示し方を觀破した點である。私が既に云つたやうに、この性的象徴を『發見』したのが精神分析ではないのだ。精神分析はたゞこれを『觀破』したゞけである。何となれば、かゝる象徴の『發見』は、東方その他諸方面の宗教を研究した學者が既に爲し遂げてゐるからである。彼等の學者の説明に依ると（人々はなか／＼肯じなかつたが）、宗教的儀式の種々の様相に於いて、男根が一般に重大な意義を帶びてゐるのである。精神分析學の證明に依ると、この種の象徴は何も原始的民衆乃至東洋の文明に限られてゐるわけではなく、人間の心の一般的特徴であるやうに見える、といふことである。實際、精神分析學の最も價値ある貢獻の一つは、この象徴のことばかりでなく他の事柄に於いても心の多くの異なつた方面や所産の中に同一現象が觀察できるといふことを示したことである。事實、精神分析學者達が象徴の使用されてゐるのを最初に發見したのは、夢の研究においてであつた。だが、その研究が進行するにつれて、意味も形式もそれとそつくり同じ象徴が宗教、言語、儀式、神話、昔咄の中から發見されるといふことが、間もなく判然して來た。尤も、そこには象

徴使用との關係において解決されてゐない多くの興味ある問題がなほ存在する、(一)それらはここで論及することのできぬ問題である。特に、象徴がどの程度まで抑壓から生起するか、あるひはまた、全然他の理由のために成立つた表現の一樣式を、抑壓がどの程度まで使用するに至るかといふことは今なほやはり不確實である。象徴使用が原始人の心の(從つてまた文明人の原始的な心層の)必然的な避け難い一特色であるのを示す明かな證據はある。しかしながら、象徴使用と抑壓との間に緊密な關係があるといふことは指示せられる、それは無數の個々の事例の研究によるのみならず、最も一般的に抑壓されるやうに見える興味の分野――すなはち性(セクス)のそれ――は、また同時に、多數の象徴の現れる分野であるといふ普遍的事實によつてである。

註(一)　この問題はアーネスト・ジョーンズ Ernest Jones が『精神分析學についての論文』Papers on Psycho-Analysis 第三版(一九二三年)中で最も十分に取扱つてゐる。

象徴には、間接表現のあらゆる事例におけるが如く、その象徴と象徴された物との間の心的關係が存在する。この關係の發見の難易は甲の事例から乙の事例へかけて甚しく異なつてゐる。そこの關係は、かなり平明であるが、それでゐてその象徴を熟知してゐる大多數の人々からの認識をまのがれてゐる類ひの一事例として、かの『アラビヤ夜話』の中に物語られるアラディンの不思議なラムプをここへ持出さう、これはどの願望にも滿足を與へるだらうから。さて、一旦それが指摘されると、そのラムプそのものが男子生殖器の象徴であり、そしてそれから(特殊な魔術的身振りによつて)引き出される幸福は性的滿足に對する殆ど露骨とも言つてもいい寓意であるといふのはまがふべくもないことである。だが、何故にラムプがさうであるのか。この謎を解く鍵は暖氣と火の觀念である。そしてその暖氣と火の觀念は、時と所との別を問はずいつでも愛、情熱、及び肉慾(セクシュアリティ)に結びつけられてゐるやうである。それは次のやうな共通の表現を見ればわかる。例へば、「熱くなつてゐる」、「暖い抱擁」「熱烈な情愛」、「あつ物(ホト・スタフ)」、「燃ゆる思ひ」等(これを「冷淡な女」だとか「冷たいあしらひ」だとかいふのに比較してみるがよい)、また原始人の間においては(摩擦によつて)火を宗教的に創造してゐるし、現代の或種の社會においても點燈の式を營んでゐるし、すべて多くの儀式に於いて火が一役をつとめてゐるのを見れば分る。

さらに今一つ、分りやすい實例として、よく知られてゐる俗謡を取つて來よう――

あたしには、この拇指ぐらゐな、小つちやな良人があつたのよ。
あたしは彼を、三合罎の中に入れて、そこで太鼓を打たしたのよ。

文字通りにとると、これは殆ど完全なナンセンスである、だが、それを男女交接の行爲として象徴的に解釋すると、そこの意味がすつかり明瞭になる。その上、その全觀念に對する右の解釋は、そこに包含せられた個々の象徴使用の屢々生ずることによつてそれの確實なことが證せられる。その「小つちやな良人」は、「小さな男」、すなはち、男子生殖器の一代表としての侏儒、もしくは地下寸神の一事例である、その「小さな男」については一寸法師 Rumpelstiltskin 及び人形芝居の立物のポンチが最もよく知られた實例に數へられる。この場合は部分に依つて全體を代表してゐるのだ。全體に依つて部分を代表することの方が一層普通ではあるが……。男根の象徴としての拇指は下半身の重大な部分に代ふるに上半身の比較的無難な部分を以てする一般的傾向――この傾向は殊に夢に於いて顯著であるやうだ――の一實例である。三合罎といふのは極めて數多い場合の實例である。これらの場合には、容器だとか、あるひは圍つてあるところとかが、男性器の象徴と對比せられて、女性の象徴の用をするのである。

これから右の事例に對照して、もつと困難な二つの事例について述べることにしよう。袖なし外套もしくはマントが屢々男子生殖器の象徴の用をしてゐるのを示す證據がどつさりある。この場合は、その象徴と象徴せられる物との間に外形的には何らの相似もない。その兩者は非常に異なつてゐるやうに見えるので、さうした象徴が豫め考へられた理論に從つて意識的に生み出し得られるとは殆ど想像できないのである（かくして象徴についての精神分析學上の見解は、眞の實驗的基礎に立つてゐるといふ證據が更にまた加はつて來る）。さし當つて役に立つその證據――袖なし外套もしくはマントが屢々男性器の象徴の用をしてゐるのを示すその證據――の及ぶ範圍では、その見失はれた連鎖がここでも、やはり、溫めるといふ想念のうちに見出されるやうに思はれる。言ふまでもなくその溫めるといふことは外套の職能なのだ。一見してはそれにも劣らず不分明なのは、階段を上ることが交接の象徴になることである。ここで本質的に共通の考となつてゐるのは、その律動的運動と段々亢奮し苦しくなつて行くことである。然るにまた一方、言語の用法として次の如き熟語があるところを見ると確たる證據になつて來る。すなはち、「老いて脚の弱い人」"an

"vieux marcheur" と云ふ言葉が、性的無力者を意味するのである。

これまで蒐集したところでは、象徴はこの上もなく數多く、また變化に富んでゐる。とは言へ、象徴せられる物の數は比較的に少い。それらは例外なしに、感情上で重要意義をもつ物である。類別すると——

（一）人體もしくはその人體の或部分、特に性器帶域、

（二）或肉體的排泄物、精液、大便小便の如き、

（三）或人物、殊に父母、

（四）或生物學的事件もしくは作用、特に生誕と死。

右の第一類の列に加はる重要な象徴の中には、長い、先の尖つた物——いろんな武器、ナイフ及びその他の道具、蛇、魚、ツエッペリンがある、すべてそれらは男性の象徴である。それらに對應する女性の象徴は、中空で圓い物、すなはち、寶石、庭園、花等である。勃起の作用は屢々飛行によつて象徴せられる。然るに、全體としての人體は（身體にできた孔に對應する出入口や窓をもつ）建物によつて屢々代表せられるし、また（身體の凸出と凹所——解剖學上の名辭『陰阜』"Mons Veneris" と比較せよ——に符合する丘や谷を持ち、なほ毛に相當する森をもつ）風景によつて代表せられる。

岡山縣の民話だと云つて、『旅と傳說』八月號にこんな話（今村勝彦氏稿）が出てゐた。或る山寺の和尙さんが、小僧を使ひに出しておいて、毎日何かごそ〳〵してゐた。所る日の事やはり薪をとりにやられた。小僧は今日こそと思つて裏山へ行つた風を裝つて緣の下へもぐつて樣子を聽いてゐると、和尙は隣の尼寺から尼さんを連れて來て馬鹿な眞似をしてゐた。小僧は頃合を見はからつて「只今歸りました」と戶をあけて這入つた。和尙さんは慌てゝ尼さんを戶棚の中に押込んだが、あんまり急いで尼さんの足が一寸見えてゐた。「それエに早やう戾つてまだ薪は拾へらアすまア、どの方へ行つとつたら」と云ふと、「千本松原の方からびしよ〳〵谷の方へ行つてゐました」と云ふと、「馬鹿此邊にそんな處があるか、誰がそんな事を教へたら」と問ふと、「ハイ頭巾かぶりの藤兵傳さんに教へて貰ひました」

云々との問答がある。この小僧の皮肉な答辯の內に見える「千本松原」や「びしよ〳〵谷」や「頭巾かぶりの藤兵衞」が何の象徴であるかは、說明を加へるまでもなからう。

舞踏、攀上り、その他の律動的運動は交接を表示し、一方、滑ることや、齒の脫けること脫くことは、自慰的活動に對應するのだ。

第二類でわれ〳〵の見出すのは、例へば、鹽が精液の代理に立ち、金錢や紙幣が大便の、水や火が小便の代理に立つてゐるといふことである。第三類に存在してゐる一般的傾向は、父母をもつと高貴の人物に、特に王ある

ひは王妃にすることである。なほ殊に父の方は、或種の動物によつて代表されることもあらう。(この後者の象徴使用は、原始の動物崇拜(トーテミズム)と現代の神經症の小兒にある動物恐怖といふが如き一見無關係な現象を繋ぐのだ。) 第四類では、生誕が、水、穴、トンネルあるひは家へはいつて行つたり、またそれから出て來たりすることで、頻繁に代表せられる。各地の聖域にある胎内くゞりなどはみな生誕又は再生の象徴である。一方、死は死出の旅に出かけるが如き外觀を呈する。

("the departed" といふ語が死んだ人の意味に用ひられてゐること、死後の魂の旅といふ想念が斷えず繰返されてゐること、「曾て一人の旅人すらも歸つて來ぬ國」に對するハムレットの有名な論及等を比較せよ)。

これまで論じて來た直接的象徴と、或點で、異なつてゐるのは間接的代表である。例へば結婚指輪が緣組の代用をつとめたり、或種の傳統的な女性の姿が、自由だとか正義だとかいつた抽象的な德の代用をつとめたりすることである。これらの後者の事例では、象徴せられた物が、無意識にあるといふよりも、前意識にあるのである。換言すれば、それらの物を意識に上せるにおいて格別困難はないのである。代表者と被代表者との間の關係における感情的要素と、これまた兩者の事例では著しく相違してゐる。すなはち、第一類の場合には、象徴せられた物が無意識的であるので、それの有する感情的價値は、象徴の有する感情的價値よりももつと大きいのに、第二類の場合では、その正反對である。この事實は、同一物が兩種の象徴となつてゐる事例において明瞭に看取できる。例へば、蛇は男性器の代理にもなるし、智慧の代理にも立つであらう。だが、男性器に伴ふ感情は、蛇といふ觀念によつて惹起せられる感情よりももつと烈しいのに、蛇そのものは智慧といふ抽象的觀念の有してゐるよりも、感情上ではもつと大きな重要意義を有してゐるのである。實際、その二種類の象徴について考察してみると、その象徴作用はそれぞれ異なつた目的にむかふ心によつて用ひられてゐるといふ感じを甚だ強くうける——すなはち、第一の事例では、檢閲を受けない、比較的無難な事物を以て、われ〳〵の原始的慾望にもつと強く訴へる物と置換へることによつて、その全感情を節滅するのが目的である(もつとも、それと同時に、この間接の通路に托してわれ〳〵の情操(フィーリング)が或程度まで排出されはするが)。また第二の事例では、その目的が、むしろ、何か感情の伴ふた具體的事物に附屬してゐる附加的の本能的なエネルギーを、本來情熱に訴へるよりも理智に訴へる一觀念へ與へるところにある。……と云ふ感じを受

ける。
この問題の研究に最も沒頭して來たアーネスト・ジョーンズは、右の二つの事例には相異なつた名稱を用ひなければならぬと提議してゐる、すなはち「象徵」といふ語は第一種類の場合に限るべきであつて、第二種類を指す場合には、「隱喩（メタフア）」とか「記號（エムブレム）」とかいつた名稱を使用すべきだといふのである。だがかういふ風に「象徵」の意味を狹めることが、可能であるかどうか、第一望ましいことであるかどうかは疑はしい、そこで筆者は（J・C・フリウゲルと共に）、それらの事例——通常には（あるひは容易には）意識に受容せられぬ「隱れた」意味を含んでゐる場合——にふさはしい命名として、「暗號」cryptphor といふ語を試みに提議する者である。しかし、どんな名稱を採用しようとも、その兩者を區別することの心理學的の價値は殆ど疑ふ餘地はない。

精神分析語彙（四）

一、戲曲化——に於いて觀念は視覺的形態をとるから、憎らしいと云ふ觀念は相手を打つてゐたり殺してゐたりする場景となつて現れる。それを夢の戲曲化の力と云ふ。

一、擬似行爲——意識的行爲が無意識動機の混入のために亂されることを云ふ。精しくは本誌第三號八十頁參照。

一、逆意志——一つの行爲をなさんとして、それに反對する別の意志が表れること。

一、逆轉嫁——相手から一つの轉嫁作用を向けられ、それに對して、自分の方からも同じ心的態度を以て應ずること。例へば、自分を愛する者に愛を以て覺へ、憎むものに憎を以て應ずる如きである。これは分析者は又は分析を心得てゐるものは絕對に避けねばならない。轉嫁に就いては、轉嫁の條を參照。

一、逆纏綿——抑壓を保持しておくために要するエネルギー（リビドー）の支出を云ふ。我々は物的經濟生活に於いて、收入を按配して更に收入を多からしめるやうに支出するが、病氣などのは全部不生産的に浪費する。それと丁度似てゐる。この抑壓のために浪費せられるリビドーを節約する（逆纏綿を引上げる）ことに依つて、我々の心は輕くなるわけである。

一、凝縮——「壓縮」に同じ。例へば夢に於いて二つ以上のものが一つのものとして現れる如きである。

一、空想——願望が現實に於いて滿たされざる時、無意識裡に於いて代償的に作り上げるもの。

一、口すべり「云ひ損ひ」に同じ。

一、偶然行爲——症候行爲や行り損ひと同じこと。

一、經濟的見地――無意識の働きを經濟的に見る見地。右の逆纏綿の說明の如きが、それである。「局所的見地」(本誌第五號一〇七頁參照)、「動的見地」などの條參照。

一、決定觀――總て科學は何等かの事實が他の事實に依つて決定せられ、相互の間に因果關係があると云ふことを想定する。それが決定觀である。精神分析も科學である以上、無意識心理現象に於いてその見方を豫想する。本誌第四號一〇一頁參照。

一、檢閱――無意識に抑壓されてゐるものが意識化されることを妨げる心的裝置としてその存在を假定ぜられたる無意識心理的機能。

一、嫌惡の感――この感情は實は非常に好んでゐるものを抑壓してゐるがために生ずることが屢々である。これは結果に就いて、抑壓を保持するための無意識のトリツクと云ふ觀を與へることになる。

一、顯在內容――夢又は神話の外面的な筋。

一、原罪――キリスト敎に於いては人類の祖先が禁斷の果實を喰つたゝめに、人類に遺傳せられた罪惡意識と云ふことになつてゐるが、分析學に於いてはトーテム父を殺した罪惡意識と想定されてゐる。

一、原始心――文明人に殘存する原始人的心理。

一、現實――我々の心理に對立して、それ自身の原則に支配されて我々の心理の原則には拘らず獨立し、我々の心理に漸次に改變を要求するが、健全な心理は一度これに順應し、やがて却つてこれを適當な方法に依つて心理の原則に基き改變せしめ得る限りに於いて改變せしめむとする如きものである。

一、現實原則――快感原則と對立する心的二大原則、快感原則は無意識を支配し、自我は現實原則に從ふ。

一、現實試驗――故に自我は常に現實を試驗して、無意識をしてこれに順應せしめ、やがて行々はこれを改變せしむるの役目を果す。

一、攻擊慾――『人間は攻擊されゝば自己を守るだけのもので他から愛されたがるやうなしほらしい存在ではなく、寧ろ本能として他を攻擊したい願望を多分に持つてゐる者である。』(フロイド、「文明論」の中)

一、コムプレクス――『錯綜』、『復合』、『結情』など種々の譯語があるが、要するにこんがらがつてゐるものと云ふ意味である。元來、ユングの造語であるが、『抑壓されてゐるもの』と云ふ意味に西洋でも日本でも誤用されてゐる。元來の抑壓されてゐるものと何等かの點で似てゐるためにそれと錯綜されて、元の抑壓されてゐるものに伴ふ感情までが、これに轉嫁されることを云ふのである。平たい例で云へば、坊主が憎ければ袈裟までが憎いと云ふが如きは、袈裟に對して坊主コムプレクスを持つてゐると云ふのである。(未完)

彙報欄補遺

九月度研究會例會

九月例會は廿日（水曜日）夜、五時半から、例に依り、神田萬世橋驛前アメリカン・ベーカリーにて催す。

今日はA・S・ニイルの研究者として、飜譯者として令名ある霜田靜志氏が我等の案内に應じて出席せられ、今後我等と行動を共にすることを約言せられた。食後、大槻氏まづ霜田氏を會員諸氏に紹介し、同氏のスピーチを乞ふたところ、同氏は——

「藝術敎育から人間敎育へ」霜田靜志氏との題下に、自分の豐富にして興味ある談話を述べられた。また同氏が外國の雜誌に寄稿せられた敎育論文なども拜見することが出來た。次に——

「生命の象徵としての血」…長崎文治氏の話があつた。血に關する研究は氏の專攻であり、從つて得意の題目で、聽者はみな有益な示唆を受けた。やがてその推稿せられたものが本誌上に出現するであらう。第三に、——

「フェレンチの緩和法」……大槻憲二氏の話があつた。能動法としての緩和法とニイルの敎育技法との關係を述べて、興味ある實例を擧げられた。第四に——

「分析治療の成功と失敗」……矢部八重吉氏

分析治療上の種々の體驗を卒直に告白せられて、聽者は大いに得るところがあつた。

出席　は右四氏の他に、長谷川誠也、小林五郎、佐藤碁、時平さきを、則近保良、小松德、大槻岐美、伊東豐夫、北村代美子、柴崎奈美子の諸氏であつた。なほ、諸岡存、長谷川浩三、江戸川亂歩、田内長太郎の四氏からは萬已むを得ず缺席との丁寧な挨拶があつた。また奈良縣の誌友狩野三郎氏から便りがあつて、今後遂々會に出席したいと云ふ希望を申出られた。

通信欄補遺

○（東京市）高村光太郎

雜誌をいつも精讀して益を受けてをります。

○（栃木縣）島崎勝次郎

貴誌「精神分析」每號興味深く拜見致してをります。

○（長野縣）失　名　氏

御發行の「精神分析」拜讀仕りましたところ、大變結構な書籍にて小生日頃渴望のものにて、斯る雜誌の發刊は一般讀者に取りても亦斯學發展に取りても裨益する所大なりと信じ、滿腔の謝意を表する次第であります。

○（神戸市）山　田　一　郎

益々御發展奉賀候。精神分析の研究普及のため益々御精進の程念じ上げ候。この機會に於いて誌上有益なる御指導を與へられたる事を深く御禮申上候。時節柄編輯室皆々樣の御健勝を祈上候。

探訪

分析學、精神病學、神經學、心理學、教育學、などに多少とも關係する諸方面の學校、研究室、診療所、病院、相談所などを歴訪して、その樣子を讀者諸氏に紹介する目的で、この欄を設けました。各アンスタルトにとつても讀者にとつても共に便利でありますから、記者推參の節には各所の主長たる人は然るべく御案內願ひ上げます。

諸岡存博士の診療室

（一）

澁谷驛南口を出て右に向ひ行くこと一二丁、坂道の途中で右を仰ぐと、板塀の上から『腦科、諸岡』と書いた電燈が行人を見下してゐる。お醫者樣の玄關としては意外にせまく出來てゐる。玄關を狹くする人は、內向的で女性的な用心深い一面があるやうに思はれる。その狹い玄關には而も正面に主人公の銅製胸像が臺上に飾つてある。成程いかにも本物によく似てゐる。その禪僧のやうな日本的な脫俗味（惡く云へば風采の上らぬところ）は寧ろ材料として銅よりも木材を適當とするのではなからうかなど考へながら、招ぜられるまゝに應接室兼診察室に上る。正面に寢臺と藥棚とが左右に並び、右手の壁には大きな洋書棚二つ、中央に大デスクがあり、デスクと書棚との中間にはブリタニカの轉廻書棚が重々しく据つて、嚴しく背の金文字を輝かせてゐる。左手は一面に明るい硝子窓になつてゐて、庭の綠蔭が涼しさう。やがて――『いや、どうも、こないだはいろ〳〵お世話になりました。またいつも雜誌を有難う。大變立派になりまして……』

と碎けた調子で、愛想もなか〳〵いゝ。この前研究會へ來られた時は、雜誌の體裁は大變いゝが內容はどうか、まだ讀んでゐないが……と云ふ話であつた。主人公は白衣の浴衣――でも意外に派手な柄のカスリの浴衣――に袴を穿つて短軀瘦身、愈々醫學博士と云ふよりは禪僧と云ふ感じである。前かゞみに朴訥な語調で、低聲に物語るが、併し鼻柱はなか〳〵强いのである。

『今の××派の精神病學者たちはみな精神病は如何に直らぬものかと云ふことを外國へ行つ研究して來たので、直ると云ふ考へのものは容れられんことになつとる。あのM君のはアードラーから來とるのぢやが、自分ではさうは云はない。併しあれもやはり直らんと云ふ方で、直らんから諦めろ、さうすれば直らぬまゝに直ると云ふのがその根本の考へ方ぢや。そんなことならお釋迦樣でも



云つとる。いや、もつといゝ事を云つとる。私のは、直ると云ふ希望を持たせるのぢや。何事にも希望を持たぬと云ふのがプレコックスの特徴ぢやから、まづ希望を持たせにやならぬ。……』

では、その希望はどうして持たせるのか、これはなか〱大問題だが、こゝまで突込んで訊ねると長くなり遲くなるから、お話をそこまで承つて辭去した。まだ割合にお若い奥さんも玄關にまで見送つて出られた。

博士の手許にはフロイドの『日常生活の精神病理』のまだ單行本にならない以前、或る精神病學雜誌の附錄となつて發表されたものがある。これは、恐らく日本に於いては唯一の文獻であらう。博士は九州帝大出身で、博士の廣汎な興味はその師榊保三郎榊士から由來し、柳博士の廣汎な興味はドイツのチーエン博士から由來してゐるとの事。諸岡博士も、精神病學から、性格學、心理學、宗教學、哲學などにも興味を持つてゐられるやうである。凡そ人生の諸相が相互に聯關を持つてゐるものである以上、眞に生きた學者は――固陋なる學究者でなく眞に生きた現實を取扱ふ學者は――興味の廣汎であるのが當然であり、自然であり、必然であると思ふ。

併し日本の學者は興味が狹くて固陋である。興味の廣いものは何でも屋だと云つて排斥する。自分の頭の働きの鈍いことは棚に上げておいて、他人の獨創を難じ、自分の平凡と形式的概念的專門主義とを是認する。併し榊博士も興味の廣すぎるために誤解され、批難された方で晩年はあまり幸福ではなかつたらしい。チーエン博士もさうであつたと云ふから、ドイツも學界は日本同樣官僚的であるらしい。

某婦人雜誌の座談會に出席されると云ふので、迎への自動車の音が塀の外に聞えて來たから、記者はそこ〱に辭去した。（寫眞は諸岡博士）

内外彙報

『分析運動』誌第四册

同誌七八月號は先頃、當研究所に到着したが、主要論文は左の三篇である。

一、『性の心理に就いて』――エルンスト・ジムメル。（この論文はジムメル博士が一九三二年一月にベルリン放送局から二日に亘つて放送した講話の筆錄である。

二、『わがフロイド傳の改訂』――フリッツ・ギッテルス。（この論はニウ・ヨークの分析學者ギッテルスが一九二三年に公刊したフロイド傳中の、只今は著者にまで不滿な個所を訂正した論文である。ギッテルスの名はわが國では『愛の精神分析』の飜譯に依つて知られてゐる。ギッテルスは自分の舊著が學術書と云ふべくあまりに自分の氣質を出し過ぎてゐることを率直に告白してゐる。

三、『タレーランに對するナポレオンの態度に於ける無意識的動機』――エドムンド・ベルグラー。（これは一九三三年に於けるギインの國際精神分析學總會に於ける講演である。タレーランはナポレオンの外相であつた人だが、その人に對するナポレオンの心的態度が彼の一生の運命に大いな意義を持つてゐる

と云ふ事は、既に他の人も論じたが、更にその點を精しく論じたもの。

性格學と精神分析

最近の精神分析學は性格構成の機制に關する研究に多くの關心を寄せてゐると云はれてゐるが、從つて從來の性格學の方へも幾多の示唆を與へてゐることゝ信ぜられる。最近、オットー・カント O. Kant と云ふ人の『フロイドとアードラーの性格學說の批評』と云ふ論が、『ミュンヘン醫學週報』（一九三三年、第十七號）と云ふ雜誌に現れた。

この論文は、精神分析が性格の成生の發展とを合理理的に說明するのに反對してゐる。種子を見たゞけで、やがて花咲く木となることを合理的に說明することが出來ないやうに、種々な衝動（本能）が如何なる運命に遭遇したかとか、その人が如何なる體驗を持つたかと云ふことだけで、複雜な性格の構成や、就中その發展を說明することは出來ない。たゞ精神病患者や神經症的性質だけは本能の體驗に依つて說明されると云ふにある。

併しこのやうに健康者と患者との間に限界を設けて考へることは誤りである。さう云ふ考へ方に於いては素質と云ふことが重大な假定となるが、それが實際問題となると判然してゐるやうで一向判然してゐない。併し經驗と云ふことは、『常態者』の精神發育に於いても患者に於けると同樣、判然と認識するこ

とが出來る。患者も健康者も同じコムプレクスを克服しなければならない。たゞ兩者の間には量的の差違があるのみである。例へば超自我の發達の如きを調べて見るに、患者に於いても健康者に於いても、その存在の具合はさう變つたものでは無い。……これはヒッチマン氏の反駁の紹介である。

犯罪と責任

ナーグラ教授 Prof. J. Nagler の『犯罪者の素質、環境、性格』と云ふ書が本年にストゥットガルトから公刊せられた。これはやはり唯物史觀的な見方をした書物であるらしい。我々は今や古くなつた人生觀を卒業して、新しい秩序を權威とを確立する方に向つてゐるとナーグラーは云ふ。人類學、醫學、深部心理學、環境説などが犯罪學者に敎へた一切のものは放擲せられる。『犯罪はやはり完全に人格的行爲であるのだ。犯罪者は自分の意志の薄弱のために法に觸れたのである。』と云ふ主張で、『自己の責任に於いて全體のために奉仕すると云ふ風潮が來りつゝあると云ふ意見である。このやうに自我意識を强調することは確に結構であるが、併し自我の根柢に無意識の力を否定すると云ふならば、何人も贊同し得ないであらう。（これは高水氏の『犯罪心理文獻紹介』への補遺である。）

千葉博士の『無記』感情論

東北帝大、心理學敎室の千葉胤成敎授の『無記』感情に關する論文が、『分析運動』誌上に紹介されてゐる。快不快の對立的感情以外に、中立的な、多少とも無關心的な感情が存立してゐるかと云ふことが問題となつてゐる。全然、快でもなく不快でもなく、また快不快の混合でもない如き一つの感情が存在するとすれば、吾人はそれを第三の感情と名付けなければならない。心理學者テオドル・リップスもやはり快不快の中間に、無關心な（それは單に快と不快とがないと云ふだけのものではない）特殊感情を想定してゐる。佛敎の方では苦惱と歡喜と無關心な『無記』感情との三別を假定してゐる。この第三の感情からして快苦は生じ、また快苦はそれへと還元する。それは原感情（ウルゲフュール）である。この意味に於いて、我々はこれを『固有感情（アイゲンゲフュール）』と名付けてもよいと論じてあるやうである。論者が、我等にもまたその原論文一讀の機會を與へ給はゞ幸甚。

最近の國內事實

★本研究所客員丸井淸泰博士は獨墺の精神分析學界視察のため九月三日東京驛出發。

★中山太郎著『日本民俗學辭典』神田區俎橋際、昭和書房よ

り發刊、定價五圓。

★『精神分析批評の後に』（佐藤幸治稿）、――『心理學研究』九月號。

★東北帝國大學の文學部では、七月三十一日から一週間、英文學中心の西洋文學講座を公開した。その時、佐藤秀壽敎授は「現代の英國小說」が、サミュエル・バトラーの The Way of All Flesh をその先驅として、ギクトリア朝の思想に對する反抗であり、批判であり、諷刺であると說き、フロイドの感化と大戰の影響とを說明し、宗敎に對する疑義が高まり、精神分析學に重きを置き、性格の一致を無視し、寧ろ性格の矛盾を認むるに至つたとて、ジェームズ・ジョイス、D・H・ローレンス、ヴァージニア・ウルフ夫人、オールダス・ハクスリ等を擧げ、更に米國に轉じてはシンクレヤ・リウイス、ドス・パソスを擧げて現代小說の傾向を說明した由。（『英語青年』九月一日號より轉載。）

★『文學と心理學』（大槻憲二稿）――國民新聞。

★本誌前號內容に關しては本號卷末奧付上を參照の事。

第二回分析クラブ

敎科書を用ひてする講習會は既に相當永い間續いたが、近來では講習會員諸氏も漸次進境を示され、獨自の論考をされるやうになつたが、他方研究會の方では年長會員のために遠慮してなか／＼發言の機會を持たないから、暫く講習會を分析クラブと改名して、年少會員の研究發表會として既に九月十三日夜に研究所では第二回目を催したわけである。出席者は小林五郎、則近保良、伊東豐夫、小松德、小野田幸雄、佐藤基、長崎文次、下山善高、大槻岐美、大槻憲二の十名であつた。當夜は則近氏が本誌前號所載森茉莉氏稿「細い葉蔭への慾望」の分析論文を朗讀せられ、一同それを批評した。なほ、言語學と分析學との關係について種々興味ある話が出た。また十月中築地小劇場の「ハムレツト」を總見し、合評する相談などがあつて、元氣よく散會した。

質疑應答

（質）。第二號八二頁、相談欄の「結婚を嫌ふ年增娘」と「母の亂行から弟は厭世悲觀」の二項ですが、R氏は兩件とも近親姦的願望と片付けられてありますが、これは寧ろ常識的に、平凡に、前者は宗敎指導者に、後者は姉の亭主の妹に對する戀慕にあらずやと疑ふ方蓋然性に近いのでなからうかと思はれますがどうでせうか。（T生）

（答）。一般の方の御考へとして御尤と存じますが、少し深く考へて見ると、お考へのやうでは事實の說明が付きません。精神分析はあまり奇拔な事を云ふと云つて批難される向がありま

すが、奇拔でなく實は平凡なことでも、見る者の心の方に「抑壓」があると、奇拔に見えるのです。丁度、枯尾花でも見る者の心に依つて幽靈と見えるやうなものです。現にあの第一問の方の娘の心は指導者に對する淡い戀心と解した方が蓋然的だと云はれますが、それはその通りで、今更云ふまでもないことです。たゞその淡い戀心の基礎となつてゐるのが父親又はそれに近い者への幼兒的經驗であると云ふのであります。指導者に對する戀心があるならそのまゝ平氣で結婚すればよいでせうに、それを抑壓し、一切の結婚を否定してゐる。その不自然さは何から來るのでせうか。それは近親愛に必然的に見られる禁制作用から來ると說明する外に途はないのであります。宗敎の指導者と云ふものは、常に信者から無意識的に父の代償として思慕されるものであります。

第二問の方でも、姉の亭主の妹に對する戀心であることは今更云ふまでもない事であります。たゞ何故に喜んで結婚しないのでせうか。何故に愛してゐる女との結婚を忌避して寺へ行くなどゝ云ふのでせうか。そこに女一般への愛と憎との矛盾した二つの心がないと云へませうか。もし矛盾した心があるとしたらその原因はどこにありませうか。それは愛しつゝ憎まねばならない母にあると云つてどうして奇拔に過ぎませうか。母なるものは子にとつてはこのやうに亂行の人でなくても、愛したいがその愛を禁制せねばならない對象であります。況んやこのやうに亂行の人であつて見ると、いよ〳〵忌まはしいものであります。況んや母の俤に於いて戀愛する多くの若者にとつて（殊にこの場合の本人にとつて）女一般への愛を禁制しなければならないことは當然であります。かく解するのが、彼のこの場合の神經衰弱者的（通俗の意味に於ける）行動の唯一の平凡な說明となるのであります。（R）

再び滿洲から

千葉廣洋

通信

先生、御無沙汰お詫びに一筆呈上いたします。皆様お變りはないことゝ思ひます。今年の夏は如何でしたか。八月號は遲れましたが、一昨日落手いたしました。御健鬪振りには敬服する許りです。我等の機關誌も號を重ねる毎に、躍進的に内容豐富に充實して行きますね。今度の『夢の硏究』のやうに特輯號をさへ出せるやうになつたのですから大したものです。毎號の「内外彙報」、「分析關係記事」、「海外雜誌の抄錄」まで懇切に集めて下さる心使ひには全く感謝の辭もない位です。同慶の至りです。今後一層の御發展を祈つて已みません。（KO氏宛）

編輯後記

本號は何れも大論文ばかりで、二十枚以下の論文は一二しかない。堂々たる內容である。執筆者諸氏愈々油が載つて來て、原稿の多きに苦むやうになり、組方も一變して、從來十八行のところを二十行に、二十行のところを廿二、三行にしなければならないやうになつた。

×

本號に載せたかつたのは、本誌第二號に載せた矢部八重吉氏の『犯罪と罪障感との關係』である。罪障感あるために犯罪を敢へてすると云ふ心的過程は既にフロイドが說いてはゐるが、八ッ切り事件に就いてその心的機制を明かにしたのは矢部氏の功績である。本誌を讀まれた方々は並せ熟讀せられむことを希望する。

×

例に依り、執筆者中の新顏を御紹介いたします。

松川俊武氏は東京帝國大學法學部佛法科を昭和七年に卒業せられた法學士。また精神分析學の熱心な研究者でありまして、紹介せられたレヂス、エスナールの論文はフランス文獻として最初のもの。これを掲げたることはまた、松田氏と我等との功績と云つてよいでありませう。

×

則近保良氏は當研究所にて斯學を研究せられる若き心理文學研究家。分析學に對する特殊の天分ある、篤學の人であります。

×

探訪欄を今度新たに設けましたから、面白い研究や教授法や診療を行つてゐるところがありましたら、御紹介下さい。我等が思ひつくだけでも隨分澤山にあるから、その內には一回一所と云ふわけには行かなくなるかも知れない。

×

本誌は學術雜誌であり商賣雜誌と違つて質實なるものだから、製產費が高くつきます。その義御諒解あつて精々、御支援と御吹聽とを願上げます。

×

草光氏の寄贈畫はまだ多少殘つてをります。氏の繪も本誌のやうに質實なものであるが、味ふて盡くるところを知らざるよい繪であります。

研究所事業案内

一、分析部

●神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄想症その他）

●性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

●客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし。

二、教育部

●當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇その他。

●所員並に客員に對して他より依頼の講演又は講習會。

三、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

四、研究會

毎月一回開催その都度通知、出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費及び誌代共月額一圓。（但し臨時出席者に對しては誌代を別に申受く。）

五、講習會

毎月一回、於研究所開催。その都度通知。會費五十錢。

前號內容（兒童心理研究）

昭和八年九月二十日印刷
昭和八年十月一日發行　第六號
定價五十錢（郵稅一錢五厘）
東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯及發行　大槻憲二
東京市牛込區改代町廿四
印刷所　理想社印刷所

定價一部　五拾錢（郵稅一錢五厘）
半年分　參圓（送料共）
一年分　六圓（送料共）

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。

●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。

●郵券代用の場合は一割増に願ひます。

●本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所　東京市本郷區駒込動坂町三二七
東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館・北隆館

來月號豫告

戰爭心理研究號

何故の戰爭か？……………………伊東豊夫譯

アインスタイン、フロイド兩碩學が戰爭に關する問答の全文、現下必讀の大文字！

グラヴー博士の戰爭論……………岩倉具榮譯

英國新進有爲の分析學者のフロイド戰爭論批評を紹介す

戰爭神經症の治療…………………高水力太郎

世界大戰爭中に於ける分析治療事實

血に關する異常心理………………長崎文治

筆者が專攻得意の題目を捕へての、堂々たる大論文

エマスンの戰爭論…………………大槻憲二

米國大哲の戰爭論の分析的批評

ある喧嘩の心理……………………則近保良

戰爭雜話……………………………長谷川誠也

日本現代諸學者の戰爭論を讀む…記者

精神分析研究の思ひ出……………諸岡存

その他、時評、講座、內外彙報、探訪など

フロイド精神分析學全集

（第一卷）夢の註釋　定價一圓五十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第二卷）日常生活の精神分析　定價一圓七十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第三卷）社會・宗教・文明　定價一圓八十錢　送料十二錢　長谷川誠也譯

（第四卷）快不快原則を超えて　定價一圓五十錢　送料十二錢　對馬完治譯

（第五卷）性慾論・禁制論　定價一圓七十錢　送料十二錢　矢部八重吉譯

（第六卷）分析藝術論　定價一圓九十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第七卷）トーテムとタブー　矢部八重吉譯
自我とエス　對馬完治譯
定價一圓八十錢　送料十三錢

（第八卷）分析療法論　定價一圓九十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第九卷）分析戀愛論　定價一圓八十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第十卷）精神分析總論　定價二圓　送料十二錢　大槻憲二譯

東京市日本橋區
通三丁目八番地
春陽堂書店
電・日本橋・五一一番
振替東京一六一七一番

藝術殿

坪内逍遙博士會號執筆

十月號（第三卷第十號）

要目

一部　定價五十錢（送料一錢五厘）

編輯　財團法人國劇向上會　東京市淀橋區戸塚一丁目　振替（東京二〇二九〇番）

發行　梓（あづさ）書房　東京市神田區駿河臺町一ノ八　振替（東京七八六四四番）

"Fujii's Therapeutic Instrument for Nervous Disorder."

Invented by Dr. Momotaro Fujii.

Patented in Japan, England, Germany and France.

- good for any kind of illness.
- simple and easy to manipulate.
- giving no pain, leaving no scar.

Health or illness solely depends on one's nervous condition!

The perpetual use of the instrument will make one's nervous state normal, and gradually strengthen the natural power to recover; hence the happiness and rejoice of millions of people since the advent of the instrument, though it is not very long ago.

Price for one set : Yen 38.00

Parcel fee for Japan Proper; Sen 45.

.... Japanese Territories: Sen 75.

Notice : —A booklet of directions for, and explanation of the effect of, the use will be sent gratis, when applied with postage (Sen 4) to——.

Jitsugio-no-Nihon-Sha, Sales Dept.,

Nishiginza I chome Kiobashi-ku, Tokio Japan.

神經ガ正調ナラバ疾病ハ無イ

本器ハ全身ノ神經ヲ整ヘ自然治癒力ヲ增シテ疾病ヲ治シ、又健康ヲ增進セシム。

本器ハ發賣日尚ホ淺キニ拘ラズ、各家庭ニ浸潤シテ、幸福ヲ齎シツヽアリ。

藤井物理療法本院長 藤井百太郎先生發明

日英米佛獨專賣特許

藤井療器

特徵

萬病一器
効驗確實
使用簡便
無痛無痕

定價 三十八圓

送料 內地四十五錢 領土七十五錢

（本器ノ説明書及各方面大家ノ推賞文ハ郵券四錢封入申込次第送ル）

發賣所

東京市京橋區銀座西壹丁目

實業之日本社代理部

振替口座・東京・六四五〇番

昭和八年七月七日 第三種郵便物認可
昭和八年九月廿五日印刷納本
昭和八年十月一日發行
毎回一回一日發行
精神分析
第六號
定價金五十錢 郵税一錢五厘

I. Jahrgang, Heft 6, Okt. 1933. Erscheint monatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom "Tokio Institut für Psychoanalyse."

(Sonderheft für Sozial- u. Kriminalpsychologie)

Inhalt

Preis des Einzelheftes 50 Sen.

Tokio Psychoanalitischer Verlag,
327, Dozakacho, Hongo-ku, Tokio Japan.